

椿原古墳

宇土市埋蔵文化財調査報告書第20集



1997

熊本県宇土市教育委員会

椿原古墳

宇土市埋蔵文化財調査報告書第20集

1997

熊本県宇土市教育委員会



序

宇土市の位置する宇土半島基部は、九州でも有数の前方後円墳集中地帯として知られています。その中でも昭和44年に発掘された向野田古墳は、戦後県下最大の発見といわれ、私達に衝撃的な姿を見せてくれました。

ところで、椿原古墳は、宇土市が計画した農村公園内に存在し、平成7年度から8年度にわたり3次の発掘調査が行われました。この古墳の調査には、甲元眞之教授をはじめ熊本大学文学部考古学研究室の方々が、真夏の炎天下の中で発掘作業を続けられ、県内では、初めての古墳時代終わりの方墳であることが判りました。

これは本書に収録したとおり、内容的にも当初の予想を遥かに上回る極めて重要な古墳であることがわかり、貴重な成果を収めることができました。

今後は、この古墳の保存整備を実施し、市民の皆様をはじめ熊本県の歴史教育の拠点として活用されることを望みます。

調査の実施に当たっては、絶大なるご理解とご協力を賜りました熊本大学文学部考古学研究室、また調査指導を賜りました各位、並びに文化庁・熊本県教育委員会に対し、厚く御礼申し上げます。

平成9年3月

宇土市教育委員会

教育長 坂本 光隆

例 言

1. 本書は熊本県宇土市椿原町所在椿原古墳の発掘報告書である。
2. 本古墳の発掘及び整理調査は宇土市教育委員会の委嘱により、熊本大学文学部考古学研究室が実施した。
3. 発掘は第1次調査を1995年8月1日～11日、第2次調査を1995年9月1日～8日、第3次調査を1996年8月20日～29日の合計29日間行った。第3次調査・整理作業及び報告書作成は、国庫・県費補助を得て実施した。発掘調査の期間中、宇土市教育委員会の平山修一、木下洋介の両氏、宇土市史編纂委員会の富樫卯三郎、高木恭二の両氏には多大な協力と援助をいただいた。
4. 発掘調査参加者は以下の通りである。
第1次調査：甲元眞之、木下尚子、小畑弘己、山田康弘、蔵富士寛、飯田考俊、東真一、若杉竜太、美浦雄二、吉岡和哉、西山由美子、濱田智美、藤木聡
第2次調査：甲元眞之、木下尚子、小畑弘己、蔵富士寛、飯田考俊、東真一、若杉竜太、美浦雄二、吉岡和哉、西山由美子、濱田智美、藤木聡
第3次調査：甲元眞之、木下尚子、小畑弘己、蔵富士寛、飯田考俊、今村佳子、大坪志子、原田範昭、若杉竜太、尾上博一、美浦雄二、吉岡和哉、佐野朝子、西山由美子、濱田智美、藤江望、小倉卓、辻村美代子、藤原由博
5. 調査協力者：相川奈美、今田治代、稲田和加、角田徳幸、川野博之、亀田学、三木ますみ、沈奉謹、高木正文、高松幸一、田中大介、都出比呂志、鶴田倉造、中原幹彦、新納泉、古城史雄、本田浩二郎、松浦一之介、松本健郎、宮崎敬士、村山志穂、本山千絵、矢野裕介、山口健剛、梅田亜耶、宇土市農林水産課、宇土市シルバー人材センターの方々
6. 本報告書作成は熊本大学考古学研究室で行い、執筆者は文末に記した。なおⅠ調査の契機、Ⅱ地理的・歴史的環境は木下洋介氏・高木恭二氏の、Ⅲ-4-(6)宇土高校所蔵の椿原出土須恵器は富樫卯三郎氏・三島格氏・高木恭二氏の、Ⅴ-1須恵器の胎土分析は三辻利一氏・辻本良介氏の、Ⅴ-2宇土半島基部における後期古墳の変遷については高木恭二氏の玉稿をいただいた。
7. 本報告書の編集は甲元の指導の下、蔵富士が行った。
8. 報告書作成後、一切の調査資料は宇土市教育委員会にて保管される予定である。

目 次

I 調査の契機と経過	
1 調査の契機	1
2 調査の経過	2
II 椿原古墳の地理的・歴史的環境	
1 古墳の位置	3
2 歴史的環境	3
III 椿原古墳の調査	
1 周辺地形と古墳の現状	8
2 墳丘・周溝の調査	10
(1) 各トレンチの調査	10
(2) 墳丘・周溝の調査	13
3 埋葬施設の調査	18
(1) 横穴式石室	18
(2) 装飾	22
(3) 墳丘と横穴式石室の構築過程	24
4 出土遺物	26
(1) 須恵器	26
(2) 土師器	39
(3) 鉄器	39
(4) その他の時代の遺物	40
(5) 遺物の出土状況	41
(6) 宇土高校所蔵の「椿原」出土須恵器	42
IV 近世墓の調査	50
V 考察	
1 椿原古墳出土須恵器の蛍光 X 線分析	52
2 宇土半島基部における後期古墳の変遷	62
3 剝抜玄門について	70
4 椿原古墳の線刻壁画について	75
VI 結語	79

表紙写真：剝抜玄門

中扉写真：空中写真

図版目次

図版Ⅰ上：椿原古墳遠景	中：椿原古墳近景	下：西側トレンチ
図版Ⅱ上：Sトレンチ西壁断面	中：4区周溝断面	下：3区墳丘トレンチ（1）断面
図版Ⅲ上：完掘後全景	中：完掘後石室正面	下：完掘後石室側面
図版Ⅳ上：石室正面近景	中：石室側面近景	下：3区列石近景
図版Ⅴ上：3区周溝	中：3・4区周溝	下：4・1区周溝
図版Ⅵ上：刳抜玄門（1）	中：刳抜玄門（2）	下：刳抜玄門加工痕
図版Ⅶ上：羨道左側壁円文	中：羨道右側壁線刻壁画（上）	下：線刻壁画（下）
図版Ⅷ上・中・下：3区周溝内遺物出土状況（1）～（3）		
図版Ⅸ上：遺物出土状況（4）	中：近世墓1号	下：近世墓2号
図版Ⅹ：出土遺物（1）	図版Ⅺ：出土遺物（2）	図版Ⅻ：出土遺物（3）
図版Ⅼ：出土遺物（4）		

挿図目次

第1図 宇土半島基部における古墳分布図 …… 6	第26図 出土須恵器実測図（6） …… 33
第2図 椿原古墳周辺遺跡分布図 …… 8	第27図 出土須恵器実測図（7） …… 33
第3図 椿原古墳調査前測量図 …… 8	第28図 出土須恵器実測図（8） …… 34
第4図 椿原古墳西側トレンチ配置図 …… 9	第29図 出土須恵器実測図（9） …… 35
第5図 発掘区・各トレンチ配置図 …… 10	第30図 出土須恵器実測図（10） …… 37
第6図 Nトレンチ東壁断面図 …… 10	第31図 出土須恵器実測図（11） …… 37
第7図 Eトレンチ北壁断面図 …… 11	第32図 須恵器ヘラ記号集成図 …… 38
第8図 Sトレンチ西壁断面図 …… 11	第33図 出土土師器実測図 …… 39
第9図 Wトレンチ南壁断面図 …… 12	第34図 出土鉄器実測図 …… 39
第10図 3区墳丘トレンチ断面図 …… 13	第35図 出土石器実測図 …… 40
第11図 3区周溝断面図 …… 13	第36図 遺物出土状況図 …… 41
第12図 4区周溝断面図 …… 13	第37図 「椿原」出土須恵器実測図 …… 44
第13図 墳丘平面・立面図 …… 15	第38図 土人形実測図 …… 50
第14図 3区列石実測図 …… 16	第39図 近世墓実測図 …… 51
第15図 4区列石実測図 …… 17	第40図 窯跡出土須恵器蛍光X線分析 …… 57
第16図 石室実測図 …… 19	第41図 古墳出土須恵器蛍光X線分析 …… 58
第17図 刳抜玄門加工痕拓影 …… 21	第42図 出土埴輪蛍光X線分析（1） …… 59
第18図 線刻壁画実測図 …… 22	第43図 出土埴輪蛍光X線分析（2） …… 60
第19図 羨道部装飾拓影 …… 23	第44図 関連遺跡分布図 …… 61
第20図 主軸断面図 …… 25	第45図 宇土半島基部後期古墳・遺跡分布図 …… 64
第21図 出土須恵器実測図（1） …… 27	第46図 刳抜玄門を有する古墳分布図 …… 73
第22図 出土須恵器実測図（2） …… 29	第47図 天福寺裏山古墳群石室実測図 …… 74
第23図 出土須恵器実測図（3） …… 30	第48図 線刻壁画実測図 …… 77
第24図 出土須恵器実測図（4） …… 31	第49図 線刻壁画古墳分布図 …… 78
第25図 出土須恵器実測図（5） …… 32	

表目次

第1表 出土須恵器観察表 …… 45	第4表 船の文様をもつ古墳 …… 76
第2表 胎土分析データ表（1） …… 55	第5表 格子目の文様をもつ古墳 …… 76
第3表 胎土分析データ表（2） …… 56	

I 調査の契機と経過

1 調査の契機

近年、宇土市でも市街地周辺部に、新しい住宅の建設が盛んになり、元来農村部であった地域に、古くからの住民と新しい住民との混住化が進んできている。椿原古墳が位置する宇土市椿原町も、そのような地域であり、ここに、平成5年、面積約15haの農村公園が計画された。

宇土市教育委員会では、事前の踏査によりこの古墳を確認し、平成7年2月21日から23日までの間、墳丘規模の確認調査を実施した。確認調査では、直径約20mの円墳で、内部主体が横穴式石室の古墳ということで、宇土市農林水産課と保存の協議を行った。

椿原古墳は、当初の公園計画では、ゲートボール場とテニスコートの範囲に含まれていたが、敷地の北端部に位置していたため、計画変更により、墳丘を含めて約1,623m²を、現状の地形で残すことになった。

教育委員会では、この古墳の保存整備を行い、一般に公開することになり、熊本大学文学部考古学研究室に発掘調査を依頼し、調査を実施した。

第1次調査は、平成7年8月1日から11日までで、装飾のある方墳であることが確認された。2次調査は、平成7年9月1日から8日まで、3次調査を平成8年8月20日から29日までの間実施した。この発掘調査の関係者は以下のとおりである。 (木下洋介)

宇土市教育委員会関係者 (主管：文化振興課文化振興係)

平成7年度 三浦孝之 (教育長)、町田圭吾 (課長)、平山修一 (主幹)、高木恭二 (参事)、
宮田尚子 (参事)、木下洋介 (参事)、瀧上真行 (主事)、黒田秀一 (技師)

平成8年度 三浦孝之、坂本光隆 (後任：教育長)、田中盛夫 (教育次長)、中井 滉 (審議員)、
那須吉成 (主幹)、高木恭二 (市史編纂室長)、木下洋介、野田恵美 (参事)、
瀧上真行、阿田幸子 (主事)

熊本大学文学部考古学研究室関係者

第1次調査 甲元眞之 (教授)、木下尚子 (助教授)、小畑弘己 (助教授)、山田康弘 (助手)、
蔵富士寛、飯田考俊、東真一、若杉竜太、美浦雄二、吉岡和哉、西山由美子、
濱田智美、藤木聡

第2次調査 甲元眞之、木下尚子、小畑弘己、蔵富士寛、飯田考俊、東真一、若杉竜太、
美浦雄二、吉岡和哉、西山由美子、濱田智美、藤木聡

第3次調査 甲元眞之、木下尚子、小畑弘己、蔵富士寛 (助手)、飯田考俊、今村佳子、
大坪志子、原田範昭、若杉竜太、尾上博一、美浦雄二、吉岡和哉、佐野朝子、
西山由美子、濱田智美、藤江望、小倉卓、辻村美代子、藤原由博

調査協力者 相川奈美、今田治代、稲田和加、角田徳幸、川野博之、亀田学、三木ますみ、
沈奉謹、高木正文、高松幸一、田中大介、都出比呂志、鶴田倉造、中原幹彦、
新納泉、古城史雄、本田浩二郎、松浦一之介、松本健郎、宮崎敬士、村山志穂、
本山千絵、矢野裕介、山口健剛、梅田亜耶、宇土市シルバー人材センター、
宇土市農林水産課 (敬称略)

2 調査の経過

椿原古墳の調査は、1995年に第1次調査と第2次調査、1996年に第3次調査を行った。各調査の概要は以下のとおりである。

(1) 第1次調査（1995年8月1日～11日）

最初に墳丘及び周辺地形の測量図を作成し、当古墳の現状を把握した。発掘区は石室の主軸をもとに玄室の中央から4分割して、北東区から右回りに1区～4区とし、続いて主軸とその直交軸に沿って、トレンチを設定した。トレンチはおおよその方位に合わせて、N、E、S、Wトレンチとし（第5図）、それぞれの掘り下げを行った。

Sトレンチでは、石室主軸と直交方向にトレンチを拡張し、墓道の状況を把握することができた。また、N、Wトレンチでは、周溝ならびに墳丘端に施された列石の存在が、Eトレンチでは墳丘裾部がそれぞれ確認できた。その後、墳丘攪乱土および周溝内流土の除去を行い、その結果周溝が方形に巡ることが判明した。また、3区では、周溝西側に近世墓が2基検出された。墳丘の調査と平行して、主体部（横穴式石室）の調査も実施した。主体部は石室内の埋土を除去し、床面までの掘り下げを行った。その際、玄門部が刳抜玄門であること、羨道側壁に装飾が施されていることが確認できた。

日程の都合上、発掘を完了することができなかつたため、第1次調査で確認できなかつた部分については、後日第2次調査で行うこととなった。

(2) 第2次調査（1995年9月1日～8日）

第1次調査に引き続き、2・3・4区の掘り下げを行った。中でも第1次調査で検出した3区および4区の周溝の掘り下げを完了することで、列石の全体像が明らかとなった。発掘終了後、各調査区ごとの平面図・立面図と古墳全体の測量図の作成を行った。また、石室実測図の作成、装飾および刳抜玄門の調整痕を採拓した。

作業終了後、全体の写真撮影を行い、1995年度の調査を終了した。また、現状保存のため、埋め戻しを行った。なお、1995年11月12日に現地説明会を行い、地元を中心に多くの方々の来訪を得た。

(3) 第3次調査（1996年8月20日～29日）

第3次調査では、これまでの調査で明らかとなった問題点（2段目列石の有無、墳形の詳細像）の解決を目的とした。まず、埋め戻した土を除去した後、1区の掘り下げ及び周溝部分の精査を行った。

墳丘については、墳丘2段目の列石を確認するために、3区に石室主軸と直交するトレンチを設定した。その結果、列石の存在についてはその確証を得るに至らなかったが、土層の堆積状況がWトレンチ南壁と対応することが判明し、Wトレンチの調査結果から想定した石室の構築状況を追証することとなった。また、当古墳周辺における他の古墳の存在の有無を確認するため、南西部の斜面にトレンチを設定したが、古墳らしき遺構は検出されなかった。

発掘終了後、平面図および立面図の作成を行った。その後、古墳の完掘状況の写真撮影および航空写真の撮影を行い、当古墳調査の全過程を終了した。（若杉竜太）

II 椿原古墳の地理的・歴史的環境

1 古墳の位置

椿原古墳のある宇土市は、熊本県の中央部から西方へ突出した宇土半島の北東部を占め、有明海に面している。周辺の市町村には、富合町・城南町・松橋町・不知火町・三角町があり、宇土半島基部は宇土市・松橋町・不知火町のそれぞれの一部にあたり、九州でも前方後円墳が集中する地域として知られている。

椿原古墳の所在地は、熊本県宇土市椿原町字金嶽783番、726番2、726番3にあり、墳丘は、北緯32度40分54秒、東経130度38分26秒、公共座標では第II系の $X = -35.2442\text{km}$ 、 $Y = -33.7271\text{km}$ に位置し、古墳最高地点の標高は44.0mを測る。

椿原古墳は、宇土半島の主峰大岳(標高478m)から派生した丘陵端部に位置し、標高77.5mの地点から東へ延びた尾根の南側斜面にあり、傾斜が緩やかになる変換点の標高42mの緩斜面に築成された方墳である。

宇土半島基部の地形は、宇土山地と雁回山、花園台地等とその間に広がる沖積平野で形成されている。北は有明海、南は不知火海に面しているが、平野の中央を流れる大河川はない。現在の海岸線は近世までの開田によって大きく変化していて、椿原町船津は中世宇土津に比定されていて、古墳時代の海岸線は、さらに奥まで入り込んでいたものと思われる。

椿原古墳の南には、飯塚川が西から東に流れている。この河川が開析した小支谷の流域面積は比較的狭い。また、西方200mに金嶽山古墳、西方300mに東畑古墳、南西方向600mに仮又古墳が存在するが、椿原古墳から、これら後期古墳を直接望むことは出来ない。宇土半島基部の前期古墳が丘陵の頂部に位置するのに対し、後期の古墳は丘陵の斜面に位置する傾向がある。

宇土半島の山塊には、大岳・三角岳の火砕流堆積物である凝灰角礫岩や安山岩が分布している。砂岩や阿蘇山の火砕流堆積物である阿蘇溶結凝灰岩の見られるところもある。当地域における後期古墳の横穴式石室に使用された石材は安山岩であることが多い。椿原古墳の横穴式石室に用いられた石材も、周辺に露頭するものと同じである。また、椿原古墳の玄門で見られる馬門石(阿蘇ピンク石)は、ここから西方4kmの網津川の中流域に産出される。

(木下洋介)

2 歴史的環境

椿原古墳の位置する宇土半島基部の古墳時代の歴史的環境について、前期から中・後期、更には終末期にかけての古墳の動向を中心に述べることにする。

九州においては、周防灘や日向灘、それに玄界灘沿岸地域で最も早く古墳が築造されており、これらの地域にやや遅れて宇土半島基部でも前方後円墳が築かれた。つまり熊本県内ではいち早く古墳文化が波及したとみられるのである。

しかし前方後円墳が築造される以前の墓制がどのようなものであったかは不明で、今後の調査に期待せざるをえない。このことは熊本県内においても明確にはされていないのであるが、わずかに県北の玉名市東南大門遺跡において検出された墳丘墓と推測される遺構⁽¹⁾や県南の球磨郡免田町本目遺跡の墳丘墓⁽²⁾がその候補として位置づけられるであろう。

なお、このほかにも墳丘を伴わない長大な掘り込みをもった土壇墓も数カ所において検出されているが、それらは群をなし、区画などもなされないところから、階層性を考慮すれば古墳

時代の首長墓の発生や勃興とは切り離して考えておく必要がある。

半島基部における古墳時代前期の前方後円墳として最も早い時期に属すると考えられるのは、不知火町弁天山古墳である⁽³⁾。全長約53.5mで竪穴式石槨を有し、墳丘から底部穿孔土師器が出土しており、前期中葉とみられる。また、宇土市迫ノ上古墳も同じく、竪穴式石槨をもつ前方後円墳で、全長は54mを測る前期中葉頃とみられる。内部主体は不明ながら迫ノ上古墳に隣接するスリバチ山古墳⁽⁴⁾も、底部穿孔土師器がくびれ部に並んだ状態で検出された前方後円墳で全長96m、前期後半から末の所産であろう。天神山古墳もその墳丘形態からみて前期に属すると考えられ、全長は約107mある。内部主体も不明で、出土遺物も何ら知られていないが、埴輪をもたないところから前期末ころと推測できる⁽⁵⁾。

それに、松山町御手水古墳も墳丘形態は古相を呈する65～70mの前方後円墳であり、近くの向野田古墳は竪穴式石槨に舟形石棺を有する全長86mの前方後円墳⁽⁶⁾。前期古墳に特徴的な遺物を豊富に持ち、女性を被葬者とする有力古墳であることがよく知られており、前期後半の所産と考える。潤野3号墳は、内部に未盗掘で全長約5.3mの粘土槨を持つ前方後円墳であるが、墳丘の状態は必ずしもしっかりしたものではない。前方後円墳としては全長39mであり円墳とすれば径28mとみられる。墳頂部から発見された祭祀儀礼に伴う土師器群から前期後半から末であろう⁽⁷⁾。

以上、前期の前方後円墳に限って見てきたが、チャン山古墳も前期に属する竪穴式石槨をもつ円墳である⁽⁸⁾。このほかにも未調査ながらこの時期と推測されるものとして、円墳の神合古墳や猫塚古墳。前方後円墳の可能性のあるものとして潤野2号墳などもあげられる。

前期ではこれほどまでに数多くの古墳が見られたにもかかわらず、中期になると明確に前方後円墳といえるのは1基であり、その可能性もある他の1基を加えてもわずかに2基だけの、前期とは比べものにならないほど貧弱な状況となっている。

全長79mの松橋大塚古墳は、古墳時代当時は眼下に不知火海を望む場所に築かれており円筒埴輪をめぐらし、中期中ごろの所産とみなしておきたい。また、全長46mの前方後円墳とされる檜崎古墳は、墳丘形態からは若干の疑問を残しており円墳とみればその直径は22mとみられる。舟形石棺・家形石棺2基・石蓋土壙など4基がつぎつぎに並列して埋置され、中期中頃の所産とみられる⁽⁹⁾。

これらの古墳以外には前方後円墳は知られておらず、中期中頃から後半にかけての小規模な円墳が知られている。宇土市松山町から立岡町にかけての地域に分布する神の山1号墳や西潤野1号墳、西潤野2号墳、晚免古墳、潤野古墳などが、中期前半から後半にかけて築かれており、箱形石棺・家形石棺を直葬する⁽¹⁰⁾。

また、不知火町長崎にある鴨籠古墳も中期後半に築造された円墳であるが、内部主体として直弧文を線刻し彩色をほどこした舟形石棺を埋置する竪穴状の石槨である⁽¹¹⁾。

後期にあたる5世紀末以降6世紀末頃まで属する古墳の数は、やや多くなる⁽¹²⁾。宇土市石小路町の石の瀬遺跡は、古墳であると明確には決することはできないものの、円筒埴輪が検出されている。また、不知火町長崎の道免古墳は、墳丘の形態やその規模などはまったく不明ながら石の瀬遺跡のものに近い円筒埴輪が採取されている。共に5世紀末であろう。この道免古墳の近くにある国越古墳は、全長62.5mの前方後円墳の後円部に横穴式石室が築かれており、石室内や墳丘から数多くの遺物が見つかっており、6世紀前半の所産とみられる⁽¹³⁾。

同じく不知火町の塚原平古墳は直径約15mの円墳に円筒埴輪をめぐらして横穴式石室をもち、6世紀中ごろに属すると考えられる。時期的にはこれに近いやや遅れる6世紀後半頃と

思われる仁王塚古墳は、内部主体は未調査ながら、全長約47mの前方後円墳で、空壕をもつ。

中期のところで見えた松山町から立岡町につながる一群が、後期になっても引き続き古墳が築造されており女夫塚の男塚古墳・女塚古墳の2基の前方後円墳が造られる。惜しいことに主体部の大半は壊されてしまっているが、共に6世紀後半に属するとみられ、前方後円墳の終焉をものがたるものとみられる。両古墳には埴輪を伴っていないが、近くにある直径約20mの円墳である山下古墳からは円筒埴輪の破片が採取され、女夫塚の前段階に属する古墳ではないかと考えられる⁽¹⁴⁾。

終末期になると、中小の円墳が多く築かれるようになる。後期段階において最後の前方後円墳として築造された地域では、これに続く首長墓としてはやや大型の円墳がある。仁王塚古墳に続くのは鬼塚古墳であり、女夫塚の女塚古墳に続くのは三日の鬼の岩屋古墳であろうとみられる。発掘調査や墳丘の地形測量などが実施されたわけではないので、はっきりとはいえないが、巨石を用いた大型の横穴式石室が構築され、7世紀前半に属するものと見られる。

前方後円墳が築かれた地域ではないが、当該報告書の椿原古墳も、その立地や方墳に近い形状の墳丘であること、更には有蓋高坏を大量にもつ特色などを考慮すれば、首長系譜の古墳と見られ、これも7世紀前半に構築された横穴式石室である⁽¹⁵⁾。

宇土半島基部において、古墳が築かれなくなるのは7世紀中ごろであろうとみられ、円墳に横穴式石室を造るといふ基本形は踏襲しているようである。ただ、群集墳は形成しないし、横穴墓がつくられるのもわずかで、この付近では、6世紀中ごろ以降に構築された横穴式石室では長期間にわたる追葬がなされるのが一般的であったようである。たとえば、塚原平古墳では少なくとも20体以上の埋葬が確認されており、小川町年の神1号墳からも20体以上の人骨が検出されている⁽¹⁶⁾。

これまで集落の問題にはまったく触れてこなかったが、最後にこの問題について若干の補足を行っておきたい。すなわち、宇土半島基部ではこれまでのところ弥生時代以来引き続き形成されてきた拠点集落としては、境目遺跡や宇土城城山遺跡などがあり、それ以外でも、北園遺跡や小曾部南請遺跡、それに松橋大野から前田遺跡にかけての遺跡などが拠点的な集落としてよいとみられる。

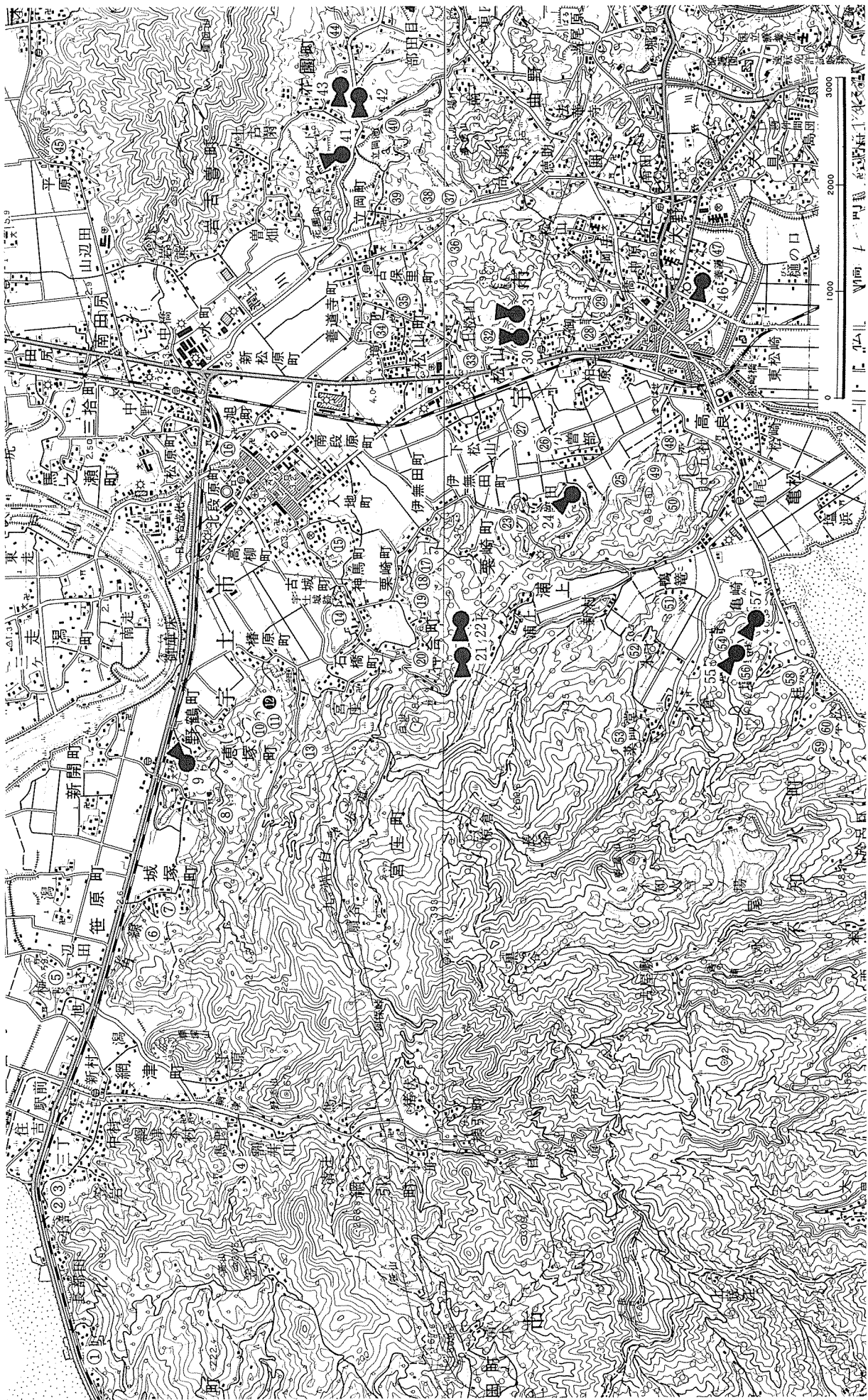
特に、前期に所属する首長居館としての中世宇土城跡にある西岡台遺跡の存在は重要であろう。はじめに見たように前期に属する前方後円墳が数多く築かれている状況の中で、短期間であれ首長層が生活ないしは、儀礼の場所として大規模な土木工事を実施しているのは事実である⁽¹⁷⁾。

前期とわかる西岡台だけではなく中・後期においてもこの地域にとって特別な場所である首長居館が幾つか営まれたであろうことは明らかであるから今後の調査に期待したいが、時期は不明ながら不知火町浦上のV字溝もこの種の居館の候補地のひとつとしてあげておきたい⁽¹⁸⁾。

(高木恭二・木下洋介)

註

- (1) 玉名市教育委員会による。
- (2) 佐古和枝「本目遺跡」免田町教育委員会、1996年。
- (3) 富樫卯三郎「弁天山古墳調査概報—新発見の肥後最古の竪穴式石室墳—」『熊本史学』第30号、1965年。
- (4) 富樫卯三郎「播鉢山古墳」『宇土市の文化財』第3集、1977年。
- (5) 熊本大学文学部考古学研究室「天神山古墳測量調査報告」『宇土市史研究』第17号、1996年。



第1図 宇土半島基部における古墳分布図 1 : 50,000 (国土地理院発行の熊本・八代 1 : 50,000を使用)

- (6) 富樫卯三郎「向野田古墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第2号、1978年。
- (7) 高木恭二・元松茂樹「立岡古墳群」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第19号、1992年。
- (8) 富樫卯三郎「茶白山古墳出土の鳥獣鏡」『石人』第106号、1968年。
- (9) 高木採集資料による。
- (10) 註7書に同じ。
- (11) 濱田・島田・梅原「宇土郡不知火村古墳」『京都大学文学部考古学研究室』第1冊、1917年。
- (12) 以下の年代推定の根拠は、川西宏幸「円筒埴輪総論」(1978年)と中村浩『和泉陶邑窯の研究』(1981年)によった。
- (13) 乙益重隆「不知火町国越古墳」『昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概報』、1967年。
- (14) 高木恭二「ヤンボシ塚古墳・檜崎古墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第13集、1986年。
- (15) 熊本大学文学部考古学研究室「椿原古墳発掘調査概報」『宇土市史研究』第17号、1996年。
- (16) 富樫卯三郎・松本雅明「小川町年ノ神古墳」『熊本史学』第15・16号、1959年。
- (17) 富樫卯三郎ほか「宇土城跡(西岡台)」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第1集、1977年。
- (18) 昭和52年頃、道路崖面に検出されたV字溝断面を高木が実見。

分布図番号一覧

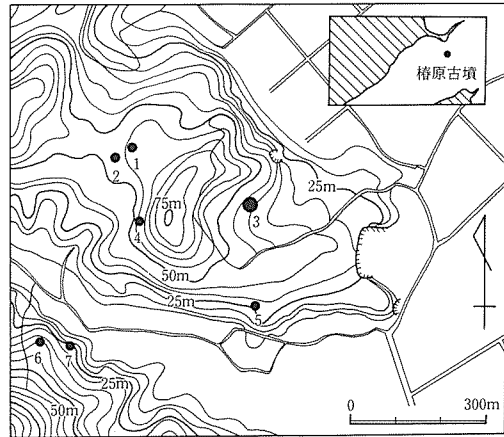
1 小池平古墳 2 小部田横穴墓群 3 御殿山古墳 4 馬門石切場跡 5 梅崎古墳 6 城塚古墳 7 尾ノ上横穴墓群 8 神ノ木山古墳群 9 天神山古墳 10 東畑古墳 11 金獄山古墳 12 椿原古墳 13 飯又古墳 14 西岡台遺跡 15 宇土城遺跡 16 石の瀬遺跡 17 城ノ越古墳 18 猫ノ城古墳 19 神合古墳 20 山王平古墳 21 スリバチ山古墳 22 迫ノ上古墳 23 大平横穴墓 24 仁王塚古墳 25 小曾部南詣遺跡 26 鬼塚古墳 27 北園遺跡 28 御領古墳群 29 宇賀岳古墳 30 向野田古墳 31 御手水古墳 32 チャン山古墳 33 桶底古墳 34 境目遺跡 35 上松山方形周溝墓群 36 神ノ山古墳群 37 西潤野古墳群 38 潤野古墳群 39 晚免古墳 40 山下古墳 41 檜崎古墳 42 女夫塚古墳(男塚) 43 女夫塚古墳(女塚) 44 三日鬼ノ岩屋古墳 45 神ノ上古墳 46 松橋大塚古墳 47 前田遺跡 48 塚原平古墳 49 大迫古墳群 50 塚原古墳群 51 鴨籠古墳 52 朱斗窯跡 53 元米の山窯跡 54 八久保古墳 55 国越古墳 56 道免古墳 57 弁天山古墳 58 塩屋浦鬼の岩屋古墳群 59 桂原古墳 60 桂原2号墳

III 椿原古墳の調査

1 周辺地形と古墳の現状

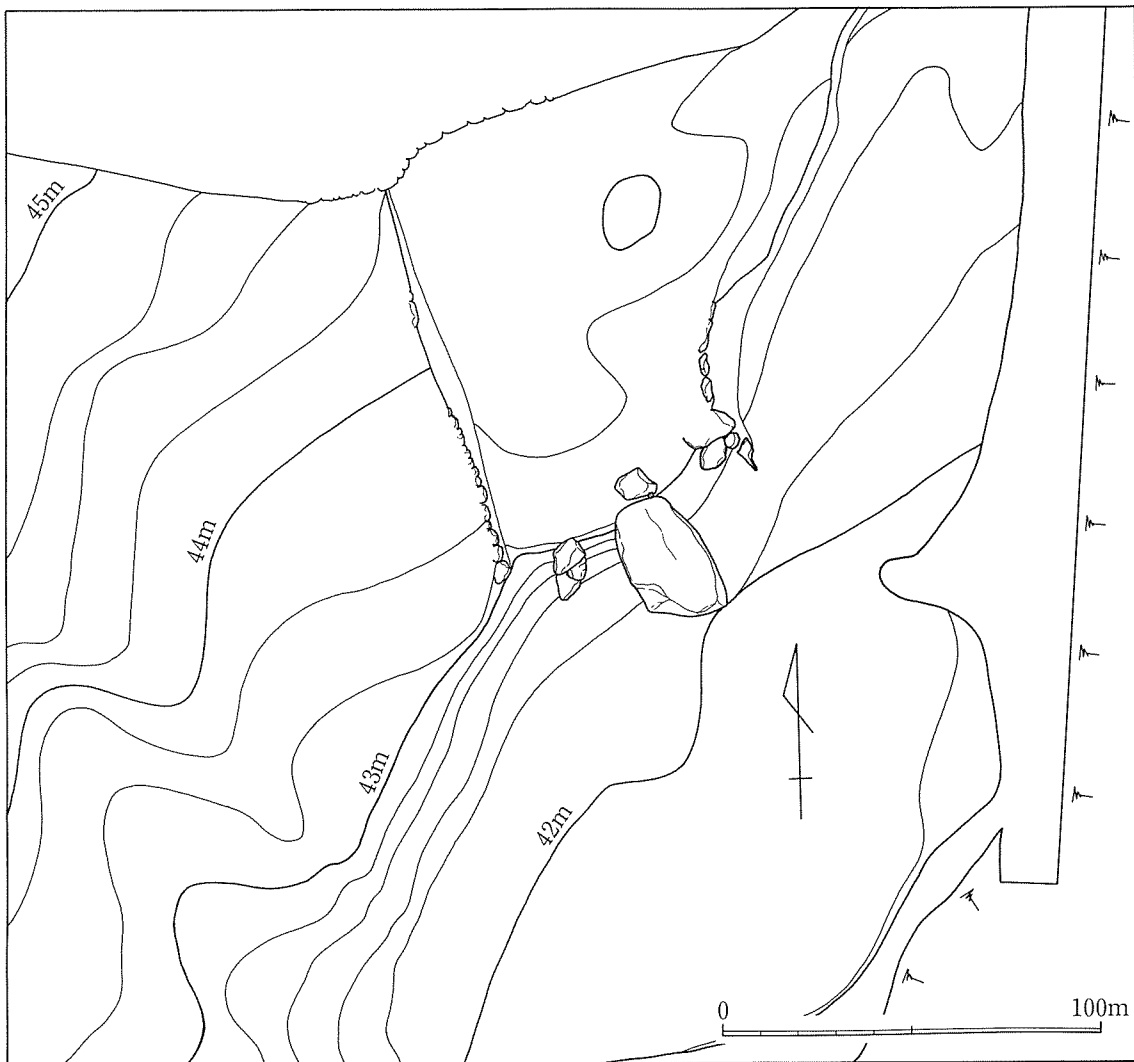
椿原古墳は熊本県宇土市椿原町に所在する。当古墳の位置する宇土半島基部には数多くの古墳が存在するが、特に古墳時代前期に相当する前方後円墳が集中して築造されており、九州の古墳文化を考えるうえでも重要な位置を占める地域でもある。宇土半島基部では現在、西側（半島側）の高峯大岳、東側の雁回山からそれぞれに伸びた丘陵の間に南北に長い狭隘な平野が存在しているが、この部分は古墳時代にあつては低湿地であり、今日宇土半島基部に相当する地域はこの低地を挟んで東西に分断されていたことになる。

椿原古墳はこの低地西側（半島側）のやや北よ



第2図 椿原古墳周辺遺跡分布図

- 1 東畑1号墳 2 東畑2号墳 3 椿原古墳 4 金嶽山古墳
5 椿原石蓋土塚墓 6 仮又1号墳 7 仮又2号墳



第3図 椿原古墳調査前測量図

りに位置し、現在つつじヶ丘自然公園が存在する標高約78m程の丘陵東側に広がるゆるやかな斜面の中腹、標高にして43mの部分に位置する(第2図)。

調査前、椿原古墳は石室天井石が露出し、周辺には石室石材が散乱しており、墳丘はその存在すら分からないほどに削平を受けていた。古墳の北側一帯は雑木林であり、古墳西側には雑草の生い茂った荒地が広がっている。この荒地はつい最近まで畑として利用されており、そのため古墳周辺は、ほぼ南北方向にちょうど墳丘を横切るような形で石垣が配され、段状に改変されている。また古墳の南・東側では農業公園造成のため、丘陵は削り取られ、すぐ間近まで整地が進んでいる(第3図)。

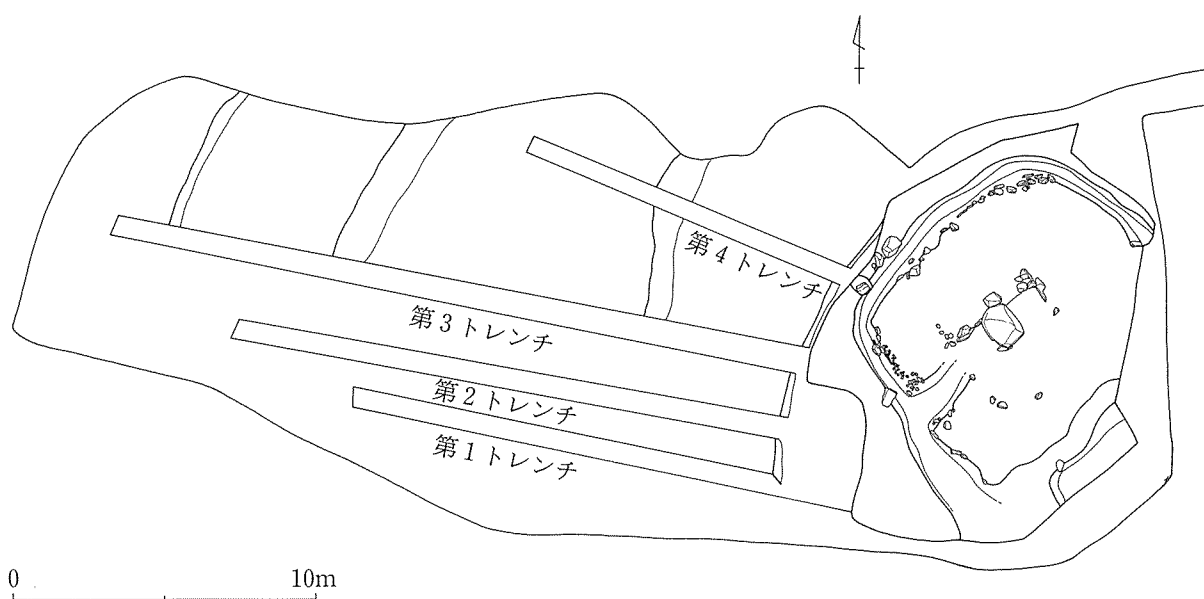
概報⁽¹⁾では、当古墳近辺に他の古墳が存在する可能性を指摘したが、確認のため第3次調査時に古墳西側の荒地部分45mにわたってトレンチ数本を設定し、調査を行なった(第4図)。このトレンチでは古墳らしき遺構、そして古墳時代に相当する遺物も認められなかった。椿原古墳が存在する丘陵からその南側の谷を挟んで対峙する丘陵にかけての地域一帯には、6世紀後半～7世紀にかけての古墳がいくつか存在する(第2図)。いずれも横穴式石室をその内部主体として採用しているのだが、その数は少なく、密集して群をなすというより散在する傾向にある。広く宇土半島基部地域全体を見渡しても同様で、比較的後期古墳が集中する高良丘陵(高良古墳群)を除けば、多くて2・3基の古墳が一群をなすのみである。また概報で指摘した他の古墳存在の根拠の一つとなった須恵器は当古墳に伴うものであることが今回判明し、以上のことを考え合わせれば、この周辺に他の古墳が存在する可能性は低いものと考えられる。

横穴式石室を内部主体とした古墳の大規模な群集化が比較的低調であること、これは肥後地域における後期古墳の大概な傾向を示しているのだが、横穴式石室墳の群集化にかわるものとして、肥後地域では横穴墓の発達が挙げることができる。しかし、宇土半島基部ではこの横穴墓すら顕著には認められないのであり⁽²⁾、このことは当地域における古墳時代後期の社会の在り方を考えるうえで重要な問題であるといえる。(藏富士寛)

註

(1) 熊本大学文学部考古学研究室「椿原古墳発掘調査概報」『宇土市史研究』第17号 1996年。

(2) 松本健郎「中九州の横穴」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982年。



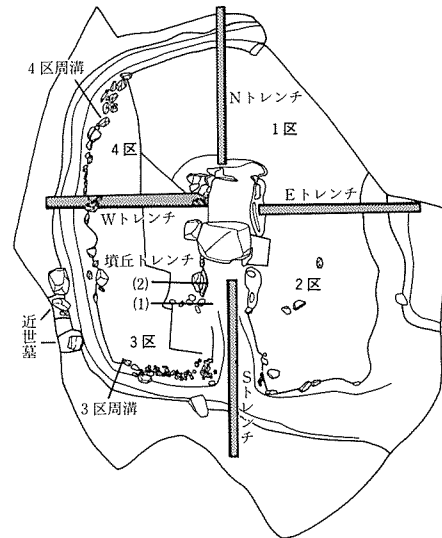
第4図 椿原古墳西側トレンチ配置図

2 墳丘・周溝の調査

(1) 各トレンチの調査

椿原古墳を調査するにあたって、玄室を中心に石室主軸をもとに古墳を4分割し、北東側の発掘区から時計回りに順次1区～4区と命名し、それぞれ軸線に沿って幅50cmのトレンチを設定した。これらはおおよその方位にしたがってE, W, S, Nトレンチとする。また墳丘の上部構造を調べるためのトレンチを3区に設け、周溝における埋土の堆積状況を確認するために、3区と4区の周溝のコーナー部分にセクションベルトを残し、土層の堆積状況と出土遺物の観察を行った。

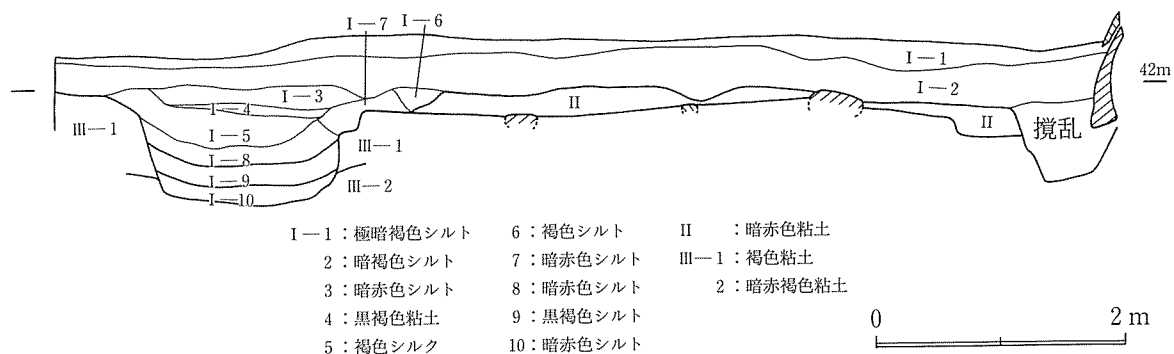
以下に各調査について所見を記す。



第5図 発掘区・各トレンチ配置図

a. Nトレンチ (第6図)

玄室奥壁から墳丘端部および周溝まで設けたトレンチである。地山層 (Ⅲ-1層) 上面近くまで削平を受けており、墳丘盛土 (Ⅱ層) はごくうすく残存しているに過ぎない。玄室奥壁の石材は大半が割り取られており、そのためトレンチ石室側では大きく攪乱を受け、石材が割り取られた際の石片が多数、攪乱坑に埋め込まれていた。しかし奥壁材の残存部分を見る限り、奥壁材は地山層・基盤層 (Ⅲ-2層) を掘り込んで、その上に据えられていることが分かる。また周溝も地山層・基盤層を掘り込んで造られている。周溝の幅はおよそ1.5m、その掘り方はかろうじて基盤層に及ぶほどのもので、基盤層自体にはそれほど明確な掘り込みはなされていない。なお、他のトレンチで確認された列石は当トレンチでは確認できなかった。これは攪乱 (Ⅰ-6・7層) による影響とも考えられる。

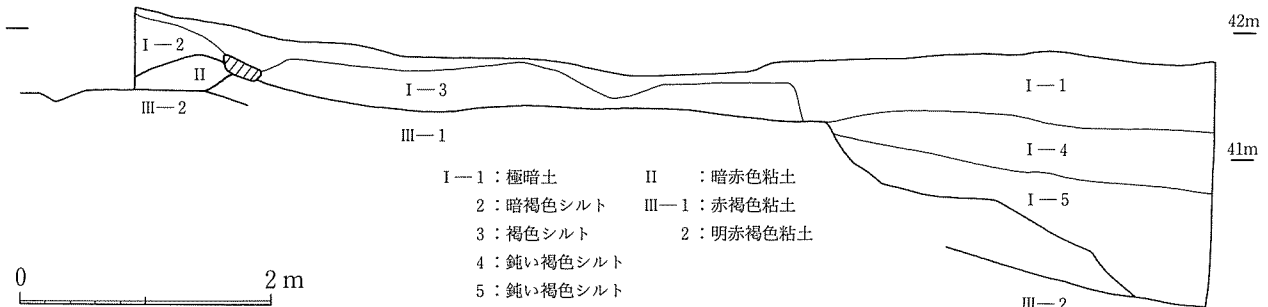


第6図 Nトレンチ東壁断面図

b. Eトレンチ (第7図)

玄室右側壁から墳丘端部まで設けたトレンチである。地山層 (Ⅲ-1層) 上面まで削平を受けており、墳丘盛土 (Ⅱ層) は石室の際に、わずかにその痕跡を留めるに過ぎない。玄室右側壁の石材は抜き取られ、その掘り方のみが残存する。玄室床面は基盤層 (Ⅲ-2層) を整地して造られており、その際、基盤層を掘り込み、そのうえに右側壁石材を据え置いたのであろう。地山層は玄室側壁より6.6m付近の地点より落ち込み始め、基盤層に達する地点で再び平坦となる。墳丘端部は地山表土層の落ち込みと基盤層との接点 (玄室側壁より7.8m地点) に求めることができよう。

このトレンチでは間近に護壁コンクリートが迫り、墳丘端部より先の様子は不明だが、当トレンチでの所見をみる限り、基盤層は平坦で掘り込みは認められず、古墳東側には周溝は巡っていないものと考えられる。これは当古墳を完掘した際の2区の所見からも類推できる。なお、当トレンチでは列石は認められなかった。

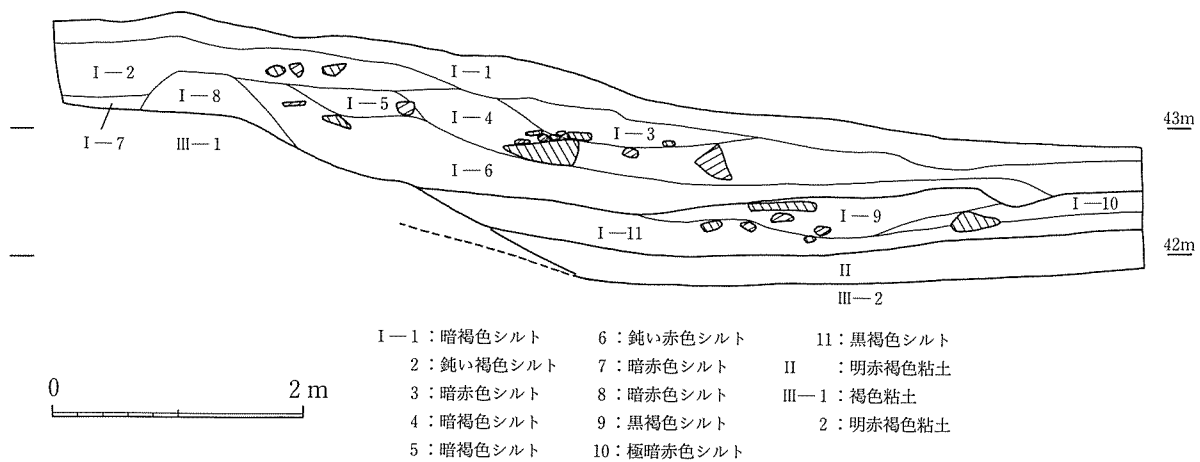


第7図 Eトレンチ北壁断面図

c. Sトレンチ (第8図)

石室主軸に沿って墓道部分に設けたトレンチである。トレンチ南側で基盤層(III-2層)が立ち上がり、周溝外側の土手部分となる。基盤層上に床面整地層(II層)があり、この上面が墓道として実際に機能していたものと考えられる。基盤層と床面整地層は土質が極めて類似しており、これ以上の細分は困難であったが、床面整地層中から台付短頸壺(第27図3)が出土しており、したがってII層上面は最終使用面としてとらえられるもので、それ以前の段階での墓道床面の整地を想定せねばならないであろう。

このトレンチ中からは多くの遺物が出土した。特に黒色土層(I-9~11層)中からは顕著で、古墳破壊によって転落した列石を含む、多くの石材とともに多量の須恵器が出土している。



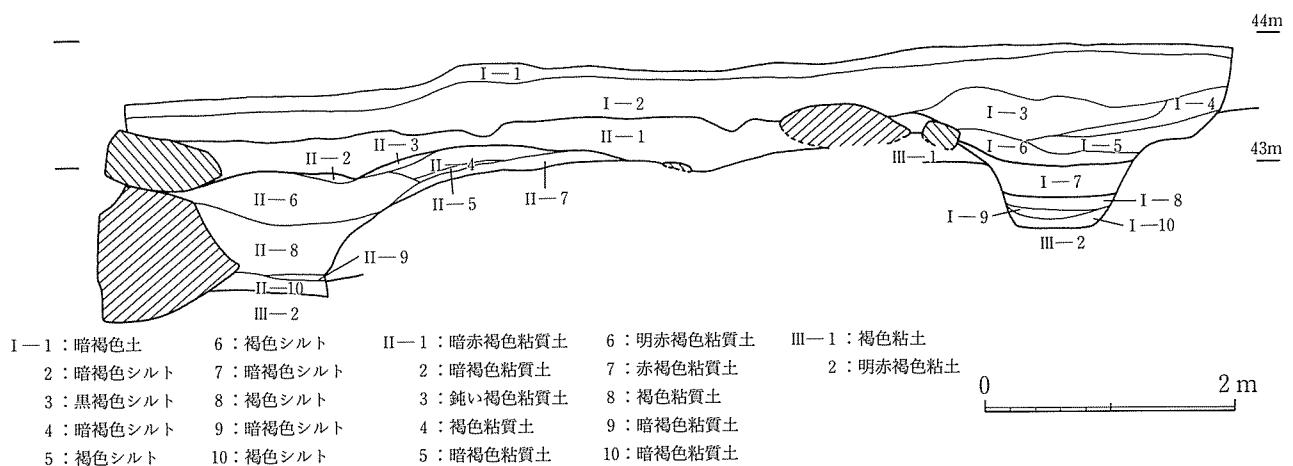
第8図 Sトレンチ西壁断面図

d. Wトレンチ (第9図)

玄室右側壁から墳丘端部および周溝まで設けたトレンチである。墳丘盛土が、わずかではあるが他のトレンチに比べて比較的よく残存しており、石室の構築状況や列石の様子などが観察できた。I-1、2層は攪乱層、I-3~10層が周溝内堆積土で、II-1~10層までが墳丘盛土にあたる。まず、石室の築造過程をみていくことにする。

まず、地山層（Ⅲ—1層）上面で整地を行い、後に周溝及び石室構築面を掘り出す。石室を構築する部分は斜面をカットして平坦面を造りだし、周溝底部や石室構築面では基盤層（Ⅲ—2層）まで掘り抜かれる。整地部分の表面には腐食土と思われる黒褐色土が薄く広がっており、この最初の整地の後、次の作業に移るまでは、しばらくの時間経過が想定できる。次に石室最下段の石を据え、その石と整地時の段部分との隙間に土を充填していく（Ⅱ—2～10層）。この部分には薄い層が幾重にも認められるという、入念な作業がなされており、これはのちの盛土作業とは大きく異なる。したがって腰石上端のレベルを作業上の一工程とすることができる。この後に2石目を積み上げ、盛土を行う（Ⅱ—1層）。列石は地山層上から設けられており、盛土の流失を防ぐ、土留めの役割をも果たしていたことが分かる。

周溝は幅1.2m、深さ0.7mで断面は逆台形を呈する。基盤層に0.5mほど、しっかりと掘り込まれ、土手の立ち上がりも明確である。



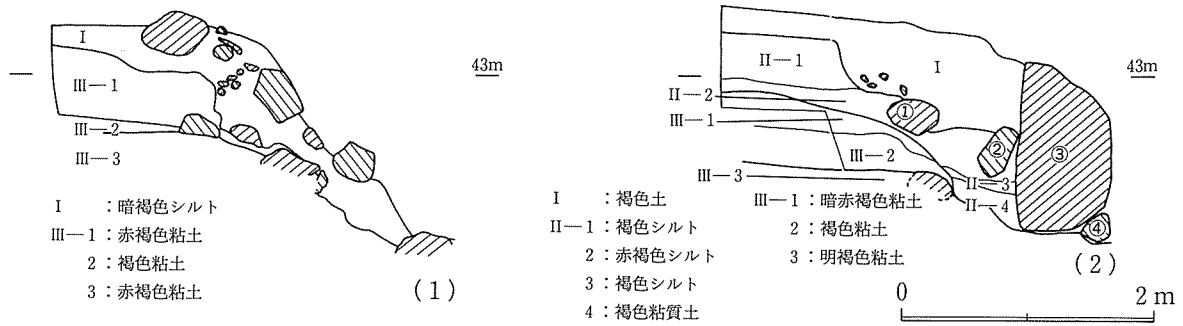
第9図 W トレンチ南壁断面図

e. 3区墳丘トレンチ (第10図)

現状では石室左側壁前方に多くの石材が散乱していた。位置的にみて、墳丘2段目の列石である可能性が考えられたため(概報参照)、これら石材の状況を確認するために、石室主軸と直交する形でトレンチを設けた。この石材の状況を示したのが第10図(1)である。I層は古墳破壊時の流土で、散在している石材はすべて流れ込みによるものであることが判明した。

この破壊の状況を把握するため、トレンチをさらに北東側に拡張したものが第10図(2)である。I層が攪乱層、II—1～4層が墳丘盛土で、III—1、2層が地山層、III—3層が基盤層である。W トレンチと同様、ここでも地山層及び基盤層を段状に加工し、石室側壁との間にII—1～4層を充填している様子がみとれる。

このセクション図にも多くの石材が存在する。石③は石室側壁材、②は裏込め材、④は根石にそれぞれ相当する。他は自然礫である。ここで問題となるのが石①の性格である。これは明らかに墳丘盛土中の石材であり、自然礫や他所から滑落してきたものではない。概報において列石2段目の存在を想定したが、2段目が存在するとすれば、位置的には①が2段目列石最下段の石材である可能性がある。しかしこのような石材が認められるのは、このトレンチにおいてもまた3区墳丘上においてもこの部分のみであり、調査の所見からでは墳丘2段目の列石の存在を積極的に肯定することはできなかった。



第10図 3区墳丘トレンチ断面図

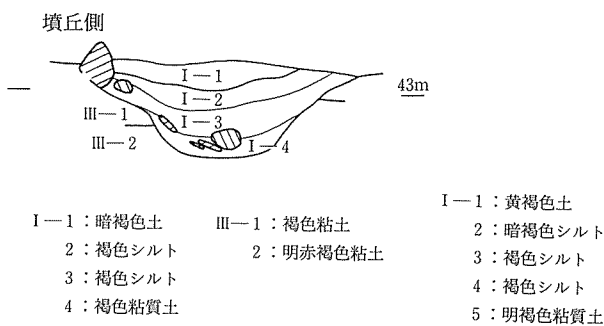
f. 3区周溝 (第11図)

3区周溝のコーナー部分にセクションベルトを残し、その堆積状況を調べた。周溝の幅は1.9m、深さは0.7mで、地山層 (III-1層) 及び基盤層 (III-2層) を掘り抜いて造られている。地山層に比べて基盤層では掘り方が急になり、はっきりと溝が意識されているのがわかる。列石は地山層上に施されており、ここでも墳丘盛土の土留めとして機能しているのが分かる。

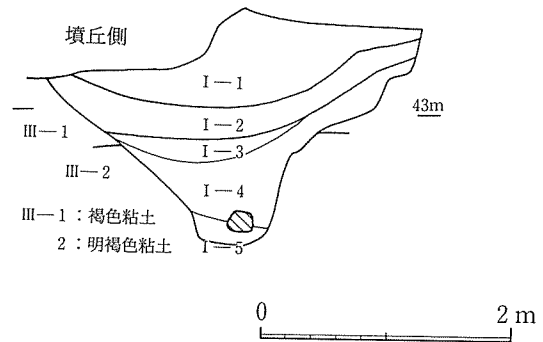
I-1～3層が遺物包含層で、最下層のI-4層には遺物を含まない。また列石が落ち込んだものと考えられる石材はI-4層中に含まれる。

g. 4区周溝 (第12図)

4区周溝のコーナー部分における堆積状況である。周溝の幅は2.3m、深さは1.1mで、3区に比べて若干周溝が深くなり、基盤層 (III-2層) を0.9mも掘り抜いている。墳丘側では掘り方が比較的ゆるやかなのに対し、外側では急角度となる。しかし墳丘側においても底から20cmほどまでは土手がほぼ垂直に掘り抜かれている。4区において遺物はほとんど出土していない。(藏富士寛)



第11図 3区周溝断面図



第12図 4区周溝断面図

(2) 墳丘・周溝の調査 (第13～15図)

今回の調査では古墳の全面的な発掘を行った。その結果、大規模な破壊にもかかわらず、墳丘の構造などいくつかの知見を得ることができた。これまでに述べた各トレンチの所見を加味し、以下 a. 墳丘 b. 周溝 c. 列石 の各項目について調査結果をまとめていきたい。

a. 墳形

前述したように、椿原古墳は大きく破壊を受けており、墳丘はほとんど残存していない。しかし3・4区においては、周溝や列石の様子から墳丘がある程度類推可能である。

周溝が明確に認められるのは、3・4区、つまり古墳の山側部分においてである。この部分では周溝は基盤層を深く掘り込んで造られており、4区ではその深さが1.1mにも達する。ここで周溝の様子を観察すると、墳丘南西辺・北西辺の周溝は直線的であり、古墳北隅において若干丸みを帯びている。全体的にみれば、周溝はおおよそコの字形を呈しているといえよう。また列石に注目すれば石室正面、つまり墳丘南西辺の3区側に施された列石は極めて直線的に配され、墳丘北西辺に施された列石も直線的であるが、ただ古墳北隅、4区の列石はなだらかなカーブを描いており、したがって周溝も隅丸の状態で墳丘北東辺側に続いている。

まず全体の様子から判断すれば、円墳、つまり円形原理を基調として当墳丘が企画されたのではないことが分かる。後世の削平により、列石の多くが破壊され、1・2区、特に2区墳丘南側隅の墳丘端部が判然としないため、墳形はあくまでも推定の域を出ないものであるが、周溝及び2区列石の状態を根拠に当古墳を方墳であると判断しておきたい。したがって、墳形は石室主軸側が若干長い略方形を呈し、その規模は長辺（石室主軸側）19m、短辺18mである。

b. 周溝

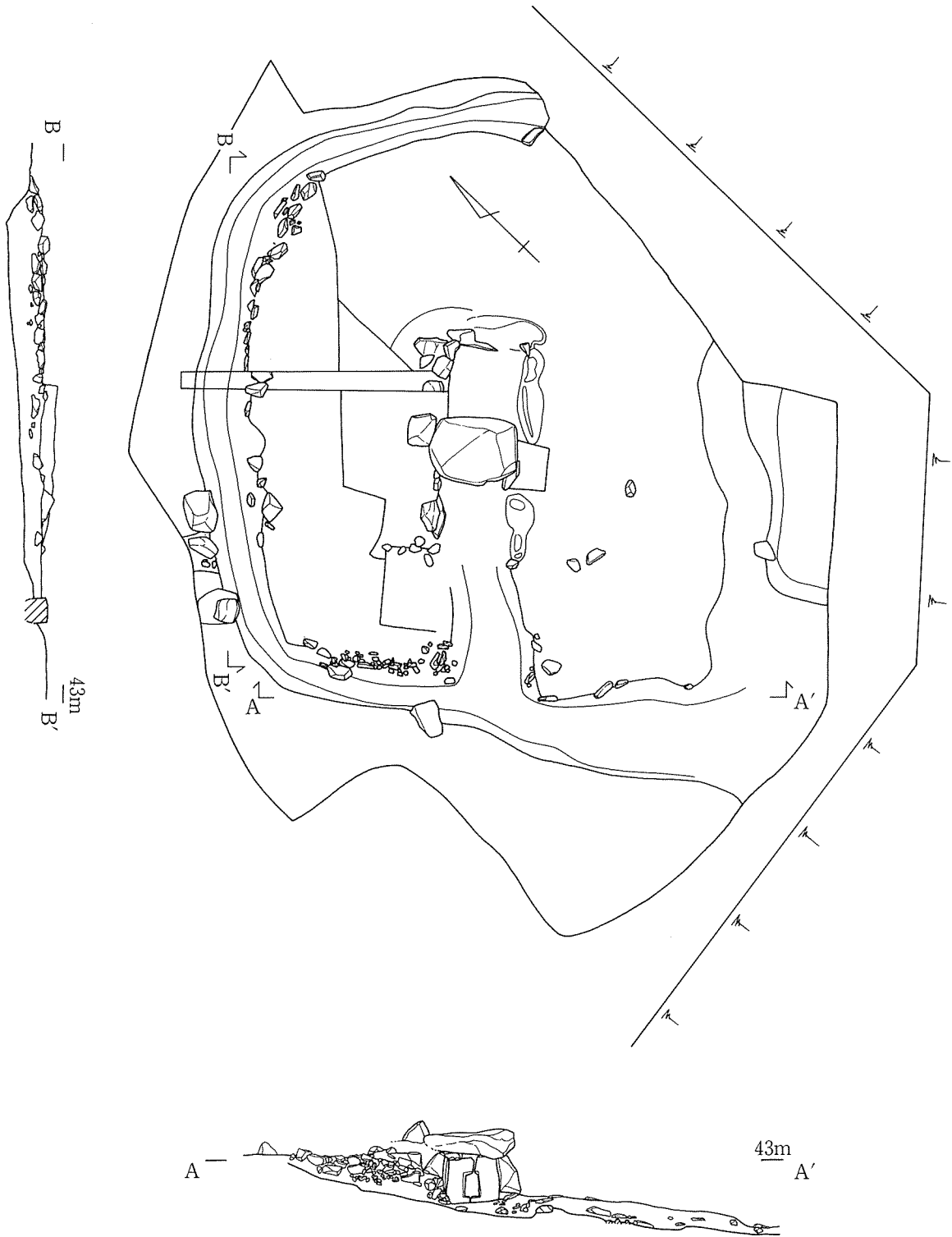
周溝が明確に認められるのは、古墳の山側部分であることは既に述べた。その深さにおいても顕著なのが墳丘北西辺側の周溝である。それから周溝が南東方向にのびるに従って、その深さは浅くなる。また掘り方においても北西辺（山側）では周溝底が幅狭で土手もしっかりと立ち上がっているのに対し、北東辺、南西辺では基盤層をわずかに掘り込むのみで、周溝底も幅広、立ち上がりもゆるやかである。以上から椿原古墳の周溝は丘陵斜面を断ち切り、墳丘を削り出すため山側にのみ施されたものといえ、したがって周溝は全周せず、下るに従って省略されることも容易に理解できる。

また周溝底に注目すれば、そのレベルも一様ではなく、自然地形と同じように傾斜している。つまり、山側が高く、下るに従ってしだいに周溝底のレベルも低くなっているのであり、この周溝の在り方から考え合わせれば、墳丘は山側で薄く、1・2区にいたってしだいに厚くなる若干いびつなものが想像できる。

周溝が明確に彫り込まれているのは3・4区までである。1区においては大半が削り取られているため詳細は不明だが、2区では基盤層にまで及ぶ掘り込みがほとんどみられないことから、周溝は山側部分にのみ施し、下るに従ってしだいに省略されているものと考えられる。また2区では周溝幅が広がっているように見えるが、これは石室の墓道と交差しているためであり、墓道は羨道から真っすぐ伸び周溝と交わった後、ほぼ直角に南東方向に折れ曲がる。したがって2区における周溝は、墓道としても機能しているものといえる。

c. 列石

3・4区墳丘端部では一部列石が施されていた。列石は安山岩によるもので、多くは自然石そのものを用い、多くは外面の面取りといった加工は施されていない。列石は墳丘や周溝におけるトレンチ調査でみたように地山上、つまり墳丘盛土の部分に施されている。したがってその機能としては墳丘の崩落を防ぐ土留めが第一に挙げられよう。まず以下では3・4各区における列石の状態について述べていきたい。



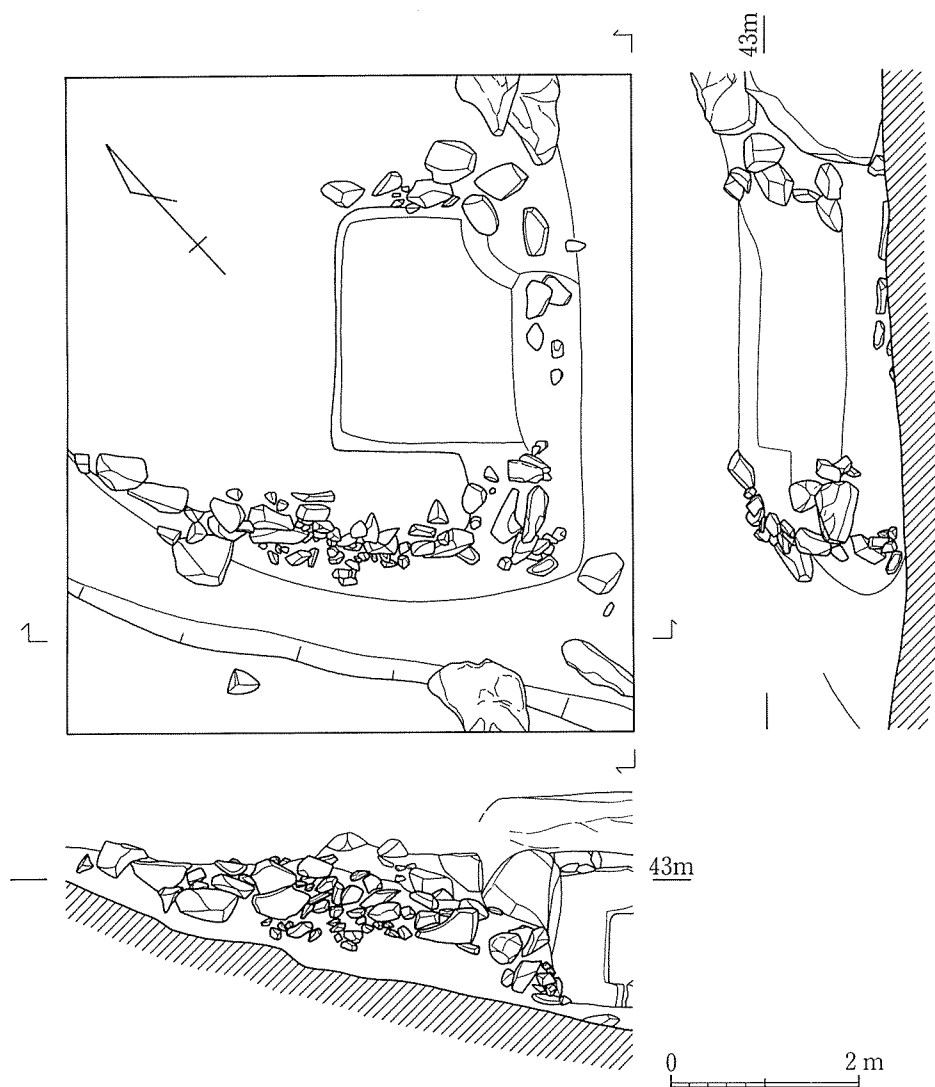
第13図 墳丘平面・立面図

3区 3区では墳丘南西辺に認められ、大小さまざまな石を一見無企画に積んでいる。列石は墳丘盛土部分に施されていることは既に述べたが、墳丘における地山面自体、自然地形にしたがって傾斜しているため、山側から下るほど墳丘盛土は厚くなり、当然列石石積みも高くなっている。古墳のテラス面が平坦であるならば、列石は山側から下るに従ってその石積みも高くなる変則的なものであったと考えられる。

また、3区の列石は石室の墓道部分で折れ、一部は墓道側壁にかかっている(第14図)。これより先の墓道側壁は攪乱を受けており確かなことは不明だが、この残存状況を見る限り、周溝の列石は墳丘端部から墓道部分にまでわたって施されていたものと考えられる。

なお、3区でみられた石室羨道側壁前方に散乱した石材は原位置を保っていないこと、そして墳丘2段目に施された列石最下段の石(根石)となる可能性のある石材が存在することは既に述べた。しかし3区を完掘した状況をもても、墳丘2段目の列石の存在を示唆するような痕跡はみつかっていない。

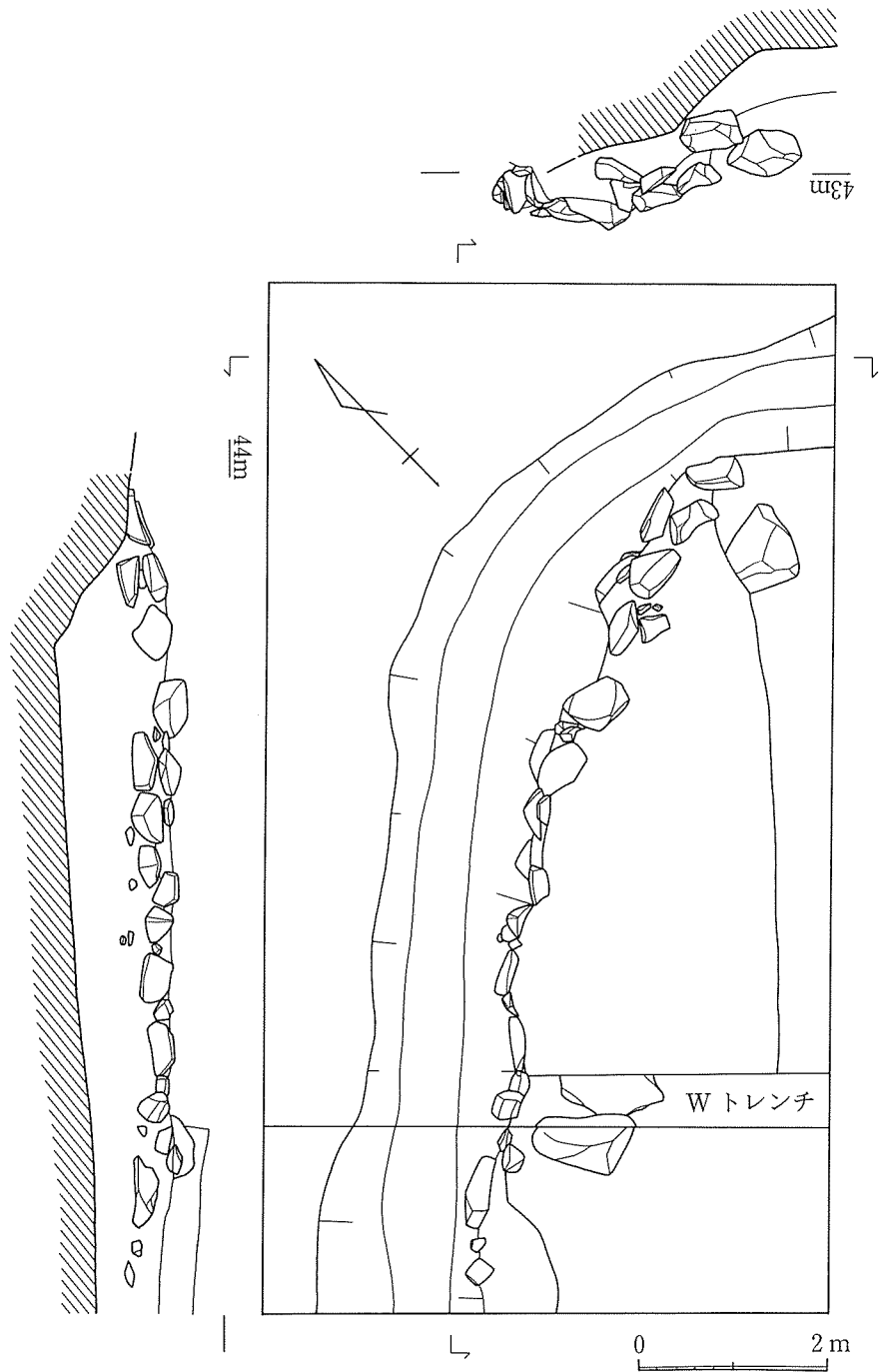
4区 4区では列石は墳丘北西辺側に認められる。削平によるためか列石1段目の石材のみが残る。3区における列石に比べ、大型の石を規則的に配しているのが特徴で、石材は3区の



第14図 3区列石実測図

ものと同じく安山岩である。

現状では3区の北西辺、4区の北東辺に列石は認められないが、他の状況を考えれば、後世の破壊により失われたもので、本来的には存在したものと考えたほうが自然であろう。その列石も施す部位によってその設け方が若干異なっており、山側にあたる北西辺では、基底部材しか現存していないが、大型の石材を据えるなど比較的しっかりとした造りであるのに対し、一方南西側の列石では石積みも雑然としていて小型の石材も多用している。(藏富士寛)



第15図 4区列石実測図

3 埋葬施設の調査

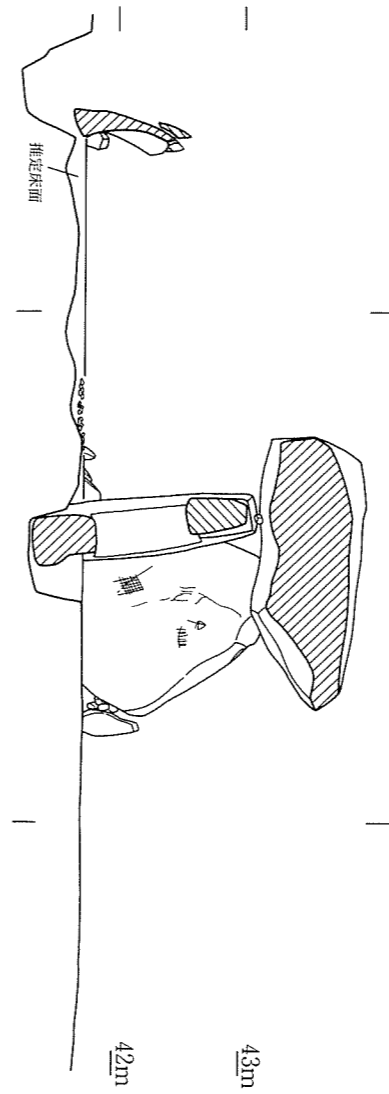
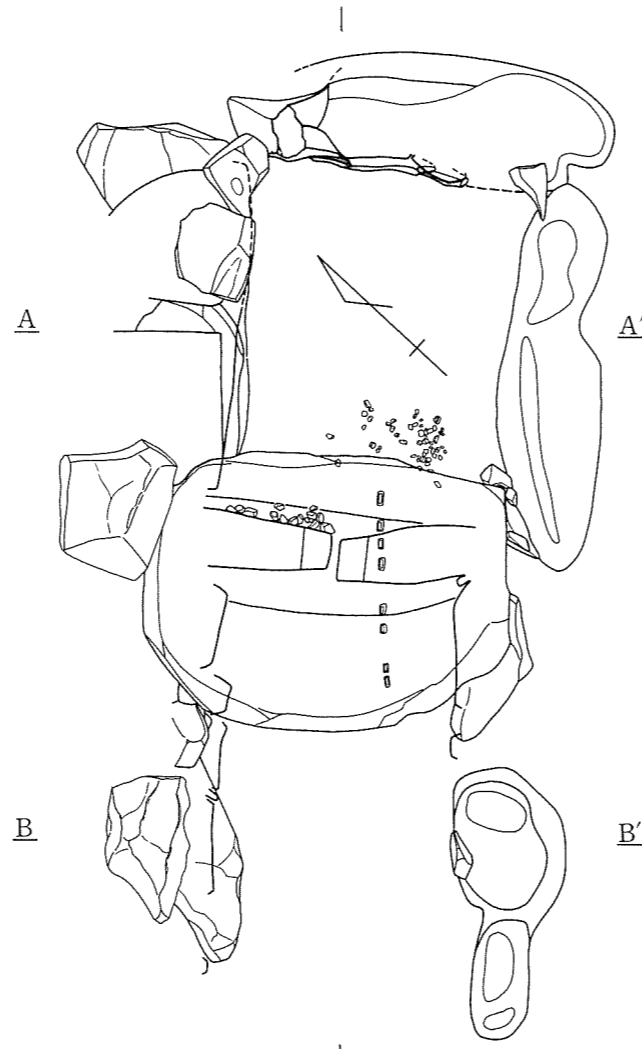
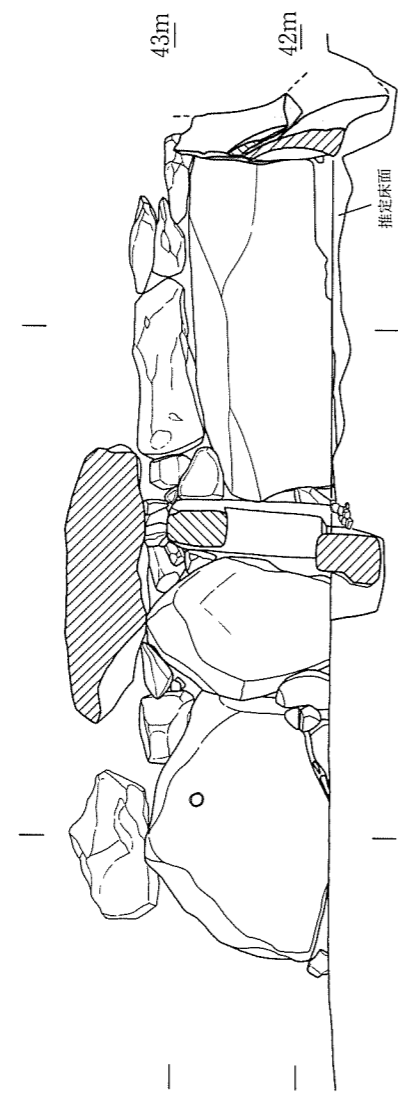
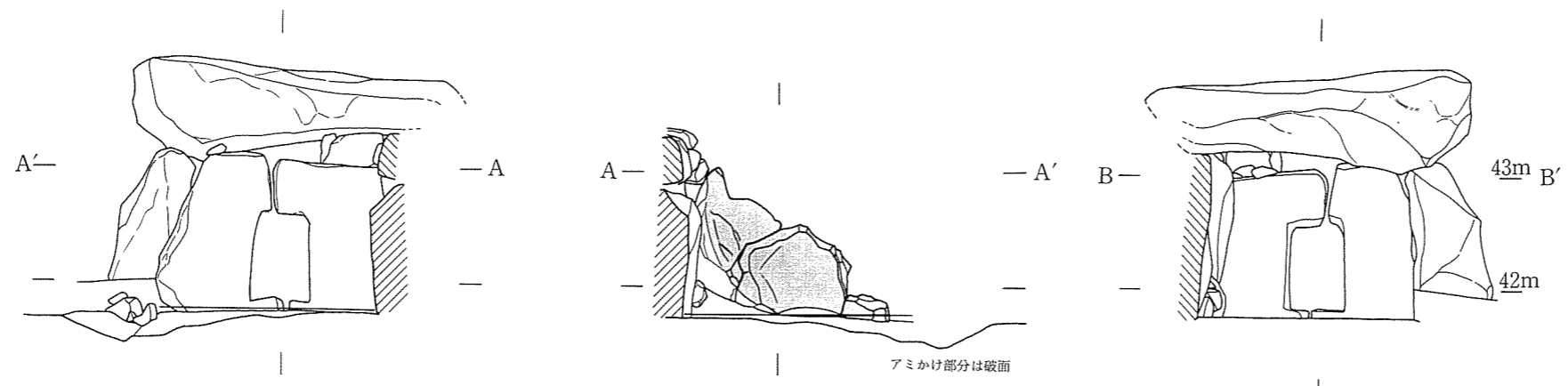
(1) 横穴式石室 (第16図)

南西方向に開口し、主軸を N-43° -E にとる単室の横穴式石室で、その軸線は丘陵の等高線に対してちょうど平行する形になる。石室石材には主として安山岩が使用され、玄門部分にのみ阿蘇熔結凝灰岩が用いられる。安山岩はこの周辺で普遍的に認められる石材で、横穴式石室の石材として多用されている。なお、当古墳は大きく破壊を受けており、石室崩壊の恐れもあったため、各トレンチの発掘以外による石室に対する直接の調査は避けた。

玄室 天井部及び右側壁は完全に失われ、奥壁・左側壁が部分的に破壊を免れている状況であるが、各壁材を据える際の掘り方から考えれば、幅2.24m、奥行3.80mの長方形プランに復元できる。比較的良好に残存しているのは左側壁であり、基底部に巨石を1石横位に据え、そのうえに1、2段の石積みが残る。当古墳の築造時期を考えれば、天井高は玄門天井石上面のレベルを大きく越えることはないものと思われ、玄室高は2.2m程に復元可能で、左側壁にはさらに1、2段の石積みが想定できる。石材は安山岩の自然石を使用しているが、石室内側ではほとんどの石材で、表面を平坦にする面取り加工を施す。奥壁は基底部に使用された石材のみ残存する。安山岩の巨石を立てて床面に掘り据えたもので、石材背面には矢穴が認められるなどその多くが割り取られており、石室の壁面であった部分はほとんど残っていない。基底部石材から上の石積みの状況は知る由もないが、左側壁の状況からすれば1、2段石積みがなされていたのであろう。右側壁においても基底部には大型石材を1石使用していたことがその掘り方からうかがうことができる。床面は地山面をそのまま整地したもので、3次調査時に床面の精査を行ったところ、その一隅から円礫が面的に広がりを見せることが確認でき、玄室床面は礫床である可能性がある。石室の破壊に伴って石室石材や多量の土砂が流入しており、床面の凹凸はかなり激しいものであったが、礫面や比較的攪乱を免れている壁際部分を参考にすれば、若干左側壁側で高めにレベルを設定しなければならないが、床面は標高41.7~41.9mの範囲内に復元できよう。その他、床面では仕切石などの施設は検出できなかった。玄室内では須恵器を中心とした多数の土器が出土したが、それらはすべて古墳破壊時の流れ込みによるものであり、床面上からは遺物は検出されなかった。ただ多数の遺物に混じって竜泉窯系の青磁が数点出土しており、その時期に古墳が何らかの形で再利用された可能性がある。

羨道 左側壁部分において良好に残存しており、長さ2.9m、幅1.7mを測る。玄門と同様、羨道においても大型の石材が使用され、左側壁には2石、右側壁には1石が残存する。床面の掘り方から考えれば、右側壁においても左側壁と同様、大型石材2石で壁体が構成されていたのであろう。大半の石材で面取り調整が行われており、壁面は比較的平坦に仕上げられている。また羨道部では壁材以外の抜け跡、特に前室を設けていたとすれば、門に当たる場所に相当する箇所への石の抜き穴は両側とも確認されず、従って単室の石室構造であるといえよう。

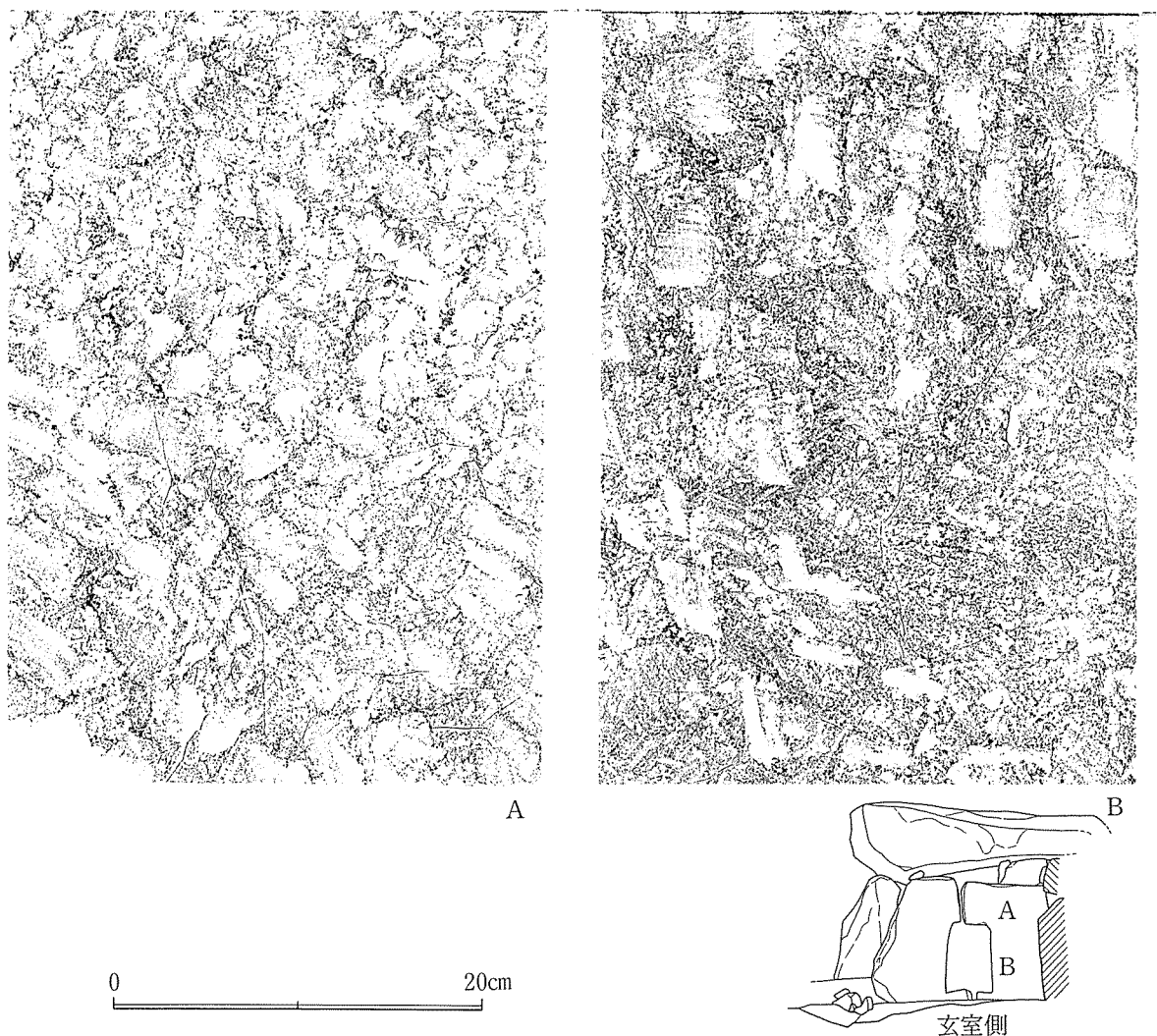
左側壁2石目より先の部分は破壊を受けており、その構造は不明である。しかし、羨道床面の状況を観察すれば、大きな石材の抜け跡は確認できず、大型石材による壁面構成は左側壁残存部分、つまり、玄門より3m程で終了していることがわかる。これより先は左壁部分においていくつか安山岩の塊石が散乱しており、また3区における列石の状況から類推すれば、おそらく石室前面の列石がそのまま墓道部分にまで伸びていたものと考えられる。つまり左側壁残存部分以降は列石部分と同じく、安山岩による石積みがなされていたのであろう。また墳丘平面図からみれば、この墓道部分は羨道と幅をほぼ等しくし、墳丘端までのびていたことをうかがうことができる。天井石は玄門上に1枚のみ残存しているに過ぎない。だが左側壁上端のレベ



第16図 石室実測図

ルはほぼ一定に保たれており、この部分まで天井石が存在し、その高さが1.66m程であったと推定される。これより先は不明だが、塊石積みという壁体構成や石室構造を加味すれば無天井であった可能性が高い。羨道部で出土した遺物は、床面上から刀子が1点出土したほかはすべて流れ込みによるものである。なお、羨道部右側壁には線刻装飾、左側壁には浮彫状の円文がそれぞれ施されている。これらの装飾については後述する。

玄門 コの字形に割り抜かれた2枚の板石を組み合わせて造った、いわゆる割抜玄門となっている。全面にわたってチョウナによる調整が施されており(第17図)、唯一側壁に接する小口部分のみが無加工の自然面となる。このような2石を組み合わせた割抜玄門は、宇土郡不知火町桂原1号墳や下益城郡小川町年の神1号墳にその類例がみられる。玄門の入口部分は幅0.5m、高さ0.7m、厚さ28cm~34cmで、接地部分では意図的に石材を厚く(40cm程)加工し、玄門の安定を図っている。玄門上には木眉石を設置するが、その幅は玄門部の厚さとほぼ等しく、玄門を天井まで延長したかのような観を呈する。楣石は現在右壁側2/3が欠損しており、天井石は大きく傾いている。石室石材の大半が安山岩であったのに対し、玄門部には阿蘇熔結凝灰岩が使用している。割抜玄門には通常馬門石と呼ばれる阿蘇ピンク石、楣石には阿蘇灰黒石(藏富士寛)



第17図 割抜玄門加工痕拓影

(2) 装飾 (第18・19図)

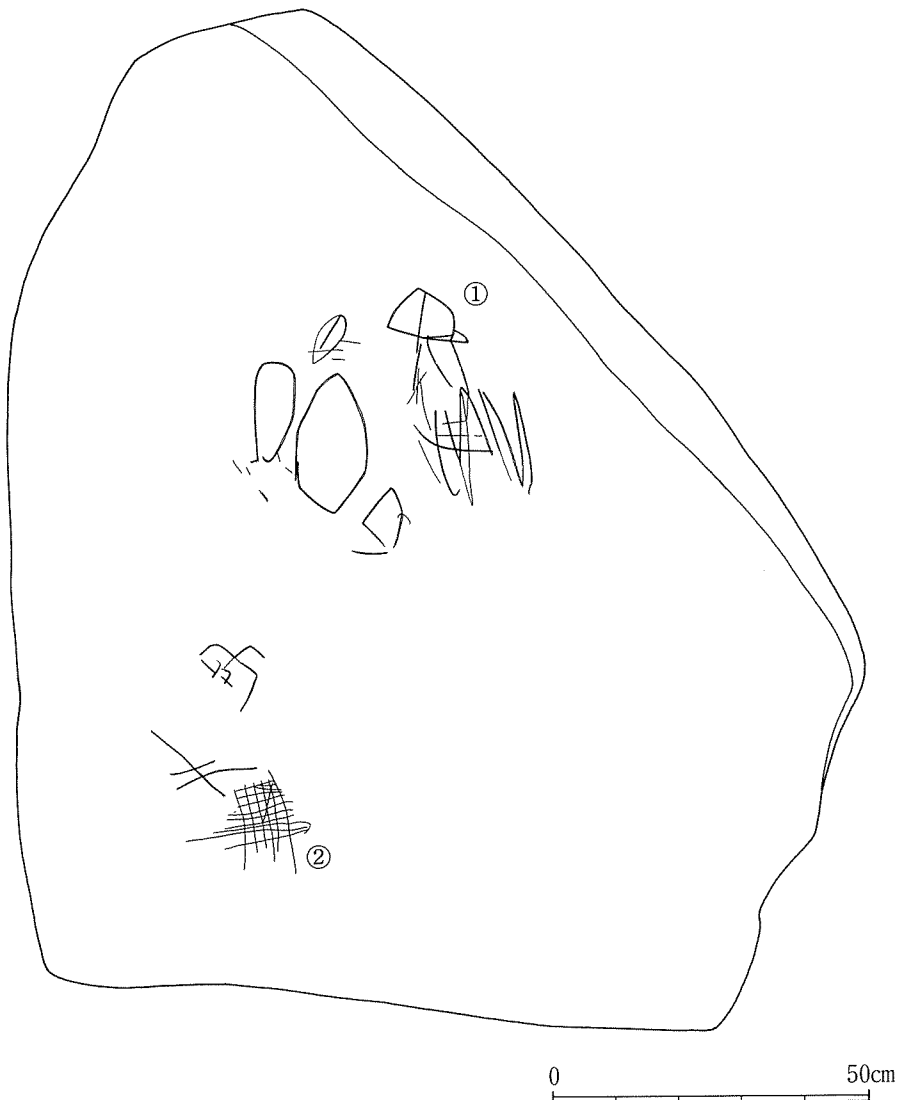
椿原古墳では羨道右側壁に線刻壁画が、左側壁には浮彫状の円文がそれぞれ施されている。

a. 線刻壁画 (第18・19図)

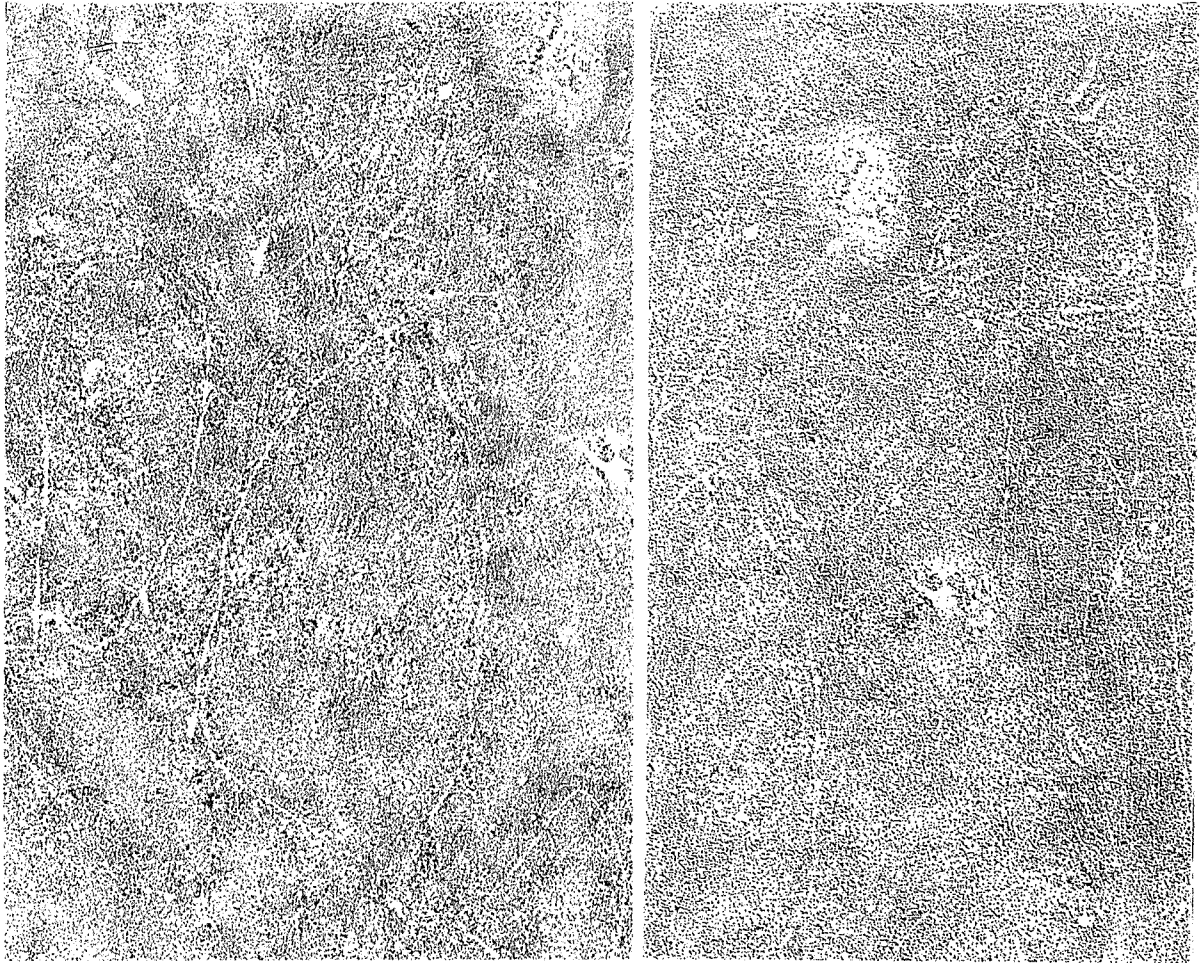
釘状の工具で細線を描き出しており、大きく上下2つのまとまりが指摘できる。それぞれの文様が何を意味しているのかは不明であり、特定のモチーフを判断するのは大変困難であるため、ここでは2つの特徴的な装飾文様についてのみ挙げておきたい。上部の装飾では、①にみられる矢印状の文様があり、この文様は帆掛船の帆または旗と考えられる。下部の装飾では②のような細線を交互に組み合わせた格子目状の線刻が存在する。

b. 円文 (第19図右下)

やや横長の不整形な円文で、周囲をわずかに窪ませることによって、文様を浮き出させている。当古墳の円文周辺には明確な敲打痕は認められないが、自然に生じたものとは考えがたく、人の手によるもの、つまり装飾として、ここではとらえておきたい。

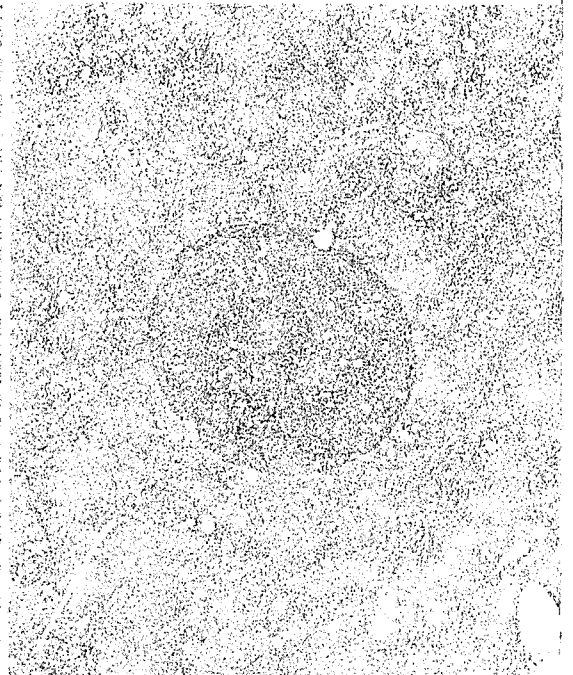
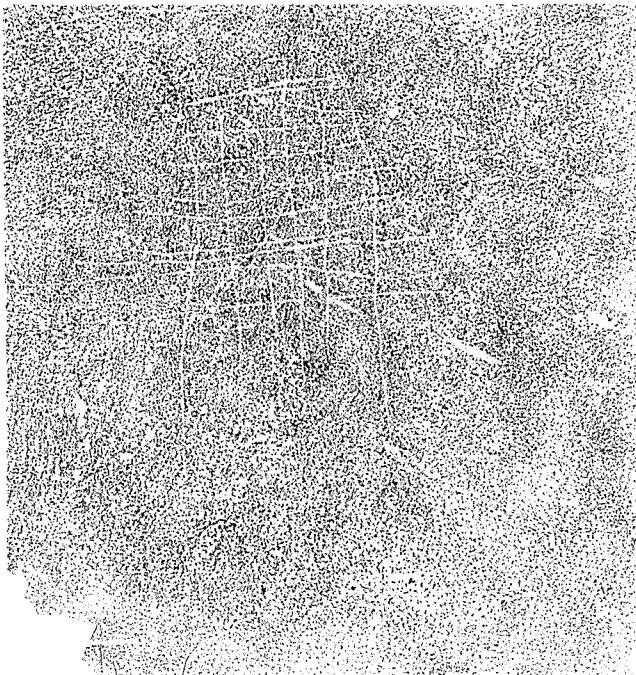


第18図 線刻壁画実測図



1

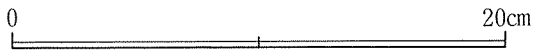
2



3

4

1 ~ 3 右側壁線刻
4 左側壁浮彫



第19図 羨道部裝飾拓影

(3) 墳丘と横穴式石室の構築過程 (第20図)

ここで以上の所見を踏まえて、簡単に椿原古墳の築造過程についてまとめておきたい。

a. 地山整形

当古墳はゆるやかな斜面上に位置しているため、斜面を段状にカットし、平坦地を作り出す。段状となる部分はその端部がなだらかで、高低差は1m程の浅いものである。そして、石室床面に相当する部分のみ、基盤層までの掘り下げを行う。右側壁側では大きく削平を受けているが、現状を観察する限り、石室を築造するうえで、当古墳では大きな掘り込みを施して築造されたわけではないことがわかる。この地山整形時の表面には黒色の腐食土層が薄く堆積しており、次の過程に移るまでいくらかの時間経過が想定できる。

そしてこの地山整形時に周溝の掘削も行う。周溝はコの字形を呈し、山側の部分にのみ施される。周溝は基盤層まで掘り抜かれており、地形の傾斜に従って周溝底面も傾斜している。周溝の施されない墳丘南東辺側では、地山層を削って墳丘裾部を作り出す。このように地山整形の段階で墳丘のあらかたは削り出しているのだが、周溝底面の傾斜にも示されているように、北東辺側の墳丘裾部（周溝底面）と南東辺側の裾部とは、高さにして約2mほどの違いが生じている。つまり墳丘裾部を水平にそろえるという意図は最初からなかったのであり、その結果は3区における列石のアンバランスさ、つまり下方へ下るにつれて列石の石積が高くなる、にも現れている。

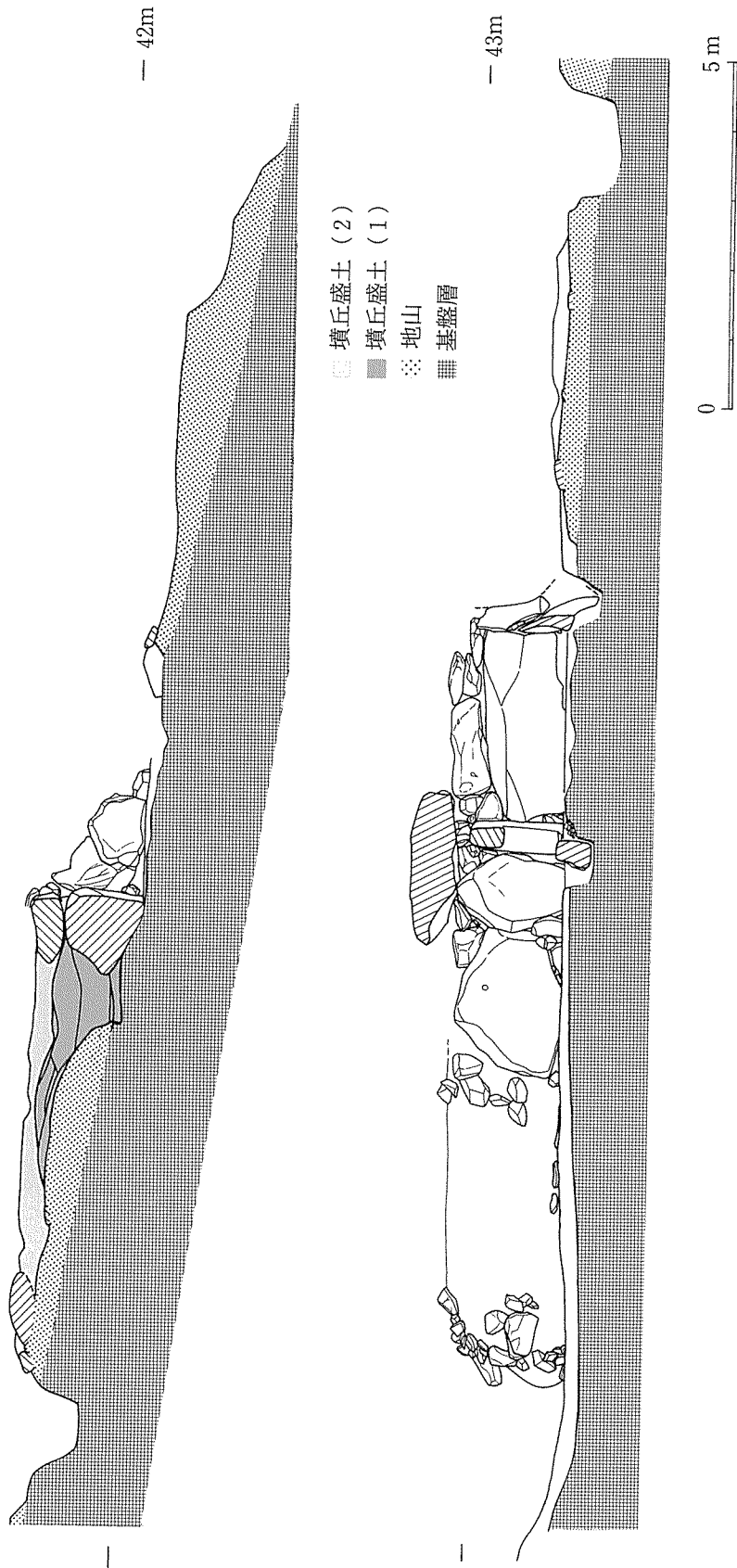
b. 石室基底部の築造

当古墳では左側壁側が地山整形時の段の部分に平行する形で石室を構築する。したがって石室は斜面の等高線と平行して開口することになる。基底部に大型の石材を据え、その石材と段との間に土砂を充填していく。玄室部分においては、石材の上端と段上面のレベルがほぼ等しく、隙間を埋めた時点で石材上端レベルでの平坦面が形成される。この過程では薄層が何枚も認められ、入念に作業されたことが分かる。これは後の墳丘に盛土をする際とは大きく異なり、平坦面が形成された時点をもって、石室構築作業上の一小工程をみることができよう。

c. 玄室2石目以降の石積みと列石の設置

2にみられた作業の後、玄室では2石目以降の石材を積み上げる。その際墳丘にも盛土がなされるのであるが、2作業にみられたようにその盛土は幾つかの層に細分される入念なものではなく、雑で一気に盛り上げられたかのような観がある。しかし石室の構造からみれば標高43.3m付近で石積みの横目地が通っており、ここでも石室作業上の一小工程を指摘することができよう。これ以上は石室自体破壊を受けており、詳細は不明である。

この過程において重要な点は列石の設置であろう。列石は玄室2石目の石材が積まれる際、つまり、地山層上に盛土がなされる時に設置されており、盛土の流失防止がこの列石配置の主目的であったことが分かる。現在列石が残存しているのは3区と4区の一部で、つまり周溝を巡らした墳丘端部に施されている。周溝の認められない1・2区においては大きく削平を受けており列石の有無は定かでない。3・4区では地山を削り残しているため、墳丘盛土は石室基底面より1mほど高いレベルから盛り土がなされるのに対し、1・2区では石室基底面と同じレベルから盛り土を行う必要がある。列石の主要な機能が土留めである以上、列石を施す必要が最もある箇所はむしろ1・2区のほうであるといえる。ただし、列石が残っていない以上、1・2区にも同様に列石が施されていた可能性を指摘するに留めたい。



第20図 主軸断面図

4 出土遺物

(1) 須恵器 (第21～31図、第1表)

須恵器は2・3区周溝内及び石室内から出土している。石室内出土の須恵器は、すべて石室破壊時に流入したものであり、原位置を留めているものではない。また、周溝内で出土したものはすべて周溝底から浮いた状態で出土しており、またレベル的に一番低い墓道と周溝とが接する部分に集中していることから、これらの須恵器もなんらかの祭祀後、廃棄されたものが流れ込んだものであろう。以下では器種ごとに、所見を述べる。

a. 高杯 (第21～24図)

椿原古墳出土須恵器の中で中心を為すものであり、その出土は30数点に及ぶ。有蓋・無蓋の2種類がある。

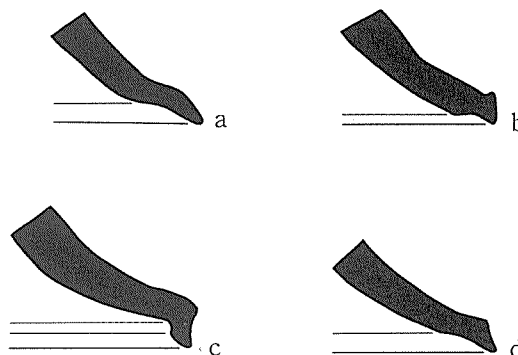
ア) 有蓋高杯 (第21・22図)

高杯

大型(脚部長9～12cm)、小型(脚部長5～7cm)の2種類がある。大型高杯は26個体あるに対し、小型のものは8個体と数が少ない。(i)杯部の形態 (ii)杯内面底部不定方向ナデの有無 (iii)杯外面底部の調整 (iv)脚部の特徴 (v)脚端部の形態 (vi)焼成 に注目すれば、大型有蓋高杯はI～VI類の6種に、小型有蓋高杯はVII～IX類の3種に分類可能である。

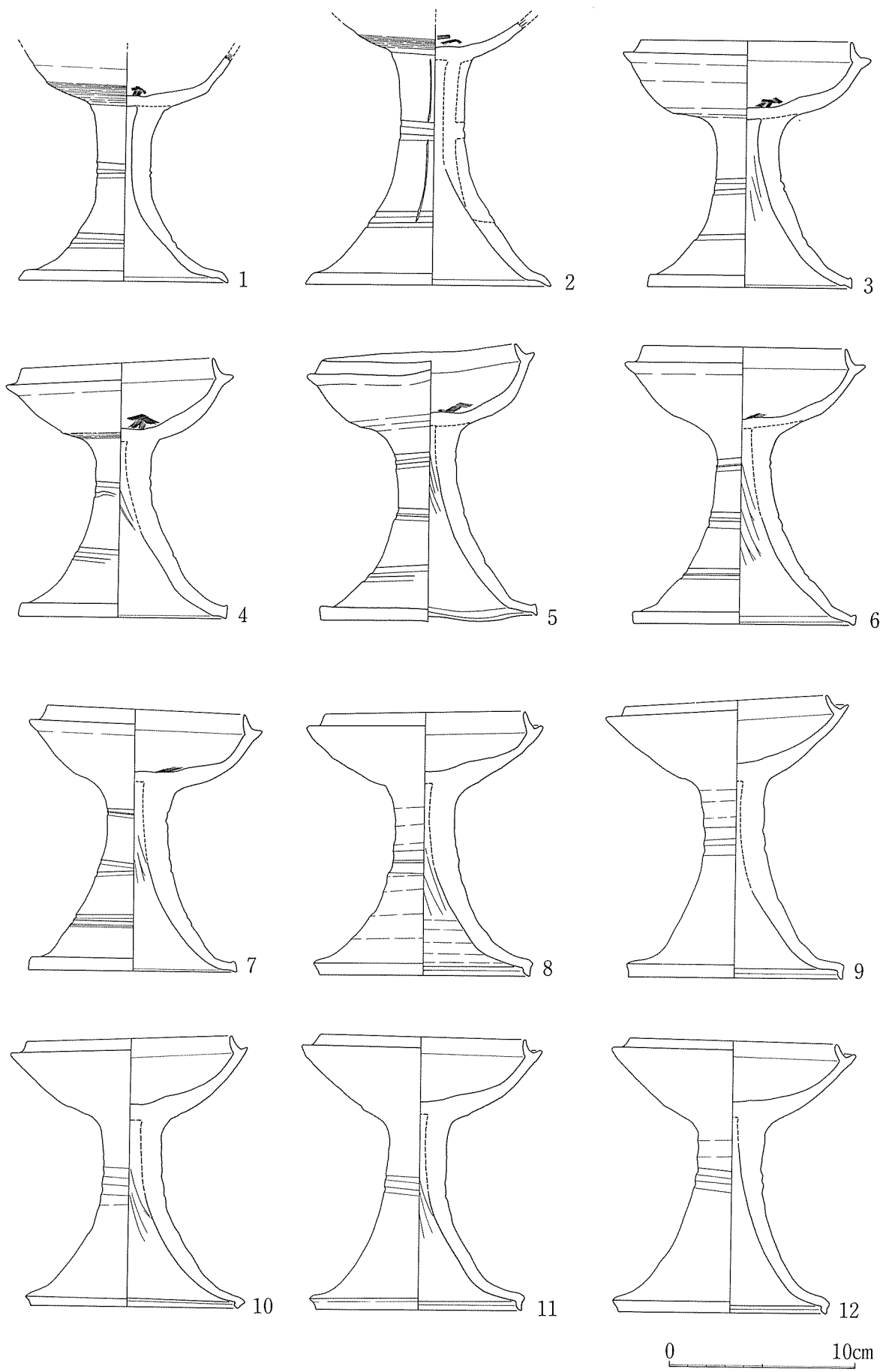
(v) 脚端部の形態

- a : 斜め下方に折れ曲がり、先端部は丸く収める
- b : 端部が上下に突出している形で肥厚し、断面はT字形を呈する
- c : 下方に大きく「く」の字形に折れ曲がる
- d : aと類似するが、端部外面をヘラケズリし、シャープに仕上げる



図

- (vi) 焼成 A : 非常に良好で、堅緻。灰・灰白色を呈し、自然釉が付着する。
- B : 良好で、硬質。降灰多く、灰・褐灰色を呈する。
- C : やや不良。酸化して表面がやや茶褐色を呈するものもある。灰褐色。
- D : 不良。軟質で、灰白色を呈する。



第21图 出土須恵器実測图(1)

	杯部の形態	杯内部 ナデ	杯外面 底部調整	脚部の特徴	脚 端 部	焼 成	固 体 数	図 番 号
I類	—	○	カキ目	・2条1組の沈線を上下2段施す ・4方2段のスカシ状沈線を有する(2)	a	C	5	21図 1,2
II類	・体部がわずかに膨らみを有し、受部が外方に屈曲する ・立ち上がりが比較的高い(1cm程度)	○	カキ目(1) ナデ	・螺旋状の沈線を2段施す(2) ・螺旋状の沈線を3段施す	b	B	7	21図 3~7
III類	・体部は直線的 ・立ち上がりは比較的低く(0.6cm)、内傾する	×	ナデ	・螺旋状の沈線を脚中央部に施す	c	A	10	21図 8~12
IV類	・杯部は深く、立ち上がりも比較的高い ・体部は直線的	×	ナデ	・沈線なし	d	D	2	22図 1
V類	—	○	ナデ	・脚基部が太い ・沈線なし	c	C	2	22図 2
VI類	—	○	ナデ	・脚中央に2条の沈線	c	C	1	22-3
VII類	・体部がわずかに膨らみを有し、受部が外方に屈曲する ・立ち上がりが比較的高い(1cm程度)	○ ×(1)	ナデ	・脚中央に2条の沈線	a	B	3	22図 4~6
VIII類	・体部は直線的で、受部下がわずかに凹む ・杯は比較的低く、立ち上がりは内傾する	×	ナデ	・沈線なし	c	B	2	22図 7,8
IX類	—	×	ナデ	・脚中央に2条の沈線	c	A	1	23-9

() 内は個体数

蓋

(i)つまみの形態 (ii)天井部の調整 (iii)内器面天井部の不定方向ナデ (iv)口縁部沈線の有無 (v)焼成 に注目すれば、以下の4種に分類可能である。

	つまみの特徴	天井部調整	内器面ナデ	口縁部	焼 成	固 体 数	図 番 号
I類	・比較的低く(4mm)ボタン状を呈し、上面はわずかに凹む	ヘラケズリ	○		C	3	23図 1~3
II類	・ボタン状を呈するが、I類に比して高く(6mm)、上面は大きく凹む	ヘラケズリ	○	○	B	5	23図 4~6
III類	・つまみ状を呈し、側面をケズリだして、鋭角的に仕上げる	ヘラケズリ カキ目(1)	×	×	A・D B(23図13)	15	23図 7~14
IV類	・細い軸に円盤状のつまみを付す	カキ目	×		C	1	23-15

高杯と蓋の対応関係

高杯において、個数の上で比較的多く出土をみているものは大型高杯であるI・II・III類である。これら3種は(i)杯部の形態 (iv)脚部の特徴 (v)脚端部の形態 (vi)焼成において各種とも明確な違いをみせており、この原因にはア)時期差 イ)生産地(窯)の違い ウ)生産工人の違いなどが考えられる。

そのうち、ア)時期差 について検討してみると、II・III類に比して、I類は、脚高が高くスカシ状の沈線を有するもの(第21図2)が存在し、高杯の中では最古式の一群に位置付けることができよう。II・III類は器高、杯部口径などが類似しており、ほぼ同時期の所産と考えられる。しかし、杯部の形状をみれば、II類のほうがより古式な姿を留めているといえる。

一方、蓋ではI・II・III類で、出土品の大半を占めている。(iv)口縁部沈線の有無 に注目すれば、III類に比べて、II類が若干古式を留めていることが分かる。I類は口縁部を欠いた破片

であるが、(i)つまみの特徴 をみる限り、II類に先行するものと考えられる。したがって、形態的特徴に従えば、I類→II類→III類という変遷が想定できる。

ここで、焼成についてみると、高杯I類と蓋I類、高杯II類と蓋II類が対応していることが分かる。これは高杯・蓋それぞれの型式組列に矛盾するものではなく、内器面には不定方向ナデ調整を行うという点も共通している。そして高杯I類(5個体)―蓋I類(3個体)、高杯II類(7個体)―蓋II類(5個体)と個数のうえでもほぼ対応する。よって、高杯I類と蓋I類、高杯II類と蓋II類の対応関係が指摘できよう。



第22図 出土須恵器実測図(2)

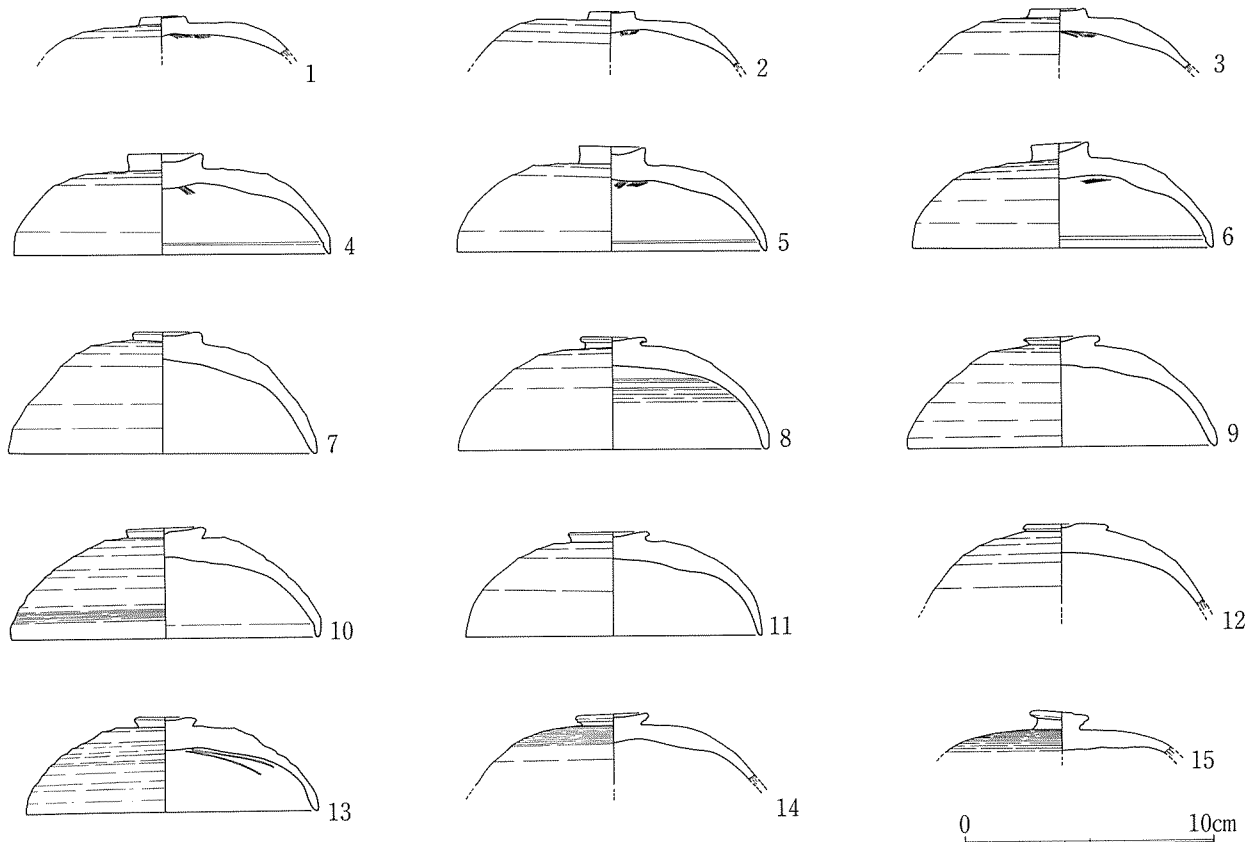
高杯と蓋の個数を考えれば、高杯Ⅲ類と蓋Ⅲ類との対応が想定できよう。事実、内器面の不整方向ナデ調整を施さないなど、製作技法のうえでも共通点が指摘できる。ここでも焼成について検討すると、高杯Ⅲ類は焼成 A、蓋Ⅲ類では焼成 A (9 個体)・焼成 B (3 個体)・焼成 D (3 個体) となる。焼成を考慮すれば、高杯Ⅲ類 (10 個体) と蓋Ⅲ類の焼成 A (9 個体) とのセット関係が考えられ、個数のうえでも妥当性のあるものである。次に他の蓋Ⅲ類について検討する。焼成 B は他に比べて若干小型であり、おそらく小型高杯に対応するものと考えられる。この個体には内器面に 2 本線によるヘラ記号が施してあり、このヘラ記号と同じものを小型高杯Ⅷ類にみることができ。小型高杯Ⅷ類も焼成 B 類であり、以上の類似点から小型高杯Ⅷ類と蓋Ⅲ類焼成 B との対応関係が導かれる。これは双方の口径とも矛盾するものではない。

以上の分析では、対応関係の判別には焼成の共通性を重要な要素として捉えてきた。同一の窯で焼成される場合、須恵器の焼成の状況がある程度類似してくるのは当然のことであり、須恵器の組み合わせを考える際の有効な手段とはなり得よう。したがって焼成という要素に限っていえば、蓋Ⅲ類焼成 D は大型高杯Ⅳ類との対応関係が考えられる。

これまで述べてきたセット関係を図示すれば以下のようなになる。

古	新
蓋Ⅰ類(3)―高杯Ⅰ類(5)	蓋Ⅱ類(5)―高杯Ⅱ類(7)
	蓋Ⅲ類 焼成 A(9)―高杯Ⅲ類(10) 焼成 B(3)―高杯Ⅷ類(2) 焼成 D(3)―高杯Ⅳ類(2)

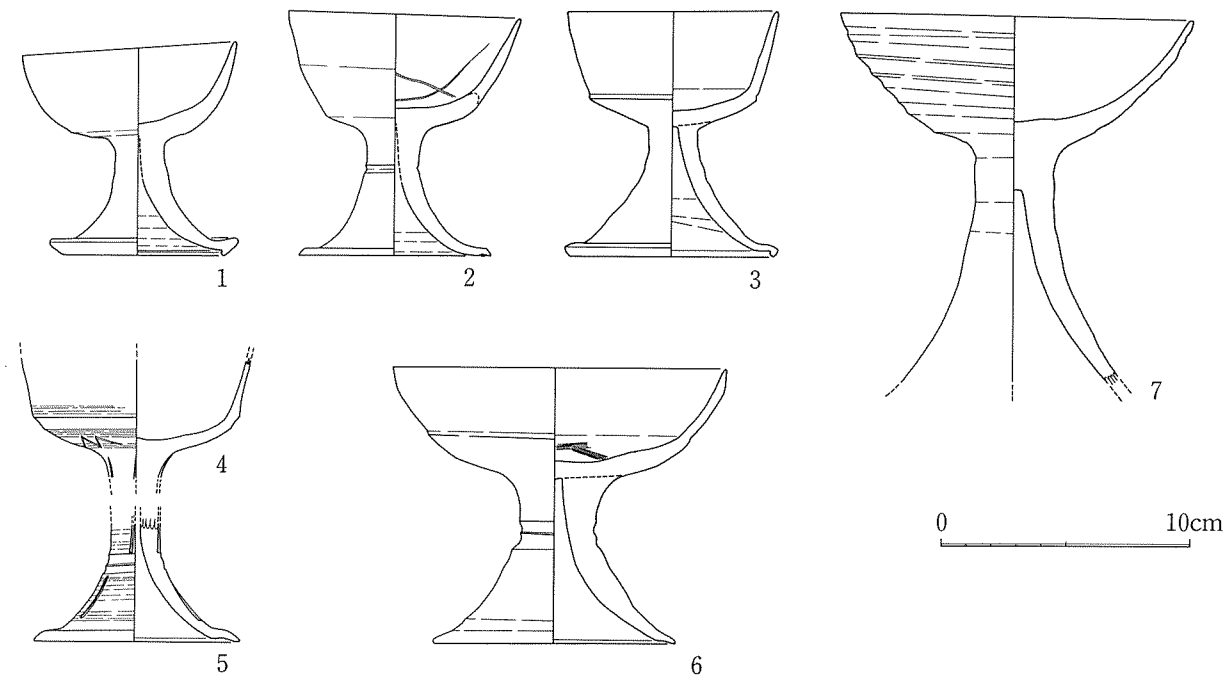
() 内は個体数



第23図 出土須恵器実測図 (3)

イ) 無蓋高杯 (第24図)

大型のもの(7)と小型のもの(1~6)に分けられる。大型は一個体のみで、小型のものが多数を占める。7は脚端部を欠損する。口径(復元)14.1cm、残存高14.7cmで、杯外面には強いナデ調整を施す。焼成はD類で軟質。6は口径が大きく比較的浅い杯部を有するもので、脚中央部には幅広の沈線を2条施す。脚端部の形態はa類。焼成はD類で軟質である。1~3は器高8.5~9.9cm、口径8.5~9.3cmとほぼ同じ大きさである。1は脚端部の形態がc類に近く、浅めの杯部をもつ。2は脚中央に1条の沈線を有し、端部の形態はa類。杯内部には×形のヘラ記号を有する。3は杯部外面が段をなし、杯部途中で「く」の字に屈曲する。脚端部の形態はc類。4・5は、焼成や形態からおそらく同一個体になるものと考えられる。4の杯部は外面底部にカキ目調整を行ない、のち体部との境に幅広の沈線を一条施す。脚部にはカキ目調整を行なった後、脚中央部に2条の沈線を施し、その上下2段に3方からスカシ状の沈線を互い違いに刻む。脚端部の形態はa類。焼成はA類で緑色の自然釉が認められる。



第24図 出土須恵器実測図(4)

b. 蓋杯 (第25図)

個体が判別できたものは、杯身9個体、蓋5個体と高杯に比べてその個数が少ない。

杯蓋 (第25図1~4・12)

ここでは全体の形が復元できた、5個体のみ所見を述べる。かえりを有するもの(12)とそうでないもの(1~4)がある。その多くはかえりを有さないものであり、1は口径(復元)11.3cmで、口縁端部付近には沈線を巡らす。天井部にはナデ調整を施し、焼成はC類。2は口径(復元)11.7cmで、天井部は周辺部分に回転ヘラケズリを施すのみで、ヘラ切りした部分は未調整。焼成はC類。3は体部に強いナデ調整を施し、天井部分にはナデ調整。口径は10.4cmで、焼成はB類。4は体部を強くナデ調整し、天井部は粗い回転ヘラケズリを施す。口径(復元)は11.4cmで、焼成はB類。12は天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施し、のちつまみを付す。焼成D類の軟質なものである。

杯身（第25図 5～11・13）

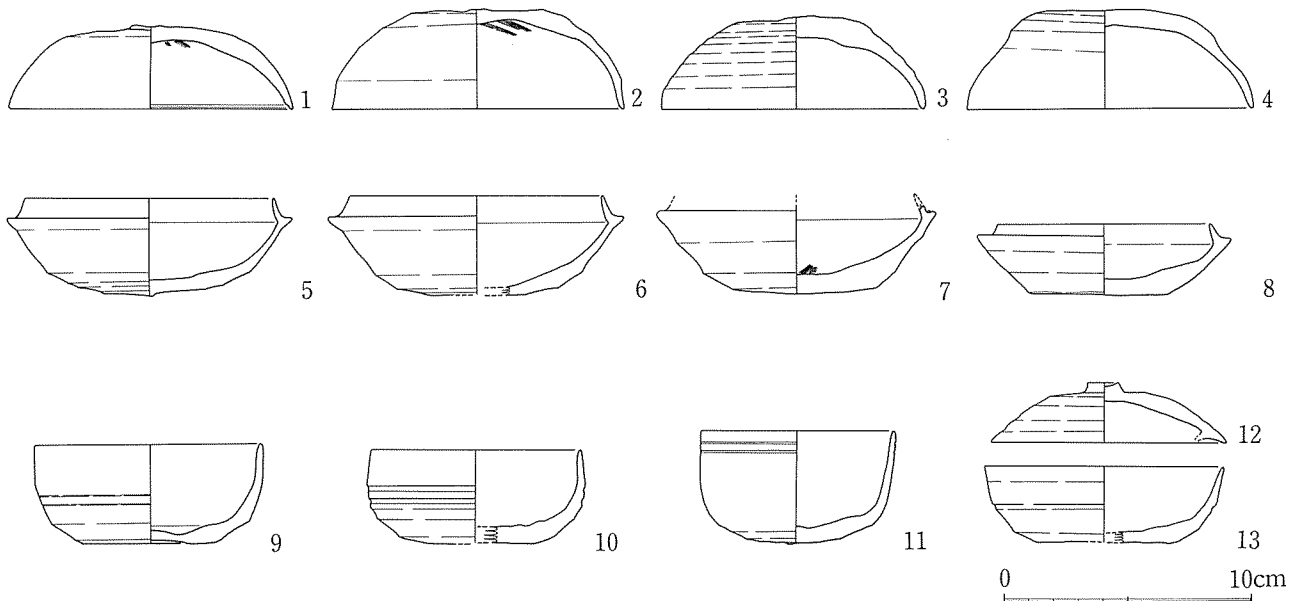
立ち上がりを有するもの（5～8）と有さないもの（9～11・13）とに分かれる。5～8は古墳時代通有の杯身で、杯Hタイプと呼ばれるものである。5・6は体部が膨らみをもち、受部はわずかに外反する。立ち上がりも他に比して比較的高い（0.8cm）。口径はそれぞれ10cm程度（復元）で、底部はナデ調整を行い、その周辺部にヘラケズリを施す。いずれも焼成はC類。7は口縁部を欠損し、受部径は11.2cm。体部外面には強いナデ調整が施される。底部はナデ調整を施し、その周辺部にヘラケズリを施す。焼成はC類。8は杯身は浅く、体部は直線的で、立ち上がりは短い。焼成はD類で、軟質であり、細部の調整は不明。口径は8.5cm。

9～11・13は立ち上がりを有さない杯身で、杯Gタイプと呼ばれるものである。10は体部中央に2条の沈線を有し、底部は周辺をヘラケズリした後、不整方向のヘラケズリ調整を施す。口径（復元）は8.4cm。9は体部中央に2条の刻線を有し、底部は周辺をヘラケズリした後、不整方向のヘラケズリ調整。口径（復元）は9.2cm。11は体部上方に2条の沈線を施し、底部は回転ヘラケズリ調整。口径（復元）は7.8cm。13は焼成D類で、極めて軟質のものである。体部中央に1条の沈線を有し、底部は回転ヘラケズリ調整。口径（復元）は9.6cm。

蓋・杯身のセット関係

杯Hタイプの杯身はI類（5・6）、II類（7）、III類（8）の計3種に分類できる。口径など法量を考慮すれば、I・II類に比べてIII類は形式的に新しいものといえる。これらと蓋（1～4）との対応関係を考えれば、焼成及び胎土の様子からI類—蓋1、II類—蓋2が対応するものと考えられる。その他の個体については、今のところ対応するものは存在しない。

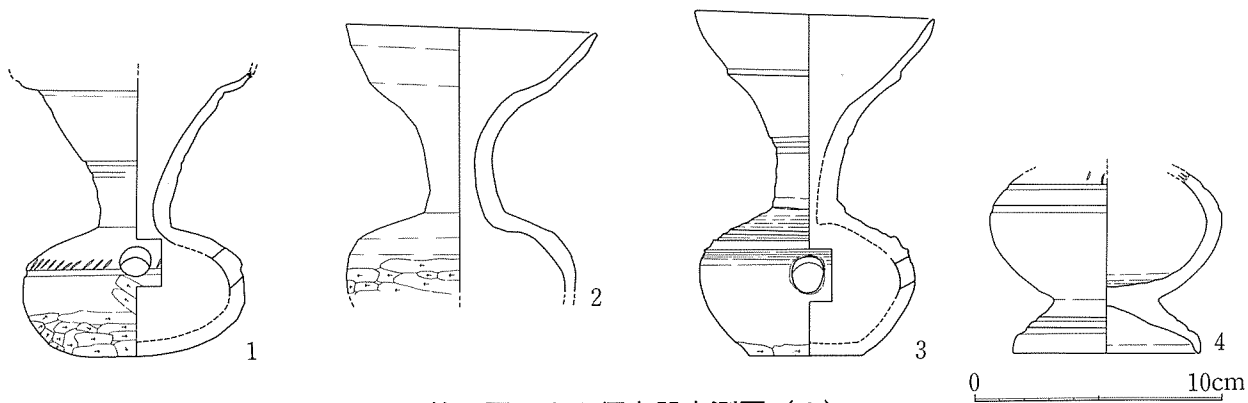
杯Gタイプの杯身は焼成及び胎土の類似より、杯身13が蓋12とセットになる可能性が指摘できるに過ぎない。かえりやつまみのついた蓋自体、蓋12の他には出土していない。



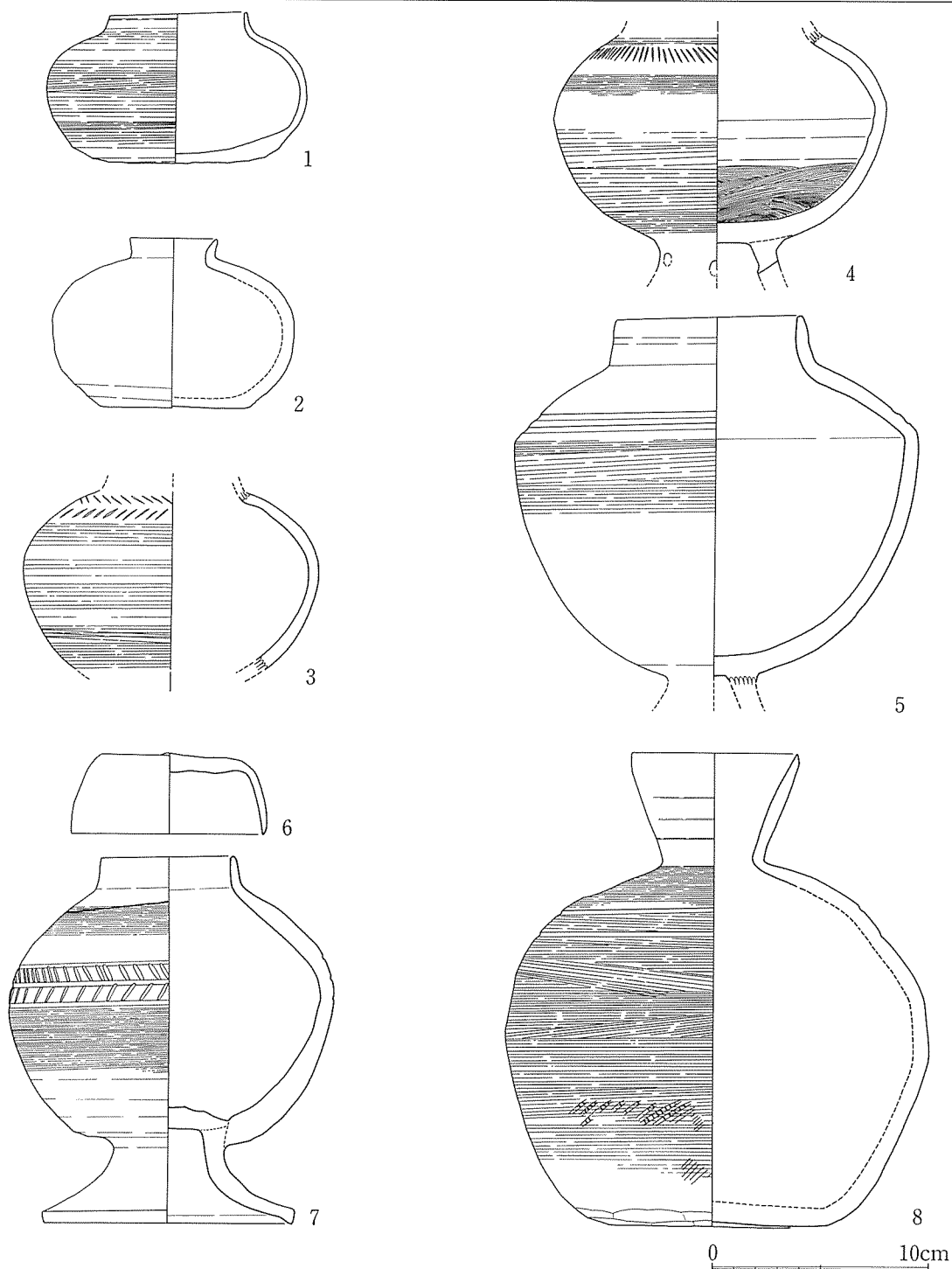
第25図 出土須恵器実測図（5）

C. 甗（第26図）

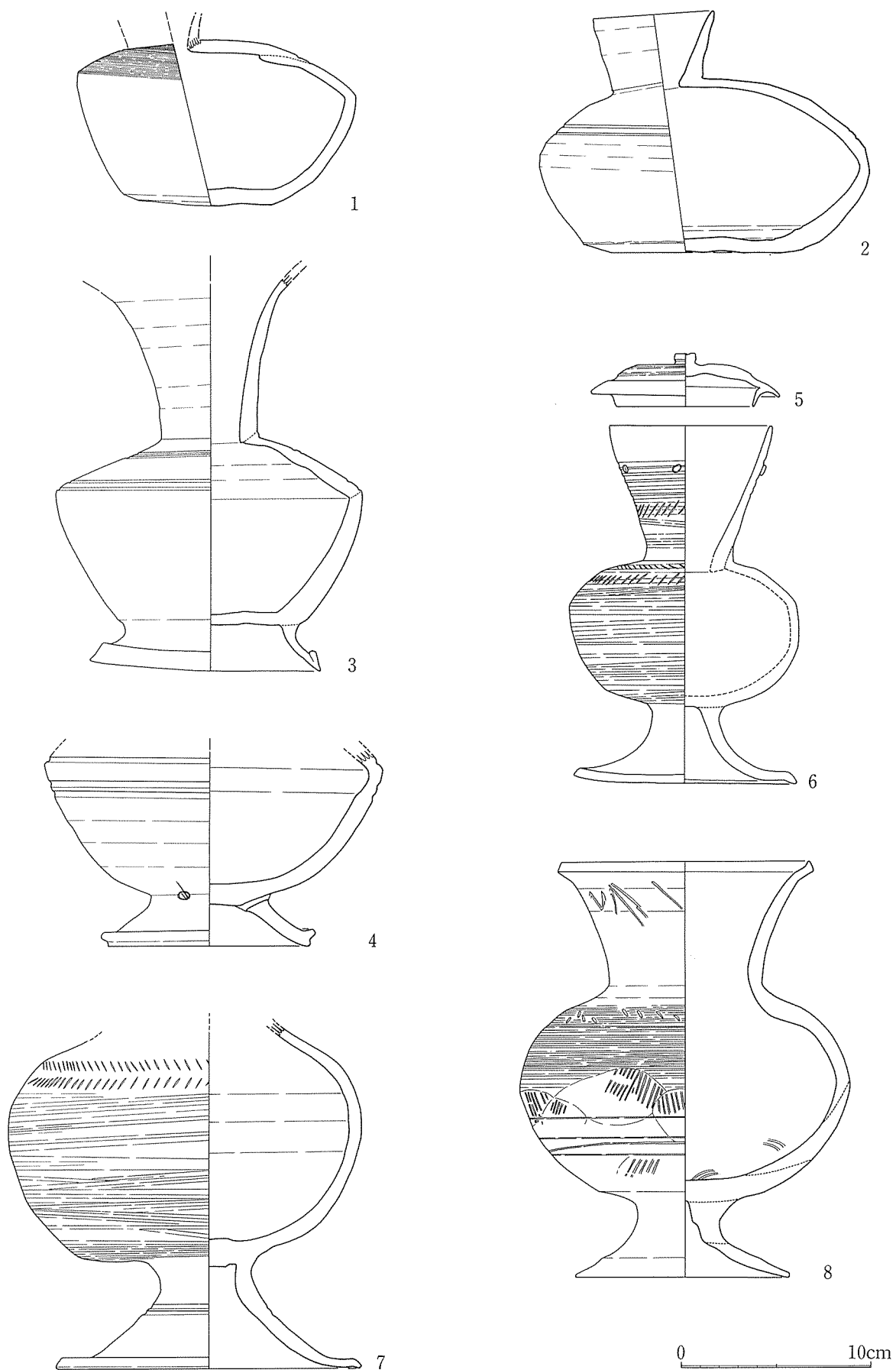
1は口縁部を欠損。楕円形の体部を有するが、肩部の張りは無い。体部中央に沈線を有し、その上部には刺突文を施す。底部は丸底で、静止ヘラケズリを施す。口頸部はその基部より外



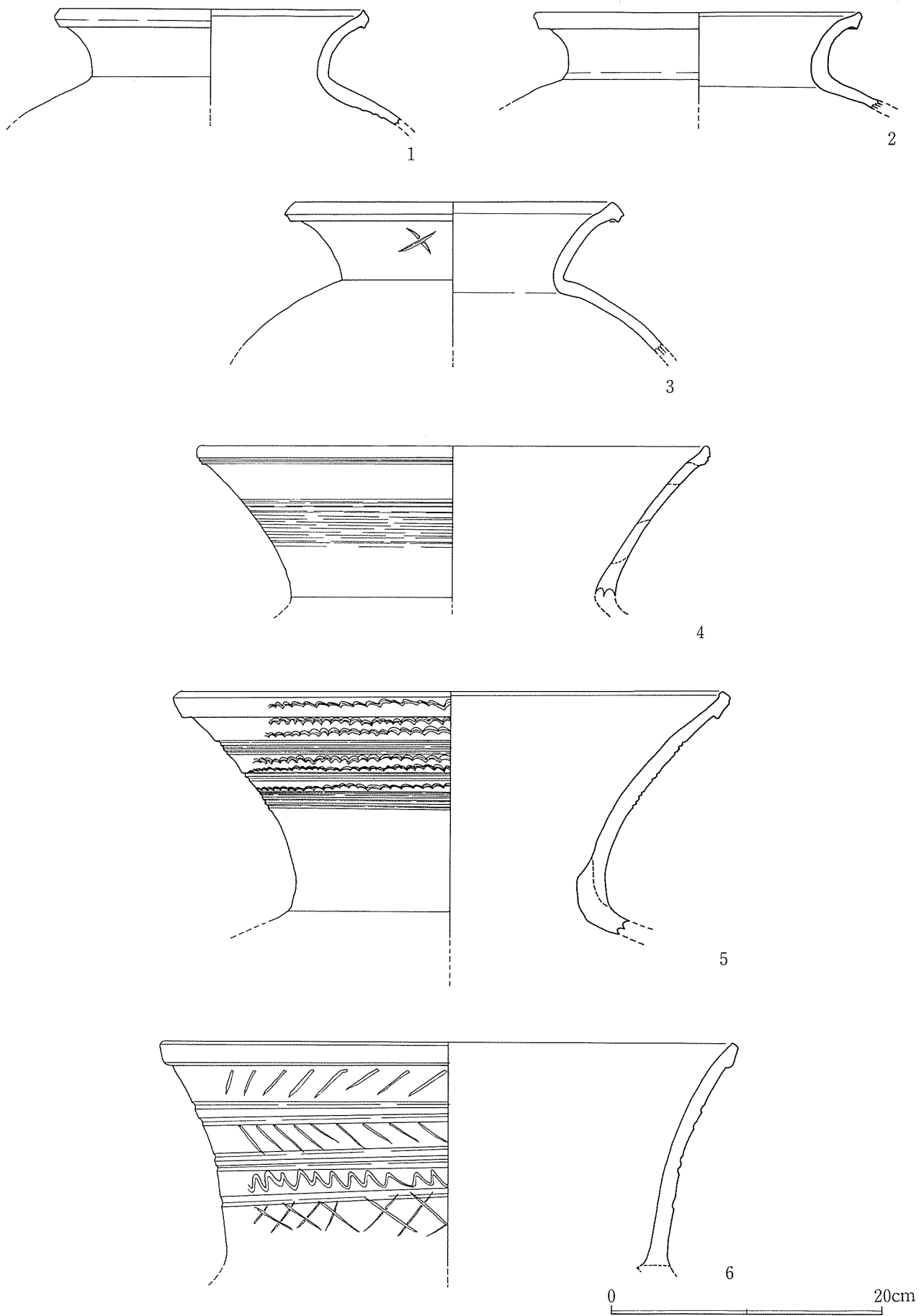
第26図 出土須恵器実測図（6）



第27図 出土須恵器実測図（7）



第28図 出土須恵器実測図(8)



第29図 出土須恵器実測図(9)

反し、端部近くで大きく外方に屈曲し、その後上方に伸びる。2は体部下半を欠損。残存する体部下半には静止ヘラケズリが施され、おそらく底部においても同様の調整がなされたものと考えられる。焼成は良好で、赤褐色を呈するいわゆる赤焼き土器である。3はやや肩部の張った楕円形の体部を有し、肩部はカキメ調整をおこなった後、2条の沈線を施す。口頸部は真つすぐ上方に伸びた後、大きく外反し、口縁端部でわずかに内傾する。頸基部は細い。底部は平底で、回転ヘラケズリを施す。4は口頸部を欠損。端部が内傾する台部を有する。体部上半には2条の沈線を有し、その上部には刺突文を施す。焼成はB類。

d. 短頸壺 (第27図)

短頸壺 (1～3・8)

1は口径6.3cm、器高7.0cmで、胴部下半にはカキ目調整、胴部上半及び口頸部には回転ナデ調整を行なう。底部は回転ヘラケズリ調整。器壁薄く、焼成も良好(B類)。2は口径4.0cm、器高7.8cmで、ほぼ完形。口頸部及び体部にはナデ調整を施し、底部にはナデ調整を行った後、その周辺に回転ヘラケズリを施す。焼成はD類で、軟質。3は口縁部、底部を欠損。カキ目調整を行ない、肩部には刺突文を2段、綾杉状に施す。焼成はB類。8は口径(復元)7.5cm、器高21.8cmで、胴部にはカキ目調整を行ない、のち上半部には2条の沈線を施す。底部はナデ調整の後、その周辺部に回転ヘラケズリを施す。焼成はC類。

有蓋台付短頸壺 (7)

7は蓋6とセットになるものと考えられる。体部が球形をなし、胴部中央に3条の沈線を施し、その間に綾杉状に刺突文を施す。口径6.1cm、器高17.0cmで、焼成はA類。

台付短頸壺 (4・5)

4は口縁部、脚部を欠損。脚には円形スカシを5方より施し、肩部には刺突文を有する。焼成はC類。5は脚部を欠損。肩部には2条の沈線を施し、胴部中央にはカキ目痕が残る。口径8.6cm、残存高16.9cm。焼成はD類で、軟質である。

e. 長頸壺 (第28図3～8)

有蓋台付長頸壺 (6)

口径8.5cm、器高18.8cmで、蓋5とセットになるものと考えられる。胴部及び口縁部下半にはカキ目調整を行ない、肩部には2段、口縁部中央には1段の刺突文を施す。脚端部の形態はa類。蓋・壺とも焼成はA類。

台付長頸壺 (3・4・7・8)

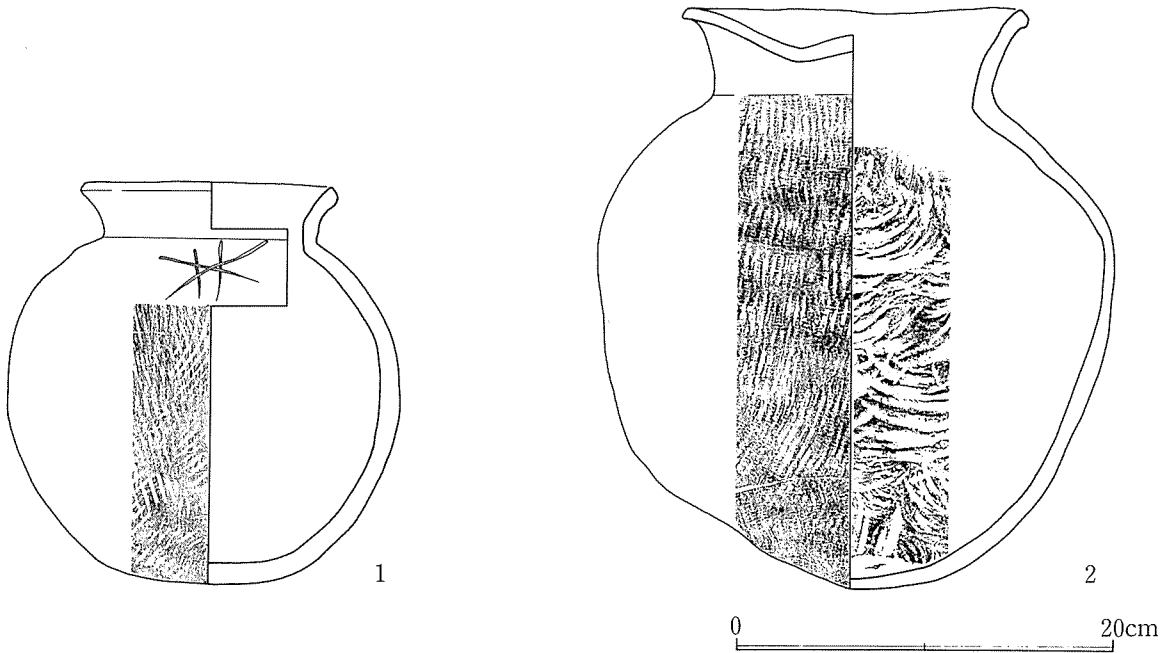
3は口縁部を欠損。残存高は20.7cmで、肩部には2条の沈線を2組施す。台部は短く、その端部は折り返しにより断面三角形に肥厚させる。焼成はB類。7は口頸部を欠損。脚部の中央には2条の沈線を施し、肩部には刺突文を2段綾杉状に施す。焼成はA類。

f. 平瓶 (第28図1・2)

2は体部上半部分に2条の沈線を施し、底部はナデ調整の後、周辺部分に回転ヘラケズリを施す。口径6.4cm、器高12.7cm。焼成はC類で、赤褐色を呈する。1は口縁部を欠損する。肩部にはカキメ調整、後に2条の沈線を施す。底部はナデの後、周辺部分に回転ヘラケズリ調整。残存高8.8cm。胎土は粗く、砂粒を多く含み、焼成はB類。

g. 甕 (第29・30図)

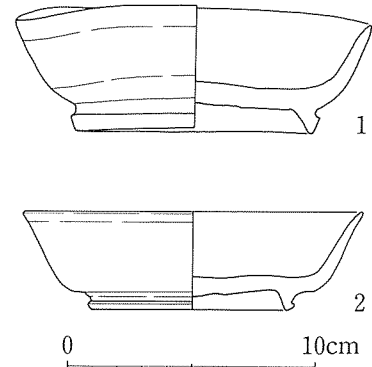
第29図1～6はいずれも甕の口頸部片である。1・2は無文で、復元口径は1が22.1cm、2が23.5cm。いずれも焼成はB類。3は頸部にヘラ記号を有し、口径23.2cm。焼成B類。4は頸部中央にカキ目調整が施される。焼成B類。5は頸部に数条一組の沈線を3段施し、その間と口縁肥厚部に1～2条の波状文を施す。焼成B類。6は1～2条一組の沈線を3段施し、その間にそれぞれヘラ状工具によって、上方から順に斜沈線－斜沈線－波状文－斜格子文を刻む。焼成B類。第30図1は口縁部を一部欠損するのみで、ほぼ完形。肩部にヘラ記号を有する。外器面では平行タタキ痕を胴部上半では粗くナデ消している。内器面には同心円タタキ。焼成はC類。2は無文で、口縁部が大きく焼け歪む。外器面は平行タタキ、内器面は同心円タタキで、焼成はB類。(藏富士寛)



第30図 出土須恵器実測図 (10)

h. 碗 (第31図)

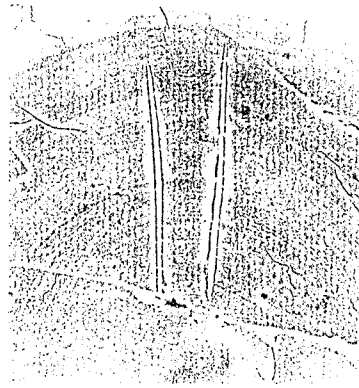
1・2ともにいわゆる萩尾型の碗である。1は完形であるが、全体に焼きひずみのため大きく歪む。外器面・内器面は回転ナデ調整を施すが、内器面は一部に不整方向のナデ調整を施す。底部はヘラ切り未調整で、ロクロから切り離れた後、高台を貼り付ける。高台はヘラケズリ調整後、回転ナデ調整を施す。口径14.3cm、器高5.0cm。2は口端部がやや外反し、外器面・内器面ともに回転ナデ調整を施す。内器面は回転ナデ調整後、一部に不整方向のナデ調整がみられる。底部は回転ヘラ切り未調整で、その後高台を貼り付けている。高台にはヘラケズリ調整を施す。口径13.8cm、器高4.0cm。これらの碗は、高台が底部端に貼り付けられていること、その断面形などから、8世紀前葉から中葉に位置付けられると考えられる。(若杉竜太)



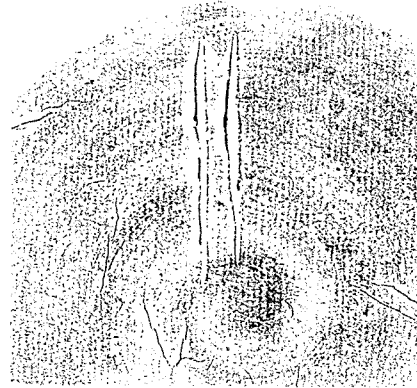
第31図 出土須恵器実測図 (11)

ヘラ記号について

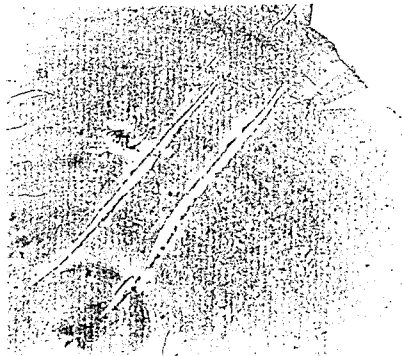
椿原古墳から出土した須恵器の7個体でヘラ記号が確認できた。そのすべてを記載し、今後の研究に対する資料を供したい。
(藏富士寛)



第22図 8



第22図 7



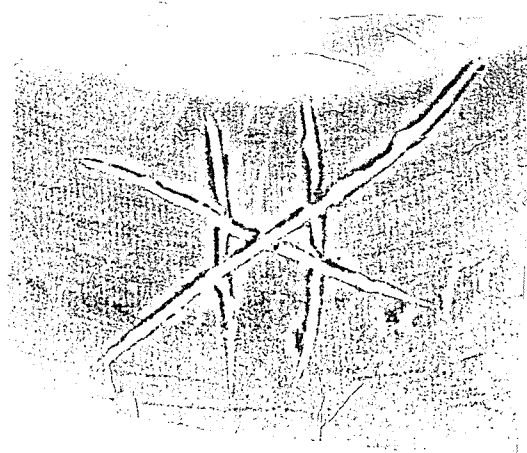
第23図 13



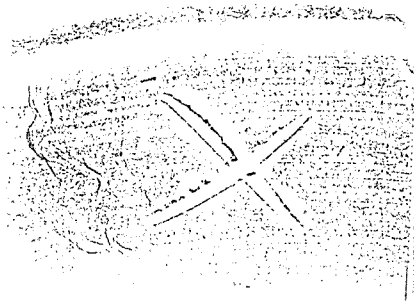
第24図 5



第24図 2



第30図 1



第29図 3

第32図 須恵器ヘラ記号集成図

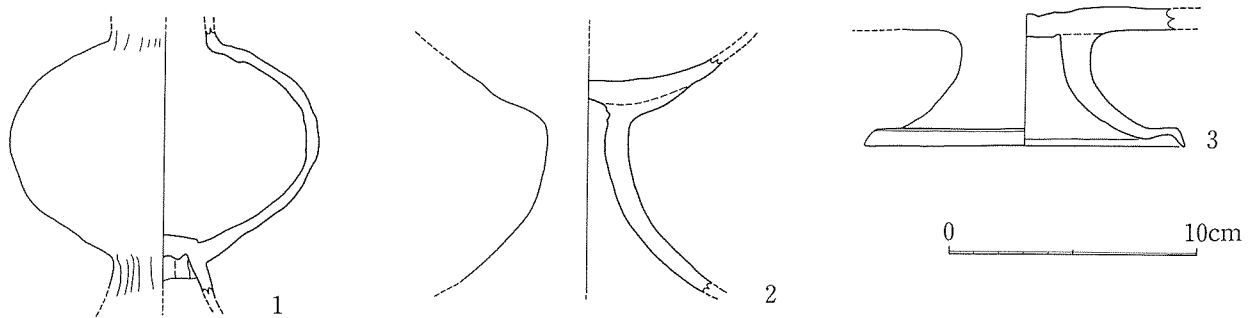
(2) 土師器 (第33図)

a. 台付壺 (1)

口縁部、胴部および脚部はヘラケズリ調整後、ナデ調整を施す。一部に丹が付着する。脚部は貼り付けており、胴部と脚部内器面の接合部に当て具痕がみられる。

b. 高杯 (2・3)

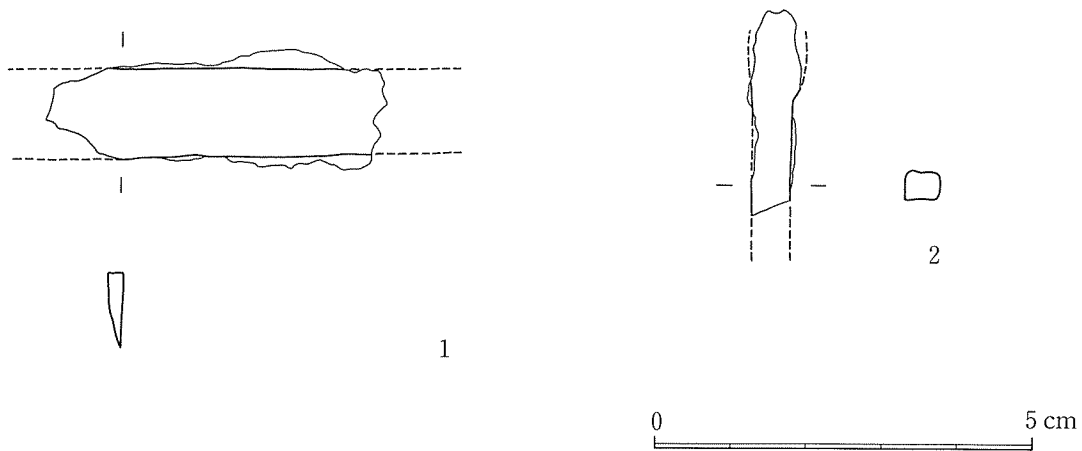
1は、全体に磨耗が激しく、調整は明確でないが、杯部内器面には回転ヘラケズリ調整を施す。残存高9.4cm。2は、偏平な杯部を有する。外器面はナデ調整を施すが、内器面は磨耗が激しく、調整は明確でない。脚部内器面は回転ナデ調整を施す。残存高5.3cm。(若杉竜太)



第33図 出土土師器実測図

(3) 鉄器 (第34図)

1は、一方のみに刃を作り出していることから刀子と思われる。羨道部Ⅲ-2層より出土。残存長4.5cm、身幅1.2cm。2は鉄鏃である。篋被部のみが残存し、尖根式と思われる。玄室内埋土中より出土。残存長5.4cm、最大身幅1.3cm。(若杉竜太)



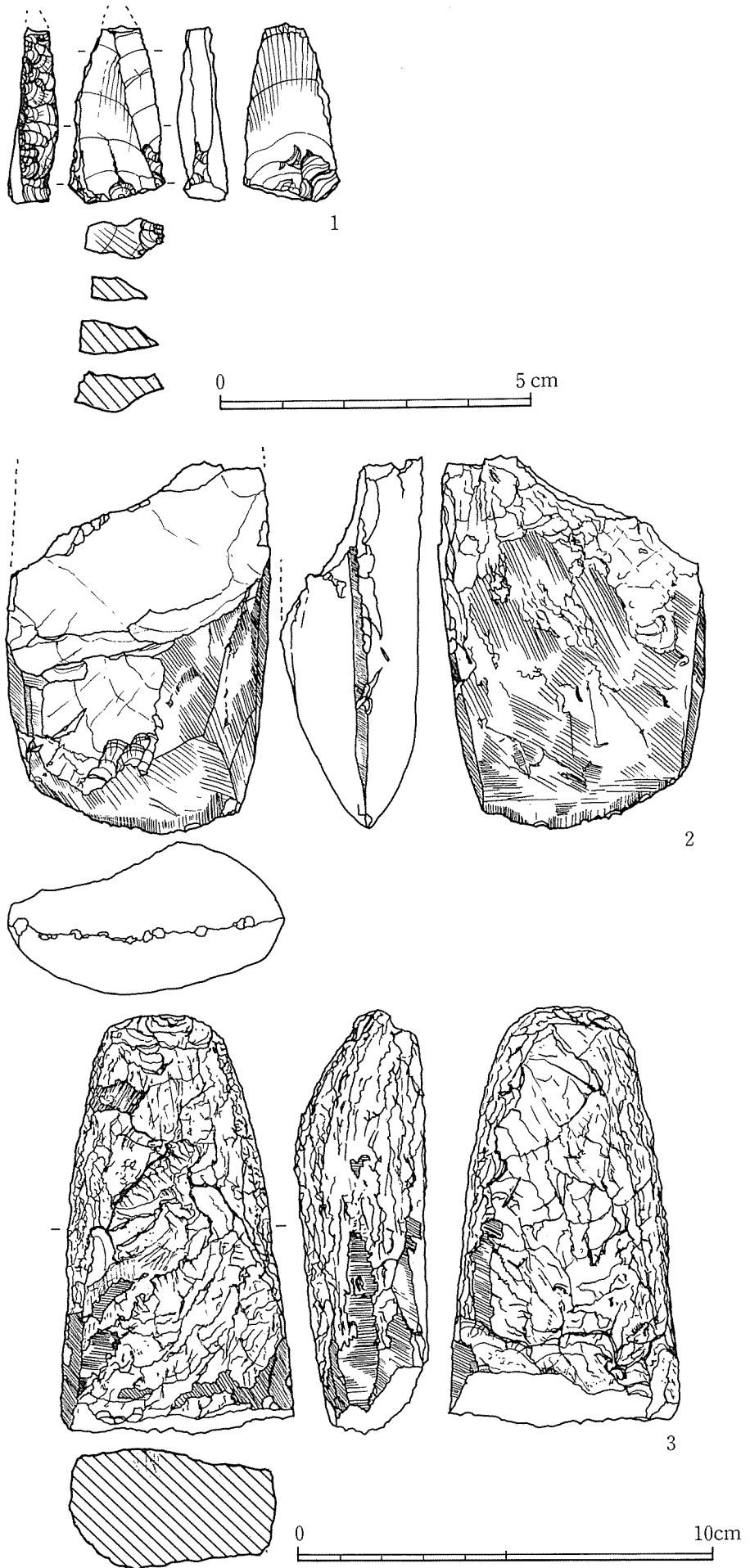
第34図 出土鉄器実測図

(4) その他の時代の遺物

出土石器 (第35図)

1 は節理が多く走る漆黒色黒曜石を用いた石刃素材のナイフ形石器である。左側縁に急角度のブランディングを施すことで素材の幅を減じる。先端は欠損するが、ほぼ完形。残存長2.9cm、最大幅1.6cm、重量3gを計る。

2・3 は磨製石斧である。2 は灰白色の玄武岩を用いる。頭部は欠損しており全体の形態・調整は不明であるものの、刃部の形状からいわゆる蛤刃石斧と思われる。刃部左側が片減りしており一定方向から使用したのであろう。残存長8.8cm、最大幅6.3cm、重量179gを計る。3 は蛇紋岩系の変成岩を用いる。石器表面は風化によってかなり剝落するが、一部研磨面が残る。刃部は欠損し、残存長10.1cm、最大幅5.6cm、重量219gを計る。出土した石器は、当地において古墳築造以前に人間の活動があったことを物語る。弥生土器などの関連資料の増加に期待したい。(藤木聡)



第35図 出土石器実測図

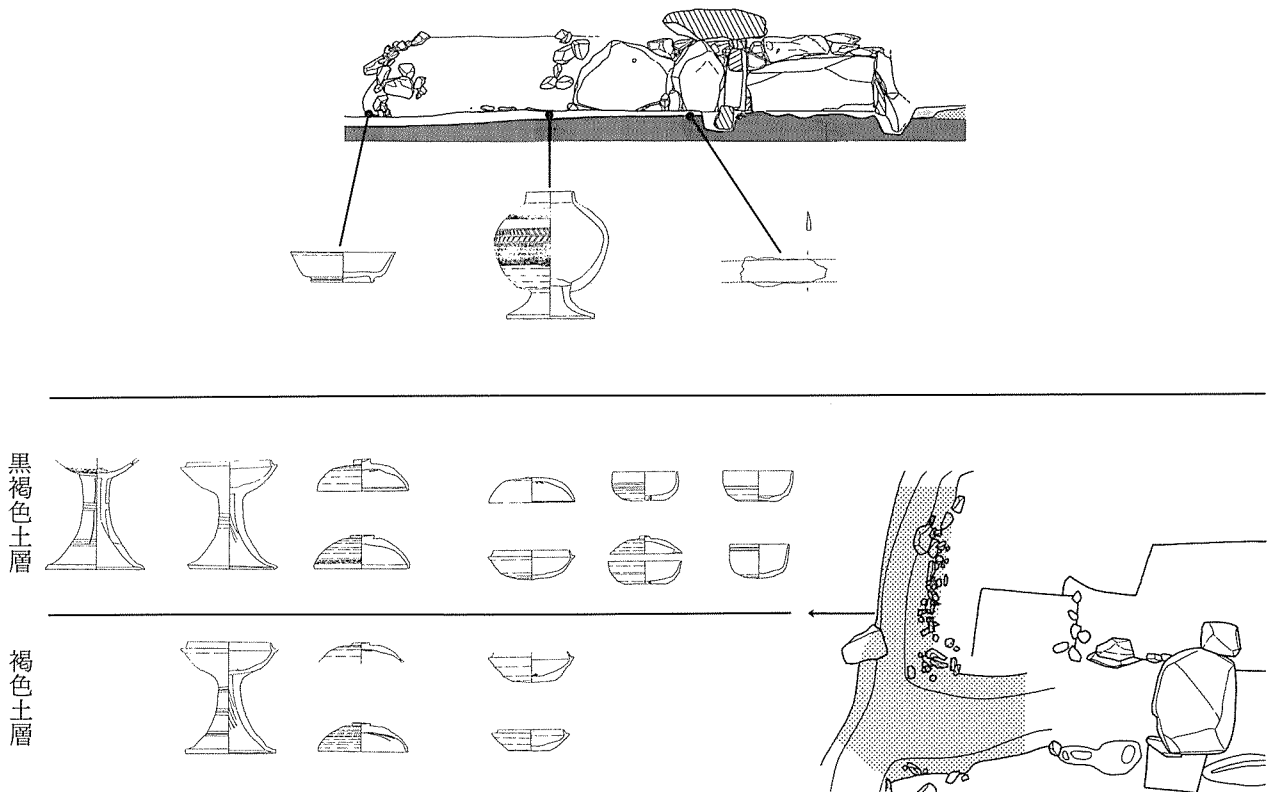
(5) 遺物の出土状況 (第36図)

椿原古墳では須恵器を中心とした数多くの遺物が出土している。しかし、その多くは周溝・墓道部分より出土しており、大半が流れ込みによるものであって、ただ刀子が羨道部床面上から出土したに過ぎない。また羨道整地層からは台付短頸壺の一部がまとまった形で出土している(第36図上)。以下では須恵器を中心に、周溝・墓道部分からの出土状況について述べていきたい。

周溝・墓道部分では、2・3区の周溝、特に3区の周溝と墓道の交差部分に多くの遺物が集中する。遺物の大半は墳丘正面と墓道部分より出土している。周溝底のレベルは3区南西辺において、下方にゆるやかに傾斜し、墓道との交差部分で平坦になっていくため、自然と遺物が集積したのであろう。周溝内での層位は、大きく黒褐色土層と褐色土層に分けることができ、3区の周溝と墓道の交差部分の遺物を出土した層位ごとに、特に当古墳で特徴ある遺物である有蓋高杯を中心にみていきたい。

有蓋高杯 (第36図下)

有蓋高杯の出土は、ほぼこの箇所に限られる。数量的に多い有蓋高杯Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ類の出土状況を見ていくと、黒褐色土層：高杯Ⅰ、Ⅲ類 褐色土層：高杯Ⅱ類と各型式毎にまとまりが認められる。しかし蓋をみると、黒褐色土層：蓋Ⅱ、Ⅲ類 褐色土層：蓋Ⅰ、Ⅲ類と形式的にみた蓋-高杯の組み合わせとは対応せず、若干の問題を残しているが、しかしこれらにみられるようなほぼ同時期の所産と考えられる高杯の型式毎の出土層位の違いは、古墳祭祀において、高杯が各形式毎使い分けされていた可能性も考えられる。 (藏富士寛)



第36図 遺物出土状況図

(6) 宇土高校所蔵の「椿原」出土須恵器

富樫卯三郎・三島格・高木恭二

はじめに

県立宇土高校には、宇土市内をはじめとする近隣の松橋町・不知火町・富合町・城南町などから出土した考古資料が数多く収蔵されている。

これは、同校所属の文科系サークルである宇土高校社会部の戦後45年あまりにわたって行なわれてきたクラブ活動によって行なわれた発掘調査や踏査・表採などによって収集されたものや、寄贈されたものなどで構成されている。その数は相当数にのぼるが、これらの資料は当該地域の歴史を知る上で貴重なものであるのは当然のことであるが、調査は同校社会部の顧問であり、筆者のひとりである富樫をはじめとする歴代の顧問や社会部員、OB・OGによってなされたものであり、調査や収集には地域の方々をはじめとして、数多くの人々の努力・協力があつたということを忘れることはできない。

1. 「金岳遺跡カード」と「椿原須恵器」

ここで紹介する資料もそのようなもののひとつであり、これらは、今回発掘報告がなされる椿原古墳から出土したとみなしてよいものである。すなわち、社会部資料保管プレハブにある7点の「椿原」と注記された須恵器について、筆者のひとりである高木は、それがすでに昭和40年代はじめには、社会部資料として保管されていたことを知ってはいたものの、その来歴についてこれまで伝え聞いたことはなかった。

ところが、この資料の発見のいきさつを知るてがかりとなる「金岳遺跡カード」の控を筆者のひとりである三島が、発見当時から保管しており、10年ほど前にそのカードは高木に渡されていた。高木は、カードを預かってはいたものの、これに関する調査を行なわないまま今日に至っていたのであるが、今回椿原古墳の発掘調査がなされたことによって、このカードの意味が改めて認識できるようになったので、ここに関係者連名に上、短文を寄せることとする。

この資料は昭和34年に発見されており、今日まで既に38年の時間が経過している。カードには次のような記載があり、写真も添付されている。現在残っている須恵器と写真を照合すれば、本来は13点ないしはそれ以上あつたことをうかがうことができる。

なお、今回便宜的にこの写真の各須恵器にNoを付し、図と対応させるようにしたが、第37図1・2・3・5・6・7は今回掲載した実測図と対応するものの、4は写真に写っていない。それに8～13までは今回実物を探ることができなかつたので図はなく、1は上面写真と、高坏5の上にも写真がでている。

埋蔵文化財包蔵地調査カード

金岳遺跡

遺物……………土器類（古墳期）――高坏等

場所……………金岳七八一

地主名………松村藤雄

住所 宇土市轟椿原船津五二〇番地

発見年月…三十四年十二月中旬

出土状況

ブドウの植え穴掘り中深さ一米位の所より初めて出土

今回の椿原古墳発掘調査中に、当該須恵器の発見者である松村藤雄氏が現地をたずねられ、本資料の出土地を教示いただいたが、それはまさに今回の調査で検出された椿原古墳石室の前庭部にあたっていた。

2. 須恵器

資料の総数は、写真には高坏3点と蓋が平面9点、高坏5の上に1点がある。この高坏5上の1点は蓋1そのものであり重複するし、図4は写真にはないものの、他例と同様「椿原」の注記がしてあるところから、写真以外にもあったということになる。

つまり、有蓋高坏3点、有蓋高坏の蓋9点、それに坏蓋1点の計13点ないしはそれ以上あったが、現在確認できる須恵器そのものは、有蓋高坏3点、有蓋高坏の蓋3点、それに坏蓋1点の計7点である。以下、それぞれについて発掘報告の本文でなされた分類を加味しながら、解説を行なうことにする。なお、それぞれの資料の詳細については、第1表須恵器観察表にまとめた。

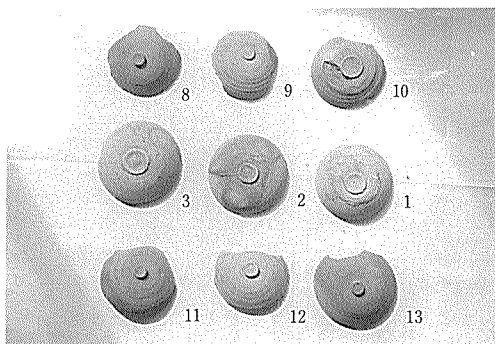
蓋2・3は、有蓋高坏の蓋であり、本文分類の蓋Ⅲ類に該当する。1は天井部のつまみのまわりをケズリ残しており、別にⅤ類とする必要があろう。坏蓋4は、本文第25図3に調整や形状は近いものの、この4の方が体部にややふくらみをもつ。有蓋高坏5・6は、本文高坏分類のⅠ類に該当するが、7は今回の発掘資料には見いだせなかった。

今回は現物を確認できず図化できなかつたものの、写真が残されている8～13について簡単にふれておく。有蓋高坏の蓋6点は、いずれも上部からの平面写真であるので、詳細を語ることはできないが、1～3までのものと比較すれば、つまみの形状大きさからみても8・9・11・12・13は本文分類Ⅰ類である可能性が高いし、10はⅢ類にあたるものとみられる。なお、11・12の蓋はやや口径が小さいものようである。

以上によって、「金岳遺跡＝椿原」の須恵器が、今回の椿原古墳の須恵器と一致するということが明らかである。時期的にも、小田富士雄氏編年のⅣB期、陶邑編年のⅡ－5段階に属する7世紀前半のものであることが推測できるようになった。

おわりに

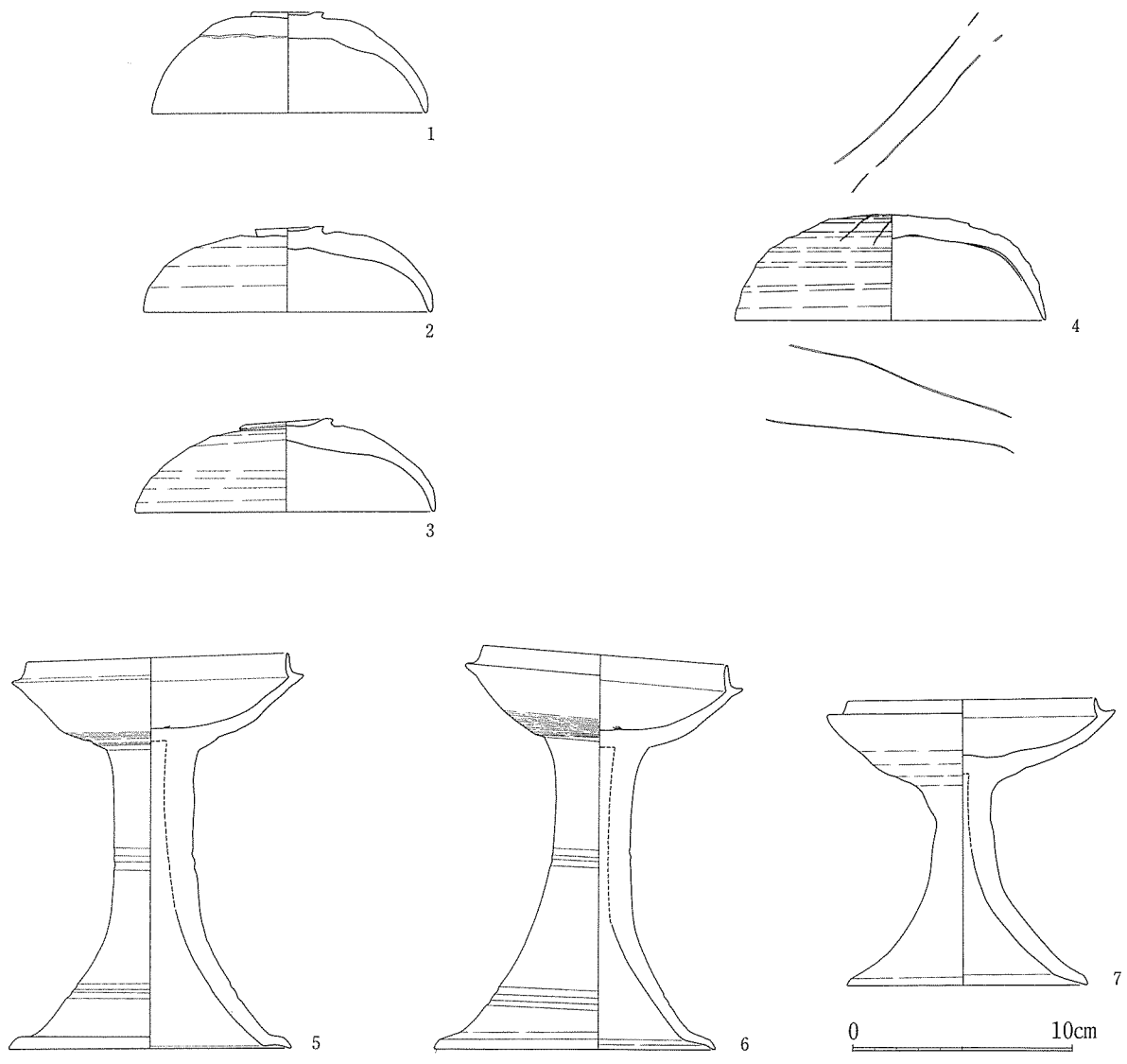
すべてを図化できなかつたとはいえ、社会部資料として保管されていたものが、椿原古墳出土品であることが明らかになり、昭和34年当時の発見者である松村藤雄氏による発見場所の証言が一致した。宇土高校に寄贈されておられた松村氏のご好意に今回改めて感謝の意を表す。なお、須恵器の実測には蔵富士寛氏をわずらわせたことを明記し、同氏にも謝意を表したい。



埋蔵文化財包蔵地調査カード添付写真1



添付写真2



第37図 「椿原」出土須恵器実測図

第1表 出土須恵器観察表

・()内の数値は復元値
 ・[]の数字は第2表 椿原古墳須恵器胎土分析表番号に対応

	土器 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	形態上の特徴	技法上の特徴
有 蓋 高 杯	第21図 1 [24]	—	—	・脚部に2条1組の沈線を2段施す	・杯部外面底部にカキ目調整 ・杯部内面底部に不整方向のナデ調整
	2 [17]	—	—	・脚部に2条1組の沈線を2段施す ・4方2段のスカシ状沈線を有する	同上
	3	11.1	13.2	・杯体部がわずかに膨らみ、受部付近で 外方に屈曲する ・立ち上がりは比較的高く、直立する ・脚部に螺旋状の沈線を2段施す	・杯部外面底部にヘラケズリ、のちナデ 調整 ・杯部内面底部に不整方向のナデ調整
	4	10.2	10.7	同上	・杯部外面底部にカキ目調整 ・杯部内面底部に不整方向のナデ調整
	5	10.4	14.2	・杯体部がわずかに膨らみ、受部付近で 外方に屈曲する ・立ち上がりは比較的高く、直立する ・脚部に螺旋状の沈線を3段施す	・杯部外面底部にヘラケズリ、のちナデ 調整 ・杯部内面底部に不整方向のナデ調整
	6 [12]	10.9	14.8	同上	・杯部外面底部にナデ調整 ・杯部内面底部に不整方向のナデ調整
	7 [11]	14.1	10.6	同上	同上
	8	10.7	14.1	・杯体部は膨らみをもたず、直線的 ・立ち上がりは比較的低く、内傾する ・脚部中央に螺旋状の沈線一条施す	・杯部内面底部に回転ナデ調整
	9 [7]	(10.8)	14.9	同上	同上
	10 [10]	10.9	14.5	同上	同上
	11 [9]	11.0	14.6	同上	同上
	12	(11.1)	14.6	同上	同上
	第22図 1 [16]	(10.7)	15.1	・杯身は深く、杯体部は直線的 ・立ち上がりは比較的高い	
	2 [15]	—	—	・脚部は基部が太く、沈線を有さない	・杯部外面底部にヘラケズリ調整
	3	—	—	・脚部中央に2条の沈線	
	4	(10.1)	—	・杯体部がわずかに膨らみ、受部付近で 外方に屈曲する ・立ち上がりは比較的高く、直立する	・杯部外面底部にナデ調整 ・杯部内面底部に不整方向のナデ調整
	5	—	—	・杯体部がわずかに膨らみ、受部付近で 外方に屈曲する ・立ち上がりは比較的高く、直立する ・脚部中央に2条の沈線	・杯部外面底部にナデ調整
	6	(10.4)	9.9	同上	・杯部外面底部にナデ調整 ・杯部内面底部に不整方向のナデ調整
	7 [13]	10.0	11.2	・杯体部は直線的で、受部の下方が強く ナデつけられ、わずかにくぼむ ・杯身は比較的低く、立ち上がりは内傾 する	・杯部内面に2条の沈線によるヘラ記号
	8	9.6	11.0	同上	同上
9 [14]	—	—	・脚部中央に2条の沈線	・杯部内面底部に不整方向のナデ調整	
第23図 1	—	—	・天井部のつまみは比較的低くボタン状 を呈し、上面はわずかにくぼむ	・天井部は回転ヘラケズリ調整、後つま みをはりつける ・天井部内面には不整方向のナデ調整	

有蓋高杯	第23図 2	—	—	同上	同上
	3	—	—	同上	同上
	4 [4]	12.7	4.1	・天井部のつまみは比較的高いボタン状を呈し、上面は大きくくぼむ	・天井部は回転ヘラケズリ調整、後つまみをはりつける ・天井部内面には不整方向のナデ調整 ・内器面の口縁端部付近には1条の沈線を巡らせる
	5 [6]	12.4	4.1	同上	同上
	6	12.1	4.2	同上	同上
	7	12.4	4.9	・天井部のつまみは偏平で、側面を削り出し鋭角的に仕上げ、つまみ上部はわずかにくぼむ	・天井部は回転ヘラケズリ調整、後つまみをはりつける
	8 [2]	12.5	4.9	同上	・天井部は回転ヘラケズリ調整、後つまみをはりつける ・内器面には一部カキ目調整
	9 [1]	12.4	4.9	同上	・天井部は回転ヘラケズリ調整、後つまみをはりつける
	10 [3]	12.4	4.5	同上	・天井部は回転ヘラケズリ調整、後つまみをはりつける ・外器面端部付近には回転ナデの痕跡が残る
	11	(11.9)	4.2	同上	・天井部は回転ヘラケズリ調整、後つまみをはりつける
	12	—	—	同上	同上
	13 [5]	(11.8)	3.9	同上	・天井部は回転ヘラケズリ調整、後つまみをはりつける ・内器面には2沈線によるヘラ記号あり
	14	—	—	同上	・天井部はカキ目調整、後つまみをはりつける
	15	—	—	・天井部には円筒状の軸に円盤状のつまみを付す	・天井部はカキ目調整、後つまみをはりつける
	無蓋高杯	第24図 1 [31]	8.6	8.5	・脚端部の形態はc類に類似
2 [32]		9.3	9.7	・比較的深い杯部を有し、脚中央には1条の沈線を有する ・脚端部の形態はa類	・杯内部には×字形のヘラ記号
3		(8.5)	9.9	・杯部は中央で段をなし、大きく屈曲して上方にのびる ・脚端部の形態はc類	
4		—	—	・杯部外器面下部にはカキ目調整、後幅広の沈線を施す ・脚部には3方向のスカシ状の沈線あり	・杯外器面底部にはヘラ記号
5		—	—	・脚部にはカキ目調整、後中央に2条の沈線を施す ・3方2段のスカシ状沈線を互い違いに刻む ・脚端部形態はa類	
6 [37]		13.4	11.2	・杯部は比較的浅く、中央部においてわずかに段をなす ・脚中央部には2条の沈線 ・脚端部形態はa類	・杯内部には不整方向のナデ調整
7		(14.1)		・大型で、杯外器面は強いナデ調整のため、凸凹をなす	
蓋杯	第25図 1	(11.3)	3.4		・天井部はヘラ切り後、ナデ調整 ・口縁端部付近には沈線を巡らす ・内器面天井部には不整方向のナデ調整

蓋	第25図 2 [18]	(11.7)	4.0		<ul style="list-style-type: none"> ・天井部は周辺部分に回転ヘラケズリ調整、ヘラ切り部分は未調整 ・内器面天井部には不整方向のナデ調整
	3 [23]	10.4	3.8	・外器面は強いナデ調整のため、凹凸をなす	・天井部はヘラ切り後、ナデ調整
	4 [19]	(11.4)	4.0		・天井部は粗い回転ヘラケズリ調整
	5 [22]	(10.0)	4.0	・体部はわずかに膨らみをもち、立ち上がりも比較的高い	・底部にはナデ調整、その周辺に回転ヘラケズリ調整を施す
	6 [21]	(10.2)	—	同上	同上
	7 [20]	—	—		<ul style="list-style-type: none"> ・底部にはナデ調整、その周辺に回転ヘラケズリ調整を施す ・内器面底部には不整方向のナデ調整
	8 [27]	8.5	2.9	・杯身は浅く、体部は直線的で、立ち上がりも比較的短い	
	9 [34]	(9.2)	4.0	・体部中央に2条の細沈線	・底部は周辺を回転ヘラケズリ調整の後、ヘラ切り部分を静止ヘラケズリ調整
	10 [33]	(8.4)	3.8	・体部中央に2条の沈線	同上
	11 [35]	(7.8)	4.5	・外器面口辺部に2条の沈線	・底部は回転ヘラケズリ調整
	12 [28]	(7.0)	2.4	・蓋受けのかえりを有し、天井部にはつまみをもつ	・天井部に回転ヘラケズリ調整の後、つまみを付す
	13 [29]	(9.6)	3.0	・体部中央に1条の沈線	・底部は回転ヘラケズリ調整
	罍	第26図 1 [25]	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ・体部は楕円形を呈し、その中央には1条の沈線を有す ・沈線上部には刺突文を施す ・口頸部は端部近くで段をなし、大きく外側に屈曲しその後上方にのびる ・口頸部の中央には沈線を1条、螺旋状に施す
2 [26]		—	—		同上
3		9.6	13.7	<ul style="list-style-type: none"> ・体部上半にはカキ目調整をした後、2条の沈線を施す ・口頸部は真っすぐ上方に伸びた後、大きく外反し、中央部には2条の沈線を施す ・底部は平底 	・底部周辺には静止ヘラケズリ
4		—	—	<ul style="list-style-type: none"> ・体部の上半には2条の沈線を有し、その上方に刺突文を施す ・底部には、中央に2条の沈線が施された脚部を有する 	
短頸壺	第27図 1 [36]	6.3	7.0		<ul style="list-style-type: none"> ・胴部下半にはカキ目調整、胴部上半には回転ナデ調整 ・底部は回転ヘラケズリ調整
	2	4.0	7.8		<ul style="list-style-type: none"> ・外器面全体にわたってナデ調整 ・底部はナデ調整を行った後、その周辺部分に回転ヘラケズリを施す
	3	—	—	・肩部には刺突文を綾杉状に施す	・外器面全体にわたってカキ目調整
	4 [42]	—	—	・脚部には5方より円形スカシを施し、肩部には刺突文	・外器面全体にわたってカキ目調整
	5 [45]	8.6	—	・肩部に2条の沈線	・体部下半にはカキ目調整
	6	8.7	3.8		<ul style="list-style-type: none"> ・器面全体にわたってナデ調整 ・天井部にはヘラ切りした後、ナデ調整

短頸壺	第27図 7	6.1	17.0	・胴部中央に3条の沈線を有し、その間に刺突文を施す	・胴部には部分的にカキ目調整の痕跡を残す
	8 [43]	(7.5)	21.8	・平底で頸部は細くしまっており、口頸部はゆるやかに広がる	・胴部全体にわたってカキ目調整 ・胴部下半にはタタキ目の痕跡が残る
平瓶	第28図 1	—	—		・肩部はカキ目調整の後、2条の沈線を施す ・底部はナデ調整の後、その周辺部分に回転ヘラケズリ調整
	2 [44]	6.4	12.7	・肩部に2条の沈線	・底部はナデ調整の後、その周辺部分に回転ヘラケズリ調整
長頸壺	第28図 3 [40]	—	—	・肩部に2条の沈線を2組施す ・台部は短く、その端部を折り曲げ、断面三角形に肥厚させる	
	4	—	—	・胴部の中央に1条、2条沈線をそれぞれ施す ・台部は短く、胴部との境には3方からの穿孔がみられる	
	5	7.2	2.8	・天井部にはカキ目調整の後、つまみを付し、太めの沈線を1条施す	
	6 [30]	8.5	18.8	・口頸部・肩部に刺突文を施す ・台端部の形態はa類 ・口頸部には粘土粒の張り付け	・口頸部の中央には沈線を数条、カキ目状に施す ・胴部にはカキ目調整
	7 [38]	—	—	・肩部には刺突文を綾杉状に施す ・脚部中央には2条の沈線 ・脚端部の形態はa類	・胴部全体にわたってカキ目調整
	8 [39]	12.9	21.9	・口頸部にはV字形などの刻文を施す ・肩部には刺突文	・胴部上半にはカキ目調整、胴部下半には一部タタキ目が残る
	第29図 1 [52]	(22.1)	—		
	2 [53]	(23.5)	—		
甕	3 [50]	23.2	—	・口頸部には×字形のヘラ記号	
	4 [48]	(36.8)	—	・口縁肥厚部下端には2条の沈線 ・口頸部中央にはカキ目調整の痕跡	
	5 [47]	(39.3)	—	・口頸部上半には数条の沈線を3組施し、その間には波状文を施す ・口縁肥厚部に波状文を1条施す	
	6 [46]	(41.0)	—	・2～1条の沈線を3組施し、その間に斜沈線—斜沈線—波状文—斜格子文を施す	
	第30図 1 [41]	12.6	21.1	・肩部にヘラ記号あり	
	2 [51]	17.8	30.6		
	第31図 1	14.3	5.0	・高台部が断面三角形に肥厚する「萩尾型」 ・底部は回転ヘラ切り後、未調整	・内器面には不整方向のナデ調整
	2	13.8	4.0	同上	同上

杯蓋	第37図 4	14.1	4.8	<ul style="list-style-type: none"> 天井部には回転ヘラケズリ調整後、ナデ 体部外面は強くナデつけられ、凹凸をなす 内器面は回転ナデ調整 	<ul style="list-style-type: none"> 内・外器面にはⅡのヘラ記号あり
有蓋高杯	第37図 1	12.4	4.6	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は粘土を継ぎ足して、わずかに隆起する 天井部は低いつまみを有し、中心部はわずかにくぼむ 	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は回転ヘラケズリ調整 つまみは周囲を削り出すことによって作り出す
	2	12.4	3.4	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は低いつまみを有し、中心部はわずかにくぼむ 	同上
	3	13.5	4.3	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は低いつまみを有し、その側面を削り出し、シャープに仕上げる 	<ul style="list-style-type: none"> 天井部は回転ヘラケズリ、つまみを付した後ナデ調整
	5	(11.8)	17.8	<ul style="list-style-type: none"> 脚部には2条一組の弱い沈線を2組施す 脚端部の形態はa類 	<ul style="list-style-type: none"> 立ち上がりは比較的高く、内器面底部には不整方向のナデ調整 杯部と脚部は接合後、カキ目調整
	6	(11.0)	18.1	同上	<ul style="list-style-type: none"> 同上 杯外面底部は回転ヘラケズリ後、ナデ調整
	7	(11.2)	12.4	<ul style="list-style-type: none"> 立ち上がりは比較的短い 脚端部の形態はa類に類似 	

IV 近世墓の調査

3区周溝外から近世墓を2基検出した。南東方向から各々1号・2号とする。いずれも墓壙の上半部が削平を受けている。以下に、現状の所見を述べる。

1号近世墓（第39図上）

墓壙は周溝を切って楕円形に掘り込まれ、長さ134cm、幅120cm、深さ66cmを計る。墓壙の底部南隅には大石（地山層中の礫）が一部露出する。埋土中から須恵器大甕片が3点出土したが、これらは墓壙を掘削した際に混入したものと思われ、近世墓に伴うものではない。

2号近世墓（第39図下）

墓壙は方形を呈し、長さ103+ α cm、幅140cm、深さ92cmを計る。墓壙は主軸方向に未掘部分を残すため全形は不明。墓壙底部には大小様々な礫（地山層中のもの）が露出し、また埋土中に埋葬時の風習に伴うと思われる2～5cm大の砂利がみられた⁽¹⁾。墓壙底部からは土人形（第38図）が出土し、これについては後述する。そのほか数点の須恵器・土師器片が埋土中より出土したが、1号近世墓の例と同様、墓壙を埋める際に混入したものであろう。

出土遺物

土人形（第40図）

素焼きのもので、現存長11.7cm、幅5.3cm、重量96gを計る。胎土は緻密で焼成は良好、色調は明茶褐色を呈し、背中側は煤けている。頭には冠状の突起を持ち、両脚は欠損する。製作技法は手捏ねであり、①頭・両手・両脚をひねりだし、②指で表面を整形したあと、③目・鼻・口・耳を棒状工具で書き出す。表面には指圧痕が残り、整形は粗雑である。

土人形は六道銭・はさみ・煙管などと並んで骨蔵器（墓壙）内からよく出土するもので、友引人形などの信仰対象や、玩具などといった性格が考えられる。今回出土した資料は友引人形である可能性が高いと言える⁽²⁾。

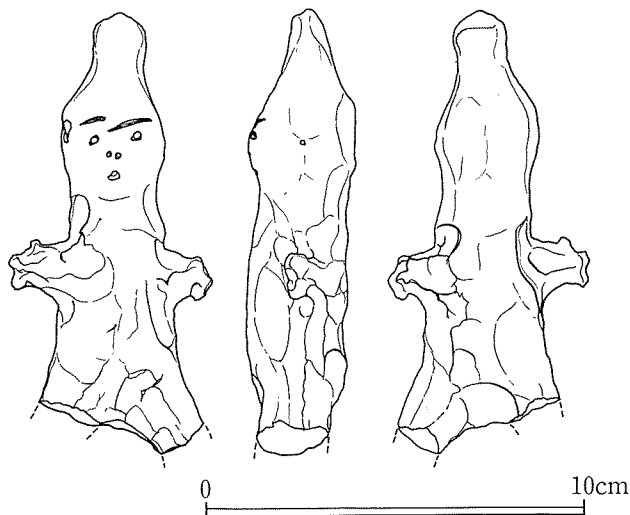
小結

今回検出した近世墓は2基と少ないものの、かつては近世墓群が存在したと考えるのが妥当であろう。当地は最近まで畑として利用されており、また周辺に墓石も見られないことから、開墾した際に改葬をおこなった可能性が高い。
(藤木聡・福岡理恵)

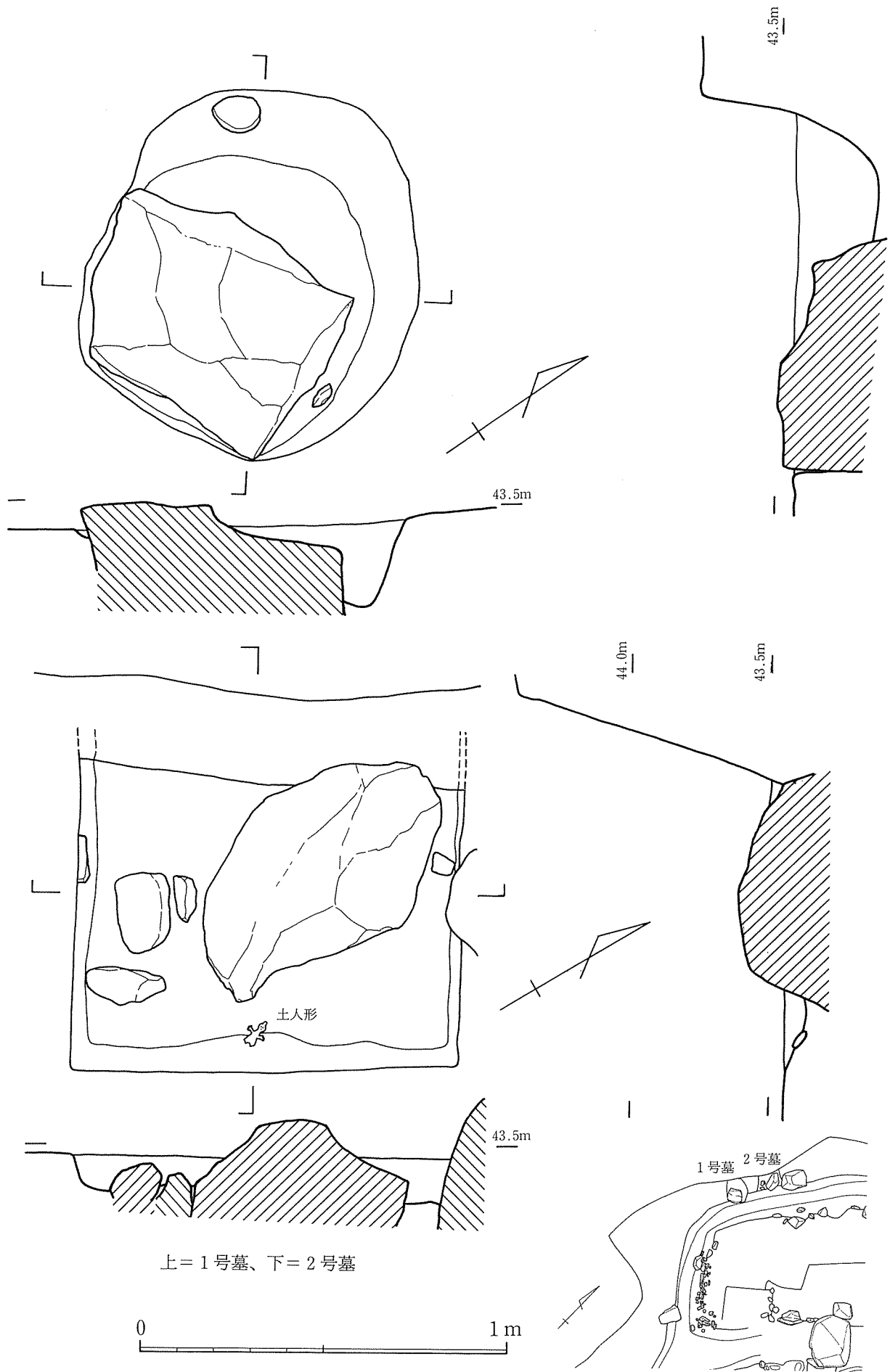
註

(1) 安田宗生「豊野村の民俗」豊野村史編纂協議会編『豊野村史』、1991年ほか

(2) 解釈の一つに、やむを得ず友引の日に葬儀をおこなう場合、死者の傍らに土人形やワラ人形を副葬する例の多いことが挙げられる。一方で墓以外から土人形を検出した場合は、「ままごと・箱庭道具（玩具）」もしくは「土人形は農村部では雛人形として流行し、都市部において墓の副葬品あるいは子供の玩具として用いられた」といった解釈がある。（嶋谷和彦「人を象る遺物—考古資料に見られる“人形”—」『日本の人形』堺市博物館、1988年など）



第38図 土人形実測図 (S=1/2)



第39图 近世墓実測図

V 考 察

1 椿原古墳出土須恵器の蛍光 X 線分析

奈良教育大学 三辻利一
辻本良介

はじめに

元素分析による古代土器の産地推定法の開発研究は生産地側の遺跡から出土する土器の分析化学的研究から始められた。須恵器窯跡は全国各地にあるので、地域差を示す指標元素を見つけるためには、窯跡出土須恵器が絶好の分析対象となる。全国各地の窯跡出土須恵器片を大量に分析した結果、K, Ca, Rb, Sr の 4 元素が有効に地域差を示すことが判明した。これら 4 元素のうち、K, Ca は粘土中の主成分元素であり、Rb, Sr は微量元素である。そのため、定性的に地域差を表示する分布図として、K-Ca 分布図と Rb-Sr 分布図が採用された。任意に取り出された 2 つの窯間の相互識別を定量的に行うには多変量解析法のうち、2 群間判別分析法が適用される。初期須恵器の産地推定には地元、地方窯産か大阪陶邑窯産かの 2 群間判別が有効であることが示されている。さらに、陶質土器か陶邑産の須恵器かの 2 群間判別を行うことによって、各地の 5 世紀代の古墳から出土する須恵器の産地はほとんど決定できる。6、7 世紀代になると、もう少し産地の数も増え、生産・供給の関係は複雑になる。したがって、供給先の遺跡出土須恵器の胎土を何らかの形で整理しておく必要がある。

本報告では、椿原古墳出土須恵器の蛍光 X 線分析の結果を報告するとともに、その胎土を熊本県内の窯跡出土須恵器胎土に対応させた。また塚原古墳群出土須恵器胎土とも比較した。さらに前田 B 遺跡から出土した埴輪胎土を周辺の古墳出土埴輪胎土と比較した結果についても報告する。

分析方法

須恵器片、埴輪片資料はすべて、表面をタングステンカーバイド製の刃をもつ小型研磨機で研磨し、付着汚物を除去したのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で 100 メッシュ以下に粉碎された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして、13 トンの圧力を加えてプレスし、内径 20 mm、厚さ 5 mm のコイン状錠剤試料を作成し、波長分散型の蛍光 X 線分析装置 (理学電機製 3270 型機) で分析した。この装置には 48 個の試料が搭載できる自動試料交換機が連結されており、完全自動分析が可能である。48 試料のうち、常に 1 個は岩石標準試料 JG-1 である。分析値は JG-1 の各元素の蛍光 X 線強度を使って標準化した値で表示した。標準化値と含有量の間には比例性があることは日本地質調査所から配布されている 10 数種類の岩石標準試料を使って示されている。したがって、標準化値から含有量 (主成分元素については酸化物形で % 濃度で、微量元素について単体形で ppm 濃度) へ変換することは容易であるが、データ解析は標準化値のまま行う方が便利であるので、分析値は標準化値で表示した。

分析結果

はじめに、熊本県内の窯跡出土須恵器の化学特性について述べる。下益城郡内にある萩尾大溜池窯、八ノ瀬戸窯、善助山窯から出土した須恵器はいずれも類似した化学特性をもっていたので、これらをまとめて分布図にプロットすることにした。第 40 図 (1) には K-Ca 分布図を示

す。よくまとまって分布することがわかる。これらをできるだけ多く包含し、逆にできるだけ領域を狭くとるようにして一つの領域を描いた。これを下益城領域とする。この領域は定性的にしか領界を示さないが、それでも、他の領域と比較する上には役に立つ。例えば、第40図(3)には宇土郡不知火町の朱斗叶松窯の須恵器のK-Ca分布図を示してある。下益城郡の須恵器に比べて明らかにK量が少なく、下益城領域をずれることがわかる。むしろ後述する宇城領域に分布することがわかる。これらの窯はいずれも8世紀代のものであるが、仮に、下益城郡内にも、6世紀代の窯があるとすれば、そこから出土する須恵器は下益城領域に分布するはずであるし、宇土郡内にも古い須恵器窯があるとすれば、朱斗叶松窯の須恵器の分布領域の近くに分布するはずである。全国各地のデータを見る限り、この考え方は支持されている。第40図(2)には下益城郡内の窯群出土須恵器のRb-Sr分布図を示す。この図でもよくまとまって分布しており、大部分の試料を包含するようにして下益城領域を描き、比較対照のための領域とした。第40図(4)には宇土郡の朱斗叶松窯の須恵器のRb-Sr分布図を示す。この図にも後述する宇城領域を示しているが、下益城領域に比べて、Rb, Sr量ともやや少ないほうにずれていることがわかる。そして朱斗叶松窯の須恵器は両領域が重複する部分に主として分布することがわかる。

第40図(5)にはNa因子を比較してある。やや、ばらつきが大きいですが、それでも、ある程度の傾向があることがわかる。すなわち、朱斗叶松窯の須恵器に比べて、下益城郡内の須恵器にはNa量が多い傾向があることは明らかである。このようにして、一般的に、同じ地域内にいくつかの窯がある場合、そこから出土する須恵器の化学特性は窯の操業年代に関係なく類似する。これは全国どこにでも成り立つ一般的傾向である。そして、異なる地域の窯から出土する須恵器の化学特性は一般的には異なる。これらのことから、須恵器の素材粘土は遠方から運んでくるものではなく、在地産の粘土を使用したことが考えられる。遺跡出土須恵器の産地は定性的には、これらの分布図上で窯跡出土須恵器の分析領域に対応させること(重ね合わせること)によって行われる。

次に、遺跡出土須恵器の分析結果をみてみよう。第41図(1)には城南町の塚原古墳群、宇土半島基部の古墳群である塚原平1号墳、国越古墳出土須恵器のK-Ca分布図を示す。大部分のものはよくまとまって分布しており、同じ産地の製品であることを示唆している。これらの須恵器は考古学側でも宇城窯群の製品として推定しているのだから、これを包含するようにして、定性的な宇城領域を描いた。明らかに、下益城領域とはずれることがわかる。第41図(2)には塚原古墳群、塚原平1号墳、国越古墳出土須恵器のRb-Sr分布図を示す。第41図(1)と同様、大部分のものがよくまとまって分布し、同じ産地の製品であることを示唆する。そこで、大部分のものを包含するようにして宇城領域を描いた。この図でも、これらの古墳群出土須恵器の大部分は下益城群の須恵器ではないことがわかる。

次に、椿原古墳出土須恵器の分析結果について説明する。分析値は第1表にまとめてある。これら生データを使って作成したK-Ca分布図を第41図(3)に、Rb-Sr分布図を第41図(4)に示す。これらの図には比較対照領域として、下益城領域と宇城領域を描いてある。そうすると、椿原古墳出土須恵器の大部分は宇城領域に分布し、塚原古墳群や塚原平1号墳、国越古墳出土須恵器と同じ胎土をもつこと、したがって、これらの須恵器は同じ生産地の製品であることがわかる。このことは第40図(5)のNa因子にも表れている。下益城群の須恵器に比べて、朱斗叶松の須恵器にはNa量は少ないが、塚原古墳群、塚原平1号墳、国越古墳の須恵器は宇城窯群の朱斗叶松窯の須恵器によく対応していることがわかる。

以上のデータから、塚原古墳群、塚原平1号墳、国越古墳、椿原古墳の大部分の須恵器は考古学側からも宇城窯群の製品と推察されていたように、元素分析のデータからも裏付けられたことになる。

次に、上述した須恵器を埋蔵していた同じ古墳から出土した埴輪胎土の蛍光X線分析の結果について説明する。なお、熊本県内出土埴輪の蛍光X線分析は今回がはじめてである。

第42図(1)(2)には前田B遺跡から出土した埴輪のK-Ca分布図とRb-Sr分布図を示す。考古学側からは、前田B遺跡は埴輪焼成窯跡か、または近辺で製作した埴輪の集積所であると推察されている。もし、埴輪窯遺跡であれば、出土埴輪の胎土は窯跡出土須恵器の場合と同様、よくまとまって分布するはずである。第42図(1)(2)をみると、今回分析した試料はよくまとまって分布しており、同じ粘土を素材として製作された埴輪であることを示している。したがって、考古学側の推察通り、前田B遺跡は埴輪窯遺跡か、それとも、近くのどこかでまとめて製作した埴輪を一時的に集積した遺跡であることはほぼ間違いない。

また、前田B遺跡は萩尾大溜池窯、八ノ瀬戸窯、善助山窯などの下益城窯群と同じ下益城郡内にあるが、埴輪胎土は須恵器胎土とは全く別物であることはK-Ca分布図、Rb-Sr分布図を比較すればよくわかる。このことは多くの地域でみられる一般則である。須恵器工人集団と埴輪製作者集団とは別々であったことを物語る。それでは、前田B遺跡の埴輪はどこ古墳へ供給されたのであろうか。前田B遺跡と同じ下益城郡内にある前方後円墳である松橋大塚古墳、それに宇土郡内にある塚原平1号墳、国越古墳、宇土市石の瀬遺跡から出土した埴輪のK-Ca分布図とRb-Sr分布図を第42図(3)～(6)、第43図に示してある。これらの図にはいずれも、第42図(1)(2)のデータに基づいて前田B領域を描いてあり、比較対照領域とした。もし、前田B遺跡の埴輪がこれらの古墳に供給されておれば、その埴輪は両分布図で前田B領域に分布するはずである。そうすると、第42図(3)(4)からわかるように、松橋大塚古墳の埴輪は両図で前田B領域によく対応しており、これらは前田B遺跡の埴輪であることがわかった。このことも考古学側の推察と一致した。恐らく、松橋大塚古墳(前方後円墳)に埴輪を並べるために、近くの前田B遺跡で埴輪を集中的に作ったものと推察される。一般的に、埴輪の製作と供給の関係は前田B遺跡と松橋大塚古墳の間にみられる関係と類似したものなのであろう。そして、埴輪製作場所の規模が小さい場合には、ほとんどその跡は残っておらず、一般的に野焼きと通称されることになっているものと推察される。これに対して、他の古墳出土埴輪は前田B領域に対応しないことは第42図(5)(6)、第43図を比較すればよくわかる。しかも、これらの埴輪の中には同じ胎土をもつものは一つもなく、各古墳ごとに、別々に埴輪を製作していたことを示している。いわゆる野焼きの埴輪である。

上述したようなデータを集積していけば、埴輪の生産と供給についても胎土分析のデータを使って論じるときが来るであろう。また、本論文で述べたことからわかるように、胎土分析によるデータ解釈は多数の分析データを駆使して、遺跡から出土する主成分の胎土について論述する。ごく少数の、領域をずれたものに関しては論述していない。これは現段階ではこれらの個々の試料について論じるのは時期尚早と判断したからである。主成分の土器胎土について考察し、論述するだけでも、従来、全く知られていない土器の伝播・流通、言い換えれば土器の生産と供給について新しい情報を引き出すことができる。大量のデータから主成分土器のもつ情報を引き出す上には、自然科学の方法のもつ長所がいかに発揮されるのである。

表 椿原古墳出土須恵器の分析データ

No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	0.294	0.109	1.81	0.466	0.323	0.150
2	0.328	0.118	1.75	0.458	0.346	0.156
3	0.322	0.112	1.79	0.471	0.333	0.154
4	0.305	0.139	2.10	0.440	0.346	0.195
5	0.292	0.103	2.78	0.397	0.330	0.175
6	0.283	0.130	2.20	0.387	0.316	0.208
7	0.336	0.116	1.76	0.478	0.336	0.146
8	0.304	0.120	1.75	0.471	0.344	0.165
9	0.370	0.123	1.73	0.504	0.364	0.144
10	0.353	0.127	1.72	0.507	0.370	0.166
11	0.281	0.126	2.16	0.400	0.330	0.197
12	0.273	0.118	2.18	0.392	0.317	0.196
13	0.313	0.115	2.67	0.414	0.343	0.218
14	0.300	0.124	1.78	0.467	0.355	0.148
15	0.246	0.229	2.39	0.329	0.558	0.227
16	0.282	0.084	2.27	0.367	0.284	0.094
17	0.255	0.077	2.28	0.367	0.242	0.125
18	0.291	0.105	2.13	0.389	0.278	0.156
19	0.249	0.109	2.43	0.355	0.302	0.142
20	0.283	0.103	2.40	0.366	0.295	0.141
21	0.252	0.111	2.21	0.374	0.277	0.139
22	0.257	0.111	2.10	0.378	0.272	0.152
23	0.289	0.139	2.25	0.404	0.331	0.169
24	0.300	0.108	2.36	0.429	0.286	0.169
25	0.327	0.153	2.59	0.472	0.327	0.118
26	0.467	0.222	2.55	0.566	0.428	0.329
27	0.308	0.140	2.46	0.362	0.388	0.213
28	0.366	0.235	3.70	0.384	0.485	0.236
29	0.335	0.092	3.05	0.432	0.319	0.149
30	0.284	0.130	2.11	0.413	0.314	0.158
31	0.282	0.125	2.45	0.382	0.295	0.194
32	0.265	0.130	2.18	0.357	0.291	0.149
33	0.446	0.297	3.22	0.504	0.517	0.373
34	0.469	0.291	3.18	0.517	0.522	0.398

35	0.389	0.131	2.19	0.515	0.307	0.200
36	0.206	0.078	2.41	0.286	0.198	0.113
37	0.333	0.102	2.77	0.389	0.323	0.163
38	0.330	0.099	2.10	0.450	0.285	0.150
39	0.345	0.127	2.56	0.459	0.375	0.214
40	0.404	0.116	1.78	0.536	0.299	0.201
41	0.264	0.098	1.83	0.366	0.293	0.178
42	0.242	0.089	2.02	0.338	0.268	0.143
43	0.307	0.121	2.04	0.444	0.333	0.166
44	0.319	0.161	2.46	0.420	0.363	0.242
45	0.250	0.101	2.44	0.333	0.244	0.120
46	0.252	0.093	1.68	0.399	0.279	0.156
47	0.291	0.208	2.55	0.387	0.482	0.210
48	0.308	0.243	2.52	0.341	0.518	0.148
49	0.311	0.128	2.01	0.447	0.296	0.162
50	0.294	0.126	2.10	0.429	0.316	0.184
51	0.414	0.167	2.49	0.511	0.415	0.321
52	0.356	0.133	2.07	0.501	0.343	0.181
53	0.439	0.247	2.28	0.537	0.546	0.262

表 塚原平古墳 埴輪

No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
111	0.346	0.228	2.32	0.565	0.389	0.207
112	0.398	0.230	2.35	0.540	0.374	0.260
113	0.348	0.207	2.44	0.434	0.351	0.231
115	0.394	0.254	2.44	0.505	0.391	0.267
116	0.396	0.220	2.36	0.479	0.350	0.301
118	0.367	0.204	2.48	0.424	0.342	0.232
119	0.404	0.248	2.69	0.409	0.343	0.230
120	0.438	0.253	2.44	0.522	0.418	0.307
121	0.385	0.220	2.48	0.474	0.365	0.262
123	0.397	0.206	2.40	0.487	0.361	0.266

第2表 胎土分析データ表(1)

表 国越古墳 埴輪

No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	0.235	0.117	1.56	0.340	0.331	0.176
2	0.248	0.121	1.57	0.253	0.333	0.159
3	0.258	0.112	1.24	0.304	0.319	0.187
4	0.261	0.124	1.32	0.386	0.340	0.177
5	0.333	0.102	1.42	0.336	0.287	0.144
6	0.197	0.131	3.34	0.213	0.295	0.180
7	0.272	0.135	1.47	0.415	0.333	0.187

表 松橋大塚古墳 埴輪

No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	0.359	0.187	2.79	0.347	0.548	0.248
2	0.333	0.230	3.17	0.318	0.535	0.166
3	0.321	0.268	2.86	0.360	0.621	0.237
4	0.339	0.165	3.29	0.347	0.468	0.152
5	0.337	0.173	2.89	0.337	0.554	0.179
6	0.358	0.190	2.44	0.390	0.450	0.212
8	0.327	0.266	2.87	0.376	0.628	0.233
11	0.329	0.284	2.78	0.464	0.713	0.254

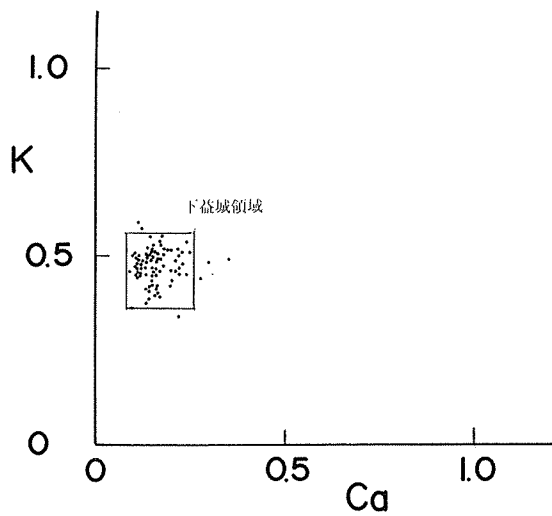
表 石の瀬遺跡 埴輪

No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	0.550	0.348	2.87	0.509	0.464	0.063
2	0.546	0.286	3.18	0.520	0.338	0.067
4	0.433	0.324	3.00	0.381	0.460	0.063
5	0.672	0.231	3.02	0.568	0.398	0.109
6	0.686	0.272	2.88	0.610	0.455	0.108
7	0.376	0.293	3.16	0.351	0.390	0.066
8	0.562	0.208	2.36	0.465	0.399	0.092
9	0.531	0.229	2.96	0.527	0.326	0.063
10	0.442	0.294	3.08	0.418	0.445	0.065
11	0.454	0.298	3.40	0.434	0.308	0.067
12	0.448	0.190	2.54	0.451	0.420	0.064
13	0.387	0.255	2.70	0.328	0.512	0.061
14	0.469	0.264	3.15	0.453	0.317	0.071

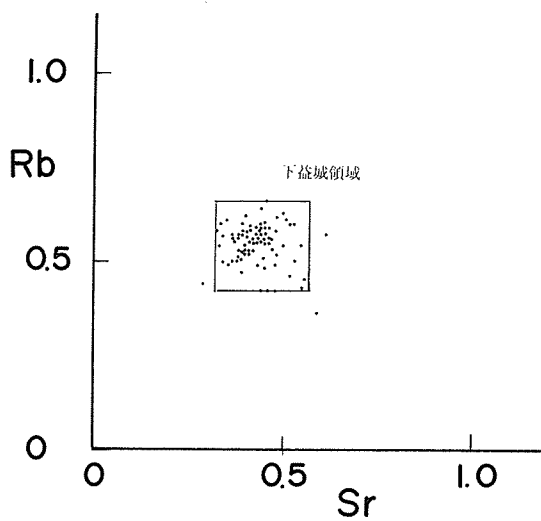
表 前田B遺跡 埴輪

No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	0.326	0.280	2.90	0.365	0.527	0.225
2	0.363	0.173	2.87	0.357	0.513	0.295
3	0.319	0.275	2.98	0.251	0.590	0.210
4	0.319	0.182	2.73	0.286	0.671	0.273
5	0.353	0.216	2.76	0.332	0.552	0.260
6	0.325	0.226	2.72	0.296	0.640	0.286
7	0.359	0.227	2.79	0.348	0.521	0.271
8	0.263	0.227	3.11	0.215	0.526	0.221
9	0.272	0.195	3.11	0.247	0.529	0.225
10	0.325	0.190	2.71	0.300	0.662	0.274
11	0.345	0.224	2.69	0.353	0.567	0.266
12	0.319	0.194	2.68	0.301	0.600	0.278
13	0.298	0.199	3.09	0.250	0.545	0.244
14	0.353	0.205	2.63	0.363	0.607	0.313
15	0.339	0.179	2.74	0.346	0.560	0.282
16	0.332	0.168	2.80	0.331	0.542	0.278
17	0.312	0.216	2.76	0.299	0.613	0.276
18	0.370	0.171	2.69	0.372	0.587	0.305
19	0.347	0.173	2.64	0.363	0.499	0.298
20	0.333	0.198	2.62	0.319	0.601	0.291
21	0.354	0.174	2.95	0.346	0.498	0.295
22	0.342	0.182	2.63	0.352	0.535	0.287
23	0.323	0.204	2.63	0.315	0.607	0.295
24	0.393	0.200	2.74	0.453	0.353	0.274
25	0.317	0.335	2.91	0.375	0.547	0.262
26	0.346	0.205	2.87	0.303	0.564	0.296

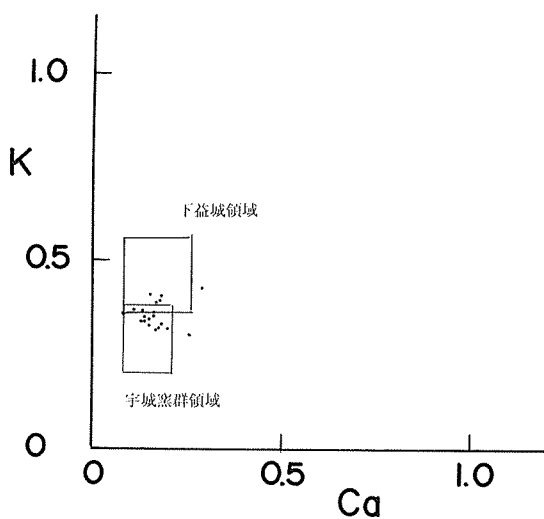
第3表 胎土分析データ表(2)



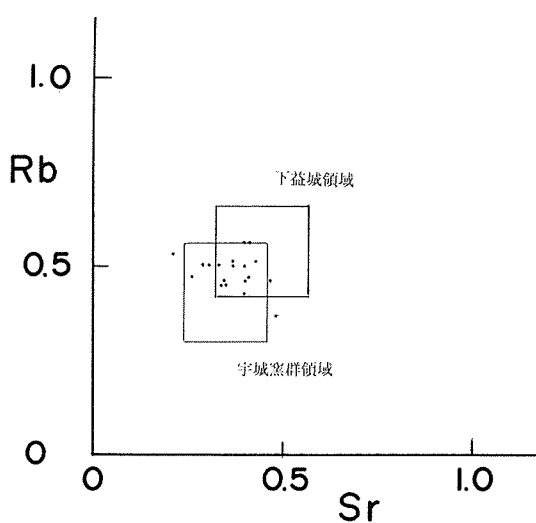
(1)下益城郡の窯跡群出土須恵器の K-Ca 分布図



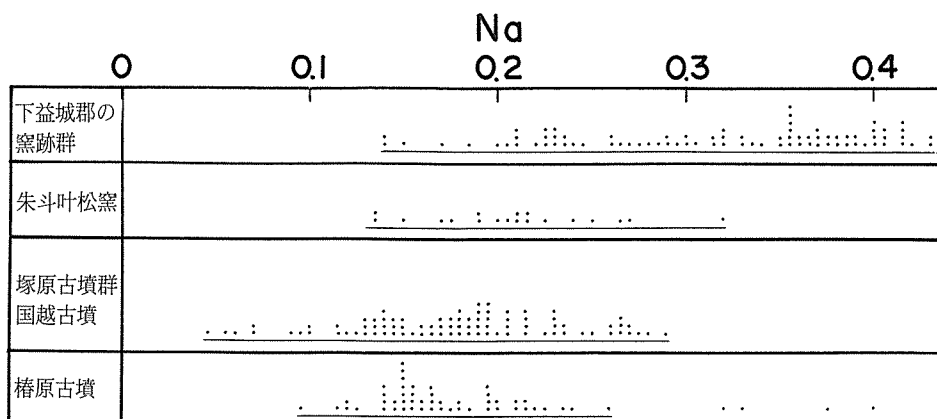
(2)下益城郡の窯跡群出土須恵器の Rb-Sr 分布図



(3)朱斗叶松窯跡出土須恵器の K-Ca 分布図

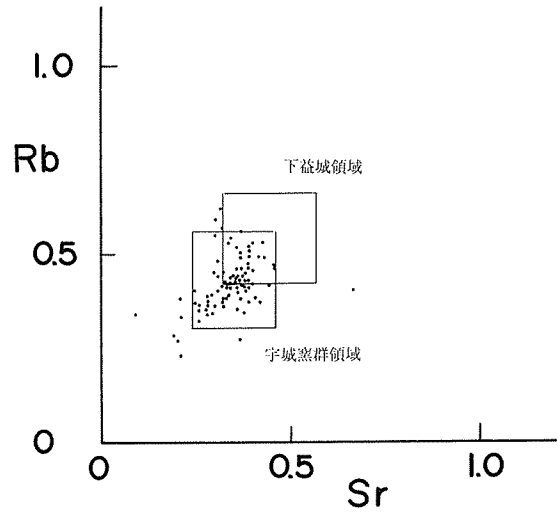
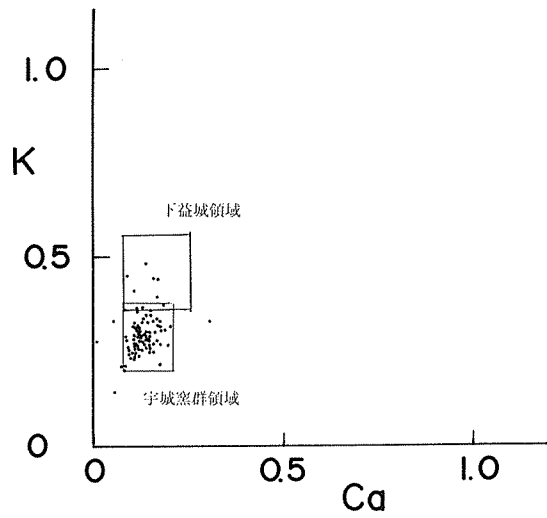


(4)朱斗叶松窯跡出土須恵器の Rb-Sr 分布図

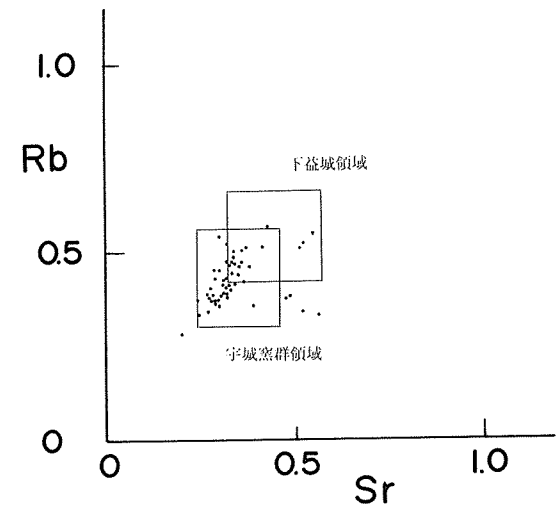
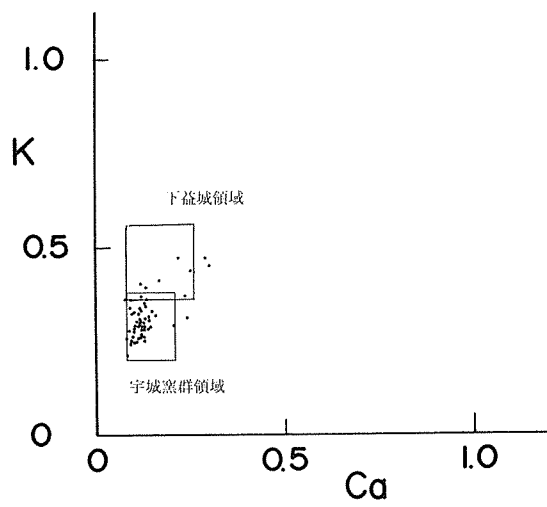


(5)Na 因子分布図

第40図 窯跡出土須恵器蛍光 X 線分析



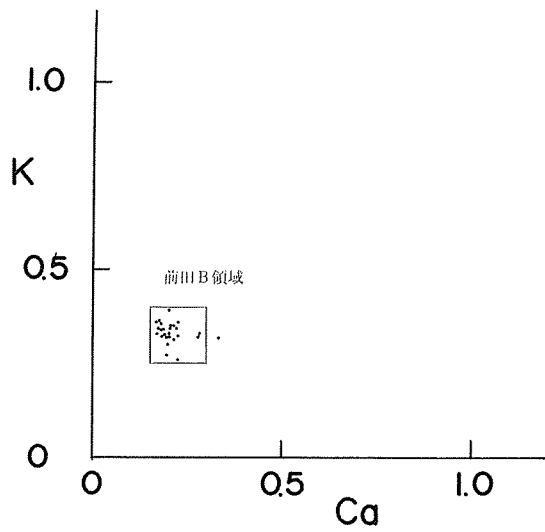
(1)塚原古墳群・国越古墳出土須恵器の K-Ca 分布図 (2)塚原古墳群・国越古墳出土須恵器の Rb-Sr 分布図



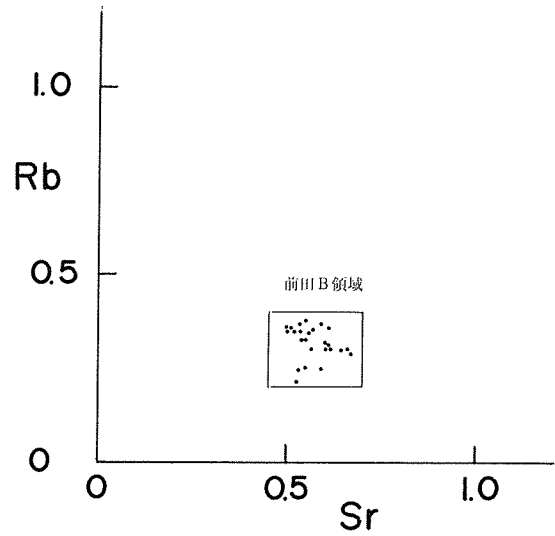
(3)椿原古墳出土須恵器の K-Ca 分布図

(4)椿原古墳出土須恵器の Rb-Sr 分布図

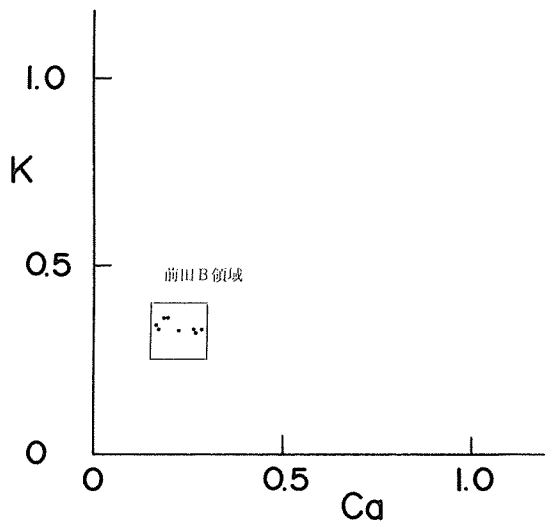
第41図 古墳出土須恵器蛍光X線分析



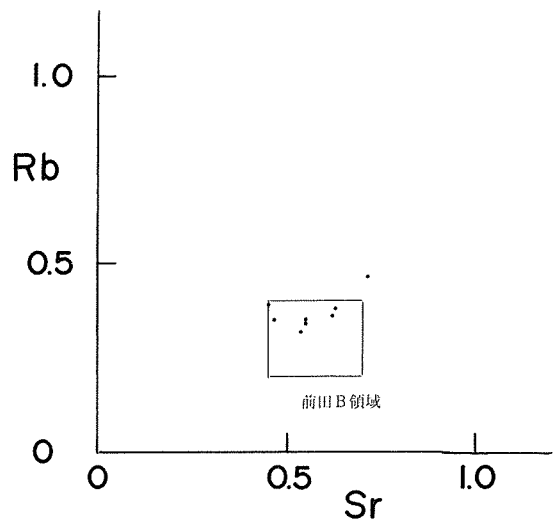
(1)前田B遺跡出土埴輪の K-Ca 分布図



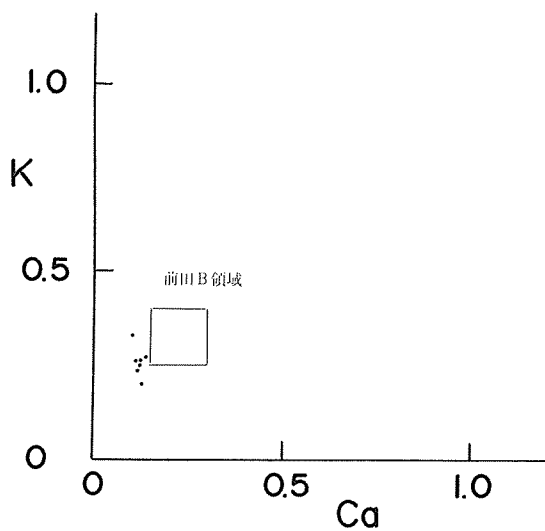
(2)前田B遺跡出土埴輪の Rb-Sr 分布図



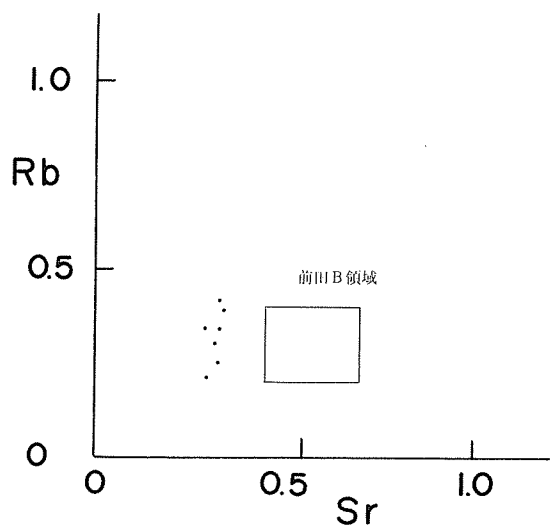
(3)松橋大塚古墳出土埴輪の K-Ca 分布図



(4)松橋大塚古墳出土埴輪の Rb-Sr 分布図

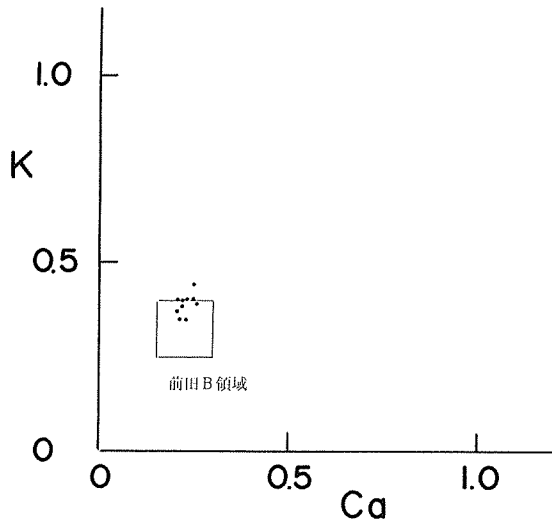


(5)国越古墳出土埴輪の K-Ca 分布図

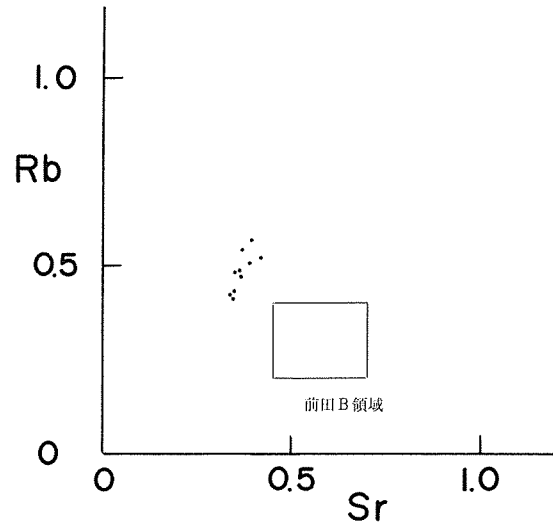


(6)国越古墳出土埴輪の Rb-Sr 分布図

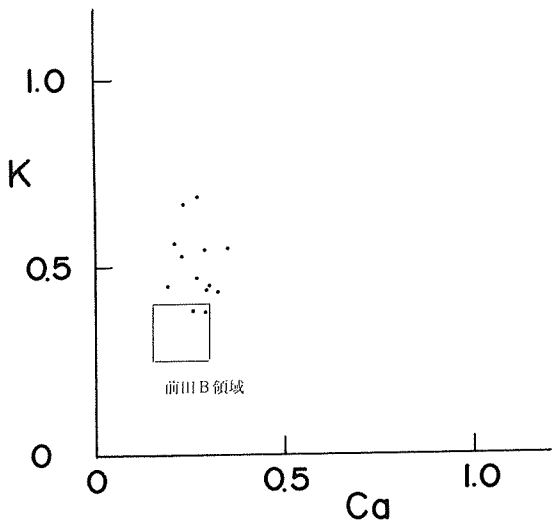
第42図 出土埴輪蛍光X線分析(1)



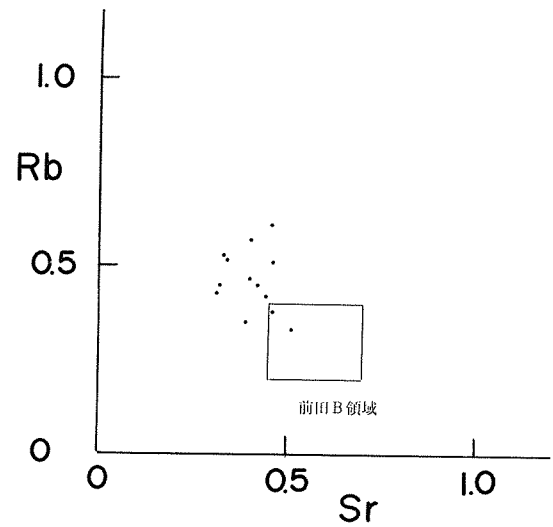
(1)塚原平古墳出土埴輪の K-Ca 分布図



(2)塚原平古墳出土埴輪の Rb-Sr 分布図



(3)石の瀬遺跡出土埴輪の K-Ca 分布図



(4)石の瀬遺跡出土埴輪の Rb-Sr 分布図

第43図 出土埴輪蛍光X線分析 (2)



- 1：萩尾大溜池窯跡 2：八ノ瀬戸窯跡 3：善助山窯跡 4：朱斗叶松窯跡
 5：塚原古墳群 6：塚原平古墳 7：国越古墳 8：前田B遺跡 9：松橋大塚古墳
 10：石の瀬遺跡 11：椿原古墳

第44図 関連遺跡分布図

2 宇土半島基部における後期古墳の変遷

高木恭二

はじめに

熊本平野と八代平野の間に位置する宇土半島基部には、数多くの古墳が知られている。特に前期とみられる前方後円墳7基の存在は、九州でもかなり早い段階に属するものであることが知られ、日本列島の西南地域にあるがゆえに、古墳の広がりを考えるうえで重要なものとなっている。これら宇土半島の古墳文化については、すでに富樫卯三郎氏による先駆的研究⁽¹⁾があり、これを端緒としていくつかの編年案や地域区分がなされている⁽²⁾。

今回、椿原古墳の調査をきっかけとして、この地域の古墳の終焉の問題を考える必要性が生じてきたが、改めて研究を振り返ってみても、宇土半島基部における古墳時代後期から終末期に限っての編年や地域のとらえ方の問題などについての研究は、ほとんどなされてこなかったといえよう。

このことはまた、前方後円墳がどのような形で、いつ終わるのかという問題をも当然含むことになるが、近年の調査事例の増加や、研究の進展によって明らかになりつつあるので、それらを考慮しながら後期古墳の編年⁽³⁾を行なうことにする。

なお、編年の基準となる尺度は須恵器を用いることになるが、熊本県下における須恵器生産の様相や消費地との関連については、近年になってやっと研究の端緒⁽⁴⁾がなされた程度であり、まだ編年が確立しているというわけではない。後期段階において地方窯が成立し、その製品が流通していることは明らかであるが、いまだ地域の実態に即した須恵器編年を提示できる段階ではないし、それだからといって北部九州の編年をそのまま適用できるかどうかについても意見の一致をみているわけではない。ここでは暫定措置として、北部九州編年と近畿地方の陶邑編年⁽⁵⁾に依拠せざるをえない。

1. 地域区分

宇土半島基部において前期前方後円墳が7基築かれているにもかかわらず、これに続く中期に属する前方後円墳はほとんどなく断絶があり、後期にいたってふたたび前方後円墳が築かれるという状況である。つまり4世紀末ないしは5世紀はじめころを境にして、それ以後はほとんど古墳が築かれなくなり、5世紀後半ないし末になってふたたび盛んに古墳が造営されるのである。

その意味では、前期・後期古墳の造営者との関係がどのようなものであったのか、あるいはまた中期段階での大きな断絶をどのように解釈するのかということも重要な問題で、興味のもたれるところであるが、それらの関連性について今回は触れない。

さて、宇土半島基部における古墳の築造が、5世紀末前後に再び隆盛をむかえるようになるということを述べたが、本稿ではそれから以降、7世紀中ごろまでに築造された古墳について概観することになる。第45図は半島基部における後期古墳の分布を示したもので、これをみればわかるように、四つのまとまりをなしながら分布するということがわかる。この4群をそれぞれ(1)轟・緑川群(2)不知火西群(3)不知火東群(4)花園・松橋群の地域名称で呼ぶことにする。

2. 各地域の古墳

(1) 轟・緑川群

椿原古墳を含む一群であり、後期に該当するとみられる前方後円墳は知られていない。ただ、

宇土半島基部の後期古墳

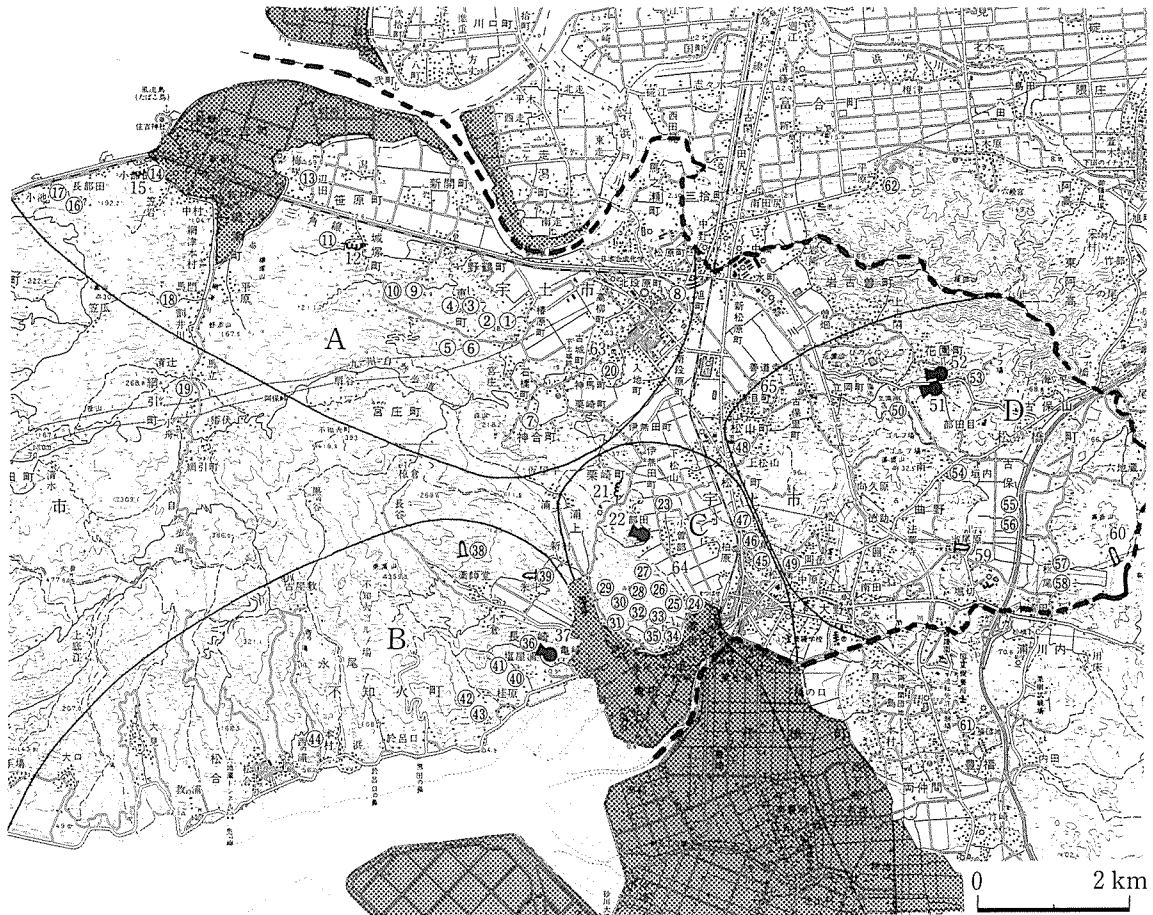
	(1)瀧・緑川群	(2)不知火西群	(3)不知火東群	(4)花園・松橋群
前方後円墳		国越古墳	仁王塚古墳	男塚古墳 女塚古墳
前方後円墳 消滅後の有 力古墳	椿原古墳		御領東原 3 号墳 鬼塚古墳	鬼ノ岩屋古墳
有埴輪古墳	石ノ瀬 (古墳?)	道免古墳 国越古墳	塚原平古墳	山下古墳
装飾古墳	椿原古墳 仮又古墳 梅崎古墳	国越古墳 桂原古墳 桂原 2 号墳	塚原 1 号墳	
有石棚石室		立山鬼の岩屋古墳 桂原古墳		
ピンク石割 抜玄門使用 古墳	椿原古墳 ?梅崎古墳 ?城塚古墳 御殿山古墳		塚原 1 号墳 塚原 7 号墳 御領東原 3 号墳	
灰黒色石割 抜玄門使用 古墳		桂原古墳		
灰白色石使 用古墳				宇賀岳古墳 当尾夫婦塚 4 号
須恵器窯跡		元米ノ山窯跡 朱斗叶松窯跡		当尾窯跡 萩尾大溜池窯跡
拠点集落	宇土城城山遺跡	不明	小曾部南請遺跡 北園遺跡	境目遺跡

半島基部の低位に位置する現在の宇土市街の一面にあたる石の瀬遺跡から円筒埴輪が少なからず発見されており、この場所は古墳であったとみてよかろう。海拔標高は約 5 m あり、旧緑川の氾濫にともなう微高地上にあたるが、墳形や墳丘規模、それに内部主体などは、近世はじめ頃の出城や江戸時代の武家屋敷による破壊によって明らかではない。前方後円墳ないし大型の円墳であった可能性もある。

椿原古墳の西、金嶽山の西斜面部には金嶽山古墳があり、横穴式石室が露出する。同じく椿原から約 450 m 西にある東畑古墳 (飯塚天神古墳) も石室が露出しており、その概要を知ることができ、地ならしによって削平された墳丘の一部から周溝が検出され、須恵器が発見されている。仮又古墳は、京都大学による装飾古墳調査によって船の線刻があるということが著名であり、数艘の船が船団を組んでいるかのようなさまによって、古墳時代当時の海上交通の盛んな様子を知る好材料となっている。墳丘に外護列石をめぐるし、若干の須恵器が見つかっており、石室は現状では無袖のように見える⁽⁶⁾。他には山王平古墳・古城古墳石材・東畑 2 号墳・神ノ木山古墳・城塚古墳などがあり、その西になると梅崎古墳・御殿山古墳・小池平古墳などが有明海にむかって派生する丘陵の先端部に 1～2 基が点在し、その大半は横穴式石室である⁽⁷⁾。このうち、割抜玄門をもつものとしては、椿原古墳・御殿山古墳があり、城塚古墳・梅崎古墳もその可能性が極めて高い。

墳丘の大きなものはなく、全体としての墳丘規模は小さい。後期において大古墳が築かれた地域ではないが、古墳は連綿と築かれている。なお、この地域の西限として小池平古墳までを挙げたが、これより西部地域にある古墳は全て中期に属するものばかりであり本論から、はずれることになるので除外する。

拠点集落遺跡としては宇土城跡城山遺跡が該当する。



宇土半島基部古墳・遺跡一覧

1. 椿原古墳
2. 金獄山古墳
3. 東畑古墳
4. 東畑2号墳
5. 仮又古墳
6. 仮又2号墳
7. 山王平古墳
8. 石の瀬遺跡
9. 神ノ木山古墳
10. 神ノ木山2号墳
11. 城塚古墳
12. 尾ノ山横穴墓群
13. 梅崎古墳
14. 御殿山古墳
15. 小部田横穴墓群
16. 小池平古墳
17. 小池平2号墳
18. 馬門石切場跡
19. 網引石切場跡
20. 宇土城古墳参考他
21. 大平横穴墓

22. 仁王塚古墳
23. 鬼塚古墳
24. 塚原平古墳
25. 塚原平2号墳
26. 柳迫古墳
27. 大迫1号墳
28. 大迫2号墳
29. 塚原1号墳
30. 塚原2号墳
31. 塚原5号墳
32. 塚原6号墳
33. 塚原7号墳
34. 神の元1号墳
35. 神の元2号墳
36. 道免古墳
37. 国越古墳
38. 元米の山窯跡
39. 朱斗叶松窯跡
40. 塩屋浦鬼の岩屋1号墳
41. 塩屋浦鬼の岩屋2号墳
42. 桂原古墳
43. 桂原2号墳

44. 立山鬼の岩屋古墳
45. 御領1号墳
46. 御領2号墳
47. 御領3号墳
48. 桶底古墳
49. 宇賀岳古墳
50. 山下古墳
51. 女夫塚古墳(男塚古墳)
52. 女夫塚古墳(女塚古墳)
53. 三日鬼ノ岩屋古墳
54. 池尾古墳
55. 大道夫婦塚古墳(男)
56. 大道夫婦塚古墳(女)
57. 山口1号墳
58. 山口2号墳
59. 当尾小学校窯跡
60. 萩尾大溜池窯跡
61. 豊福古墳
62. 神の上古墳
63. 宇土城遺跡
64. 小曾部南講遺跡
65. 境目遺跡

----- 旧郡境 (推定)
 ■ 近世以降の干拓

第45図 宇土半島基部後期古墳・遺跡分布図

(国土地理院発行の熊本・八代 1 : 50,000を縮小して使用)

(2) 不知火西群

全長約65mの前方後円墳である国越古墳は、切り石造り横穴式石室に退化した直弧文を主体とした装飾文様が描かれ、豊富な遺物が石室内部から発見された。墳丘からは円筒埴輪だけではなく人物をはじめとする数多くの形象埴輪も出土し、近くに位置する道免古墳からも円筒埴輪が出ている。塩屋浦鬼の岩屋1号墳・同2号墳も横穴式石室のようであるが、詳細は不明で、桂原古墳は線刻による船の装飾をもつということでよく知られている。桂原2号墳の線刻船には波濤文が表現されており、立山鬼の岩屋古墳も横穴式石室が開口し、桂原古墳と同様に石棚をもつ。

この西群の一面には、古墳時代における窯業生産を物語る朱斗叶松窯跡⁶⁸及び元米ノ山窯跡があり、後述の松橋窯跡群と並んで早い段階での須恵器生産の一拠点として注目される。集落遺跡は現在までのところ知られていない。

(3) 不知火東群

全長47mの前方後円墳である仁王塚古墳、それに鬼塚古墳や塚原平古墳などの一群と、宇土市松山の高城から南へ延びる丘陵上に点在する古墳の一群がある。

前者には、仁王塚古墳・鬼塚古墳のほか、塚原丘陵の塚原1号墳～7号墳・大迫北古墳・大迫南古墳・神の元1号墳・神の元2号墳・塚原平古墳・塚原平2号墳・大平横穴墓、その他にも消滅した古墳がかなりあったといわれる。仁王塚古墳は空壕をもつ前方後円墳であるものの埴輪は伴わないようであるが、塚原平古墳は直径14mの円墳ながら円筒埴輪をめぐらす。また、鬼塚古墳は直径40mの大型の円墳であり、巨石を用いた横穴式石室が露出する。この古墳はその他の小円墳とは一線を画する。なお、塚原1号墳にも線刻船があり、塚原2・7号墳は阿蘇ピンク石（馬門石）製の刳抜玄門をもつ。

後者の一群には、御領東原1・2・3号墳、柏原古墳などがあり、さほど数は多くない。いずれも埴輪をもたず円墳であろうとみられるが、詳細は不明である。この中では御領東原3号墳が、最も墳丘の規模も大きい。なお、この古墳にも阿蘇ピンク石の刳抜玄門が用いられていたものとみられる。

不知火東群の集落としては、小曾部南請遺跡・北園遺跡がある。

(4) 花園・松橋群

後期においては花園に一大拠点を形成しているかのようであるが、それ以前の中期にはこれらよりやや西によった松山から立岡にかけての地域に点在しており、全体の傾向としては奥津城を徐々に東に移しているとみてよい。

前方後円墳としては女夫塚古墳の男塚、同じく女塚古墳が共に前方後円墳で、円墳に埴輪をもつ山下古墳、それに巨石を用いた三日鬼の岩屋古墳などで一群が形成される。

花園群の西にあたる松橋町古保山付近にも数基の古墳が知られており、六世紀前半から中頃にあたる時期の妻入横口式石棺を内蔵するらしい古墳であることが判明している。なおこれらの古墳に使われている石材は、阿蘇石の中でも灰白色を帯びる石で、これは、松橋町宇賀岳古墳においても同様である。この灰白色の石材が花園・松橋群にだけしか用いられた形跡がなく、逆にピンク石のものは轟・緑川群と不知火東群のいずれかにしか用いられないという明確な使い分けがあり、灰白色石石工とピンク石石工を掌握していた集団に違いがあったということ⁶⁹はまず間違いなからう。

花園群の集落としては宇土市境目遺跡がある。

3. 古墳の時期と須恵器生産

轟・緑川群の、石の瀬遺跡出土の埴輪は、川西宏幸氏による円筒埴輪編年⁽¹⁰⁾のⅣ期に該当する。宇土半島基部における害窯焼成の埴輪でⅣ期に属するとみられる埴輪は、他には不知火群の道免古墳の例があるだけで、石の瀬遺跡の場合は、おそらく大型の円墳か前方後円墳であったろう。

東畑古墳の須恵器は、小田富士雄氏による須恵器編年のⅢB期～ⅣA期で、中村浩氏編年によるⅡ-3、4型式（以下中村編年を括弧書きで併記）の6世紀後半から末。仮又古墳の場合はⅤ期（Ⅲ-1型式）の7世紀中ごろとみられる。椿原古墳も数多くの須恵器が発見され、ⅣA期からⅣB期（Ⅱ-5型式）の7世紀前半ころとみられる。

不知火西群の道免古墳埴輪がⅣ期で、国越古墳はⅤ期。国越古墳墳丘からはⅢA期（Ⅱ-2型式）の6世紀中ごろに属する須恵器が出土している。

刳抜玄門で、船の線刻が表現される桂原古墳からは遺物の出土がなく所属時期を明らかにし得ないが、玄門はL字形2石をあわせた刳抜玄門で、2重玄門という点から熊本市天福寺裏山2・3号墳との共通性をうかがわせる。

朱斗叶松窯跡から出土した須恵器は、ⅣA期からⅣB期（Ⅱ-5型式）の7世紀前半ころとみられる。元米ノ山窯跡のものは、それよりややさかのぼるⅢB期～ⅣA期（Ⅱ-3、4型式）で、6世紀後半に比定できよう。

不知火東群の仁王塚古墳は、埴輪を伴わない段階の前方後円墳であるとみられ、逆に塚原平古墳は円墳に円筒埴輪をめぐらす。塚原平から出土した須恵器は、ⅢB期でも古い段階（Ⅱ-3型式）の6世紀中ごろから後半にかけての時期とみられ、仁王塚古墳は6世紀後半から末のころ。その他の鬼塚古墳・塚原1・2・7号墳などは、時期の決め手となる遺物が出ていないことから詳細は不明ながら、6世紀末から7世紀前半の所産とみられる。仁王塚古墳に続いて有力な古墳としては鬼塚古墳が挙げられよう。

花園群において、5世紀末から6世紀前半の所産とみられる古墳は未見であるが、Ⅴ期の埴輪をもつ山下古墳が6世紀中ごろから後半にかけて、埴輪を使用しない前方後円墳である男塚古墳と女塚古墳は6世紀後半とみられ、その後には三日鬼の岩屋古墳が続くものとみられる。また、宇賀岳古墳の特色ある横穴式石室が、山陰の石棺式石室の祖形⁽¹¹⁾と見られており、6世紀中ごろから後半にかけての時期が考えられる。

須恵器生産についても簡記しておく必要がある。それは、熊本県下における須恵器生産のはじまりが、これまでのところ宇土半島基部付近が最も古いらしい⁽¹²⁾という事情があるからである。これは本報告においても収録されているように、近年、三辻利一氏や中原幹彦氏等によって精力的に進められている須恵器の胎土分析と考古学的分析によっても裏付けされ、さらに生産と消費地の関係についても明らかになりつつあるからである。

ところで、旧宇土郡に属する地域には、これまでのところ4箇所において須恵器窯跡が発見されている。宇土郡不知火町の元米ノ山窯跡と朱斗叶松窯跡でこれらは約1kmしか離れておらず両窯を不知火群と呼び、下益城郡松橋町当尾小学校窯跡や萩尾大溜池窯跡の松橋群とをあわせ、旧宇土郡には2群あるということになる。不知火群の元米ノ山窯からは小田編年ⅢB期（Ⅱ-3）、萩尾大溜池窯跡からは小田編年Ⅱ期（Ⅰ末-Ⅱ初）、当尾小学校窯跡からは小田編年ⅣA期（Ⅱ-4）の須恵器が出土しており、さらに古くなる可能性があるともいわれる。こ

これらのことは、地方窯成立に宇土半島基部の勢力が積極的に関与したということを示しており、今後の研究成果に寄せる期待は大きい。

4. 石室構造の変化

宇土半島基部における後期から終末期にかけての古墳で、内部構造の判明しているものは全て横穴式石室である。しかし各古墳はそれぞれ特色ある石室を持っており、地域によって石室の基本構造は共通している場合や若干の違いがあるなど、多様である。

椿原古墳の横穴式石室は、羨道部と玄門部がほぼ完存しているものの、玄室奥壁や右壁、それに天井部などを欠失しており全容を知ることはできない。とはいえ残された部分によって概要を知ることができるので、他の古墳と石室構造を比較することにしたい。

玄室左壁は高さ約120cmの腰石があり、その上には3～4石が天井部にかけてやや持ち送りぎみにドーム状に積まれる。奥壁も腰石ないしは鏡石状に基底石が据わるようであり、右壁も同様であったと考えられる。

宇土半島基部の横穴式石室において、玄室壁面の基底に腰石を用いるものは多く見られるが、この腰石を使う古墳としては、凝灰岩の切石を用いるものと、安山岩などの自然石を用いるものの2種がある。前者は国越古墳に代表されるもので、後者は塚原平古墳や桂原・椿原古墳その他相当数にのぼる。

前節の古墳時期から見れば、国越古墳が6世紀中ごろで、塚原平古墳がそれにやや遅れる6世紀中ごろから後半にかけての頃に造られたということは、出土遺物からも明白である。しかし、国越古墳の腰石の高さが約110cmあるのに、塚原平古墳の場合は約60cmと高さの点だけからは逆転しており、必ずしも腰石の高さだけでは時期区分の根拠とはならない。しかし、国越古墳は前方後円墳で石室全体において凝灰岩切石を多用しており、石障系横穴式石室の系譜をひくものであるということが判明しているので、円墳に安山岩や砂岩を混用する塚原平古墳その他の場合とは異なる。

後期・終末期古墳において刳抜玄門に凝灰岩切石を用いる例がこの地域に多いことは幾度となく述べたが、その場合、凝灰岩切石は玄門部ないしは閉塞石にだけ限定的に用いられる。前方後円墳の国越古墳では石室各所において切石が多用されており、他には女塚古墳の男塚古墳と女塚古墳も同じであったようであるが、残念ながら両古墳が早い段階に破壊され、石室の調査も実施されていないことなどから詳細はわからない。

ただいえることは、宇土半島基部では凝灰岩切石を横穴式石室に多用するのは前方後円墳に限られるらしいという点と、円墳や方墳などにおいて凝灰岩は刳抜玄門だけに限定的に用いられるという点である。

切石を多用しない横穴式石室において、腰石がみられるのはこの地域では塚原平古墳が最初であり、これに続くのは東畑古墳や桂原古墳などである。刳抜玄門は、塚原平古墳ではみられず、東畑古墳は、刳抜玄門ではないものの阿蘇灰石の切石を使用しており、これに続くとみられる桂原古墳ではL字形の2石を用いた刳抜玄門となっている。先に挙げた4地域のうち、刳抜玄門をもつ古墳は轟・緑川群と不知火西群、それに不知火東群だけで、そのうち阿蘇ピンク石を用いているのは轟・緑川群と不知火東群である。刳抜玄門ではなくても、阿蘇ピンク石を使った古墳は、不知火西群と花園群ではみられないという明確な違いがある。

塚原平古墳の腰石は玄室全体の高さからみれば低いですが、東畑古墳や桂原古墳では腰石が側壁のかなりの部分をしめており、塚原平との差は歴然としている。出土遺物からは、塚原平古墳

の後に東畑古墳が築造されたことは間違いないであろうから、腰石使用の点では6世紀後半段階での大きな飛躍がある。また、刳抜玄門は、塚原平古墳、東畑古墳段階では未採用で、これに続く桂原古墳・椿原古墳の頃に刳抜玄門は用いられるようになったものと考えられる。

現段階で判明している刳抜玄門をもつ古墳のうち、最も古いものは大野窟古墳とみられ、その近くの岩立C古墳など、氷川下流域付近で6世紀中ごろから後半の頃に考案されて、宇土半島において6世紀後半に採用されるようになったのであろう。氷川下流域付近のものは全て窓状に刳り抜くものであるが、宇土半島のもものは窓状に刳り抜くものと、L字形やコ字形の2石を組み合わせるものの3種がある。桂原古墳がL字形であり、椿原古墳がコ字形であるところからみて、窓状→L字形→コ字形と変化していったものとみられるが、宇土半島基部での刳抜玄門をもつ古墳の調査例が少ないため、この点は今後の課題としておきたい。また、熊本市天福寺2・3号墳では窓状刳抜ながら桂原古墳と同じく2重玄門となっており、3古墳は何らかの関連性がうかがわれ、石室の型式変化からは天福寺3号墳、同2号墳、桂原古墳の順に推移した可能性がある。

なお、旧稿⁽¹³⁾において筆者は八代平野氷川下流域の最後の前方後円墳を端ノ城古墳とみたが、今回改めてこれに続くこの地域最後の前方後円墳として刳抜玄門をもつ大野窟古墳を位置付けておきたい⁽¹⁴⁾。全国の横穴式石室において天井高が最も高いとみてよいこの古墳は、その異常なまでの石室の高さを覆うために後円部の墳丘を高くせざるをえなかったため、前方部との較差があまりにも大きくなったものとみられる。

6世紀後半段階での著名な前方後円墳である見瀬丸山古墳も似たような墳形であり、このような例は全国的にも多い。地域は異なるが、6世紀段階に入って大きな古墳が築かれる長崎県壱岐島の多くの前方後円墳において同様な例を数多く実見し、その感をいっそう大きくしたが、横穴式石室羨道部は平天井で、大野窟古墳と似た構造であり、その共通点は偶然とは思えない。

おわりに

宇土半島基部の4地域の古墳の動向について簡単に見てきた。それぞれの地域によって古墳の絶対数の違いや、前方後円墳の有無、墳丘規模の違い、それに埴輪の使用、装飾の有無と文様の違い、内部主体の違いなどの点に特色を見いだすことは可能であるように見られ、須恵器窯跡や拠点的な集落遺跡を含め、別表のように整理できる。

轟・緑川群の西では小池付近にまで後期古墳は造られているが、これより西側に後期に属するものがないということは前に述べた。このことは、宇土郡四郷の中心地を比定する場合に、これまで有力であった「大宅郷」を網田にあてるという地名や文献からの推測についてやや疑問をなげかける結果となるであろう。

このことは、既に甲元眞之氏によっても明らかにされている⁽¹⁵⁾のであるが、今回のように後期から終末期にかけての律令期に近い時期の古墳編年から導きだされた結果からみて、宇土郡の四郷の中心地は、いずれも宇土半島基部であった可能性が高いのである。

なお、旧宇土郡の東部地域では現在下益城郡松橋町のかなりの部分（古保山・曲野・大野・松橋・萩尾・浦河内）が、もとは宇土郡であったということは、中世阿蘇家の甲佐社領文書案によって明らか⁽¹⁶⁾であり、須恵器窯跡がこの地域と不知火西群の2地域にあったということも重要である。

なお、この地域では群集墳を形成しないし、横穴墓の数も極めて少ないということも忘れてはならない現象であり、その意味についても改めて別の角度から考えてみる必要がある。

謝辞) 稿を草するにあたり、以下の方々をはじめとして多くの方々のご教示をいただいた。銘記して謝意を表したい。

飯田考俊、角田徳幸、木下洋介、藏富士寛、甲元眞之、佐藤伸二、白石太一郎、
谷口義介、富樫卯三郎、中原幹彦、三島格、村井真輝、柳沢一男

註

- 1、a 富樫卯三郎「周辺の遺跡から見た西岡台」宇土城跡（西岡台）、宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集、1977年。
b 富樫卯三郎「古墳の立地と周辺の遺跡」向野田古墳、宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集、1978年。
- 2、a 佐田茂「大宰府成立前夜における地方豪族の動向」『九州歴史資料館開館十周年記念 大宰府古文化論叢』上巻、吉川弘文館、1983年
b 佐藤伸二「先史・原史時代」『豊野村史』1991年。
c 甲元眞之「古墳時代首長系譜の類型化—九州での事例的考察—」『西谷真治先生古稀記念論文集』西谷真治先生の古稀をお祝いする会編（勉誠社）、1995年。
- 3、ここで述べる後期とは、前方後円墳集成編年の8・9・10期を指すが、これに続く終末期についても必要に応じて述べる。
近藤義郎編『前方後円墳集成、九州編』山川出版社、1992年。
- 4、中原幹彦「熊本の古墳時代須恵器素描—新発見窯跡資料の紹介をかねて—」『肥後考古』第9号、肥後考古学会、1996年。
- 5、a 八女古窯跡調査団『塚ノ谷窯跡群』『中尾谷窯跡群』『菅の谷窯跡群』『立山山窯跡群』1969年～1972年（小田富士雄編年案）。
b 中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房、1981年。
- 6、a 濱田耕作・島田貞彦・梅原末治「肥後国宇土郡緑川村の古墳」『九州における装飾ある古墳』京都帝国大学考古学研究報告第3冊、1919年
b 平山修一「仮又古墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第6集、1982年。
- 7、宇土市教育委員会編「宇土半島基部古墳群」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第15集、1987年。
- 8、註4書に同じ。
- 9、高木恭二「石棺式石室と肥後—宇土半島基部における源流的要素—」『古代の出雲を考える』8、横穴式石室にみる山陰と九州、1995年
- 10、川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、1978年。
- 11、a 小田富士雄「横穴式石室の導入とその源流」『東アジア世界における日本古代史講座』4、朝鮮三国と倭国、学生社、1980年。
b 出雲考古学研究会「石棺式石室の研究」『古代の出雲を考える』6、1987年
c 角田徳幸「石棺式石室の系譜」『島根考古学会誌』第10集、1993年。
- 12、松本健郎「生産遺跡基本調査報告書II—須恵器窯跡・瓦窯跡・陶磁器窯跡—」熊本県文化財調査報告第48集、1980年。
- 13、高木恭二「肥後」『全国古墳編年集成』（第2刷）、雄山閣出版、1997年。
- 14、白石太一郎氏の指摘によって見直しを行なった。
- 15、甲元眞之註2c書に同じ。
- 16、三島格ほか「古墳時代」『城南町史』1965年。

3 刳抜玄門について

藏富士寛

刳抜玄門とは板状の石材の中央をくりぬき、石室入口としたもので、一枚石の中央をくりぬいたものや、二枚の板石をコの字・L字状にそれぞれ加工し、それらを組み合わせてつくったものがある。構造の特異性より、幾度か注目を集め、集成も行われたが[村井1979]、近年では出雲地域における石棺式石室との関連からさまざまに論じられている[西住1993 角田1993]。中でも角田氏は出雲地域における石棺式石室の系譜を考察するうえで、横口式家形石棺など九州における古墳とのつながりについて論じており、刳抜玄門の存在を石棺式石室と九州の古墳との関連を示唆するものとして評価している。刳抜玄門は石棺式石室に通有のものであり、肥後地域で同様の玄門構造をもつ横穴式石室が存在することは、両地域間における何らかのつながりを想起させるものではある。石棺式石室の刳抜玄門はそもそも横口式家形石棺の横口部に起源をもつものと考えられており[山本1964]、九州における刳抜玄門の系譜を考えるには、江田船山古墳などにみられる横口式家形石棺を含めて検討して行く必要がある。以下に肥後地域における刳抜玄門を有する古墳についてみていくことにしたい。

九州において刳抜玄門を有する古墳は肥後地域にのみ存在し、現在では21例が知られている[高木1995] (第42図)。主体部の構造としては、1)妻入横口式家形石棺 2)通有の横穴式石室 3)玄室各壁体が1石もしくは数石で構成され、玄室が石槨状を呈するもの の3種に分けることができる。この中で、最初に出現するのは、1)の妻入横口式家形石棺である。出土遺物から、江田船山古墳や石之室古墳は5世紀後半～末葉(田辺編年TK23～TK47型式併行期[田辺1966])に位置付けられる。現在、妻入横口式家形石棺は肥後地域で10例存在し[長谷部1995]、その存続期間も江田船山古墳・石之室古墳の5世紀後半から下益城郡城南町塚原古墳群中に存在する北原1号墳の6世紀後半(TK43型式併行期)までと、ほぼ1世紀にわたる。この中で石棺入口の構造が判明しているのは上述の2古墳のみであり、他の石棺式石室においても、このようくりぬきによる入口を備えている可能性を考える必要があろう。

続いて横穴式石室に刳抜玄門が採用されるわけであるが、年代がある程度推測されるもので、最も古くさかのぼるものは大野窟古墳であり、石室構造から6世紀中葉～後半の年代が考えられる。そして3)の江田穴観音古墳や鬼の釜古墳にみられるように7世紀前葉～中葉まで刳抜玄門を有する古墳は築造され続ける。

このように九州において、刳抜玄門の最古式のもの横口式石棺の横口部であることが理解できるが、では肥後地域にみられる横穴式石室の刳抜玄門と横口式石棺の横口部との関係は、どのように理解すればよいのであろうか。まず、玄門部立石を内側に突出させて石室袖部を形成するいわゆる九州型石室では刳抜玄門でなくとも、切石を組み合わせる袖部(両袖石・楣石・梱石)を構成して、実際刳抜玄門と同様の効果をもたらしているものが存在する。したがってこの場合、くりぬくか組み合わせるかという両者の違いは単なる技法上の問題に過ぎず、「刳抜玄門」であることにさしたる意味がない可能性があることには注意する必要がある。

横穴式石室が刳抜玄門をもつことの意味について、最も注目すべきは二重玄門の存在であろう(第46図)。刳抜玄門を有する古墳で、二重玄門をなすものは4古墳存在する。この場合、通有の袖部に刳抜玄門を付設するという形で存在するのであるが、まず通有の袖部と刳抜玄門の位置について検討してみると、通有の玄門の奥(玄室側)に刳抜玄門を配するのは、大野窟古墳のみであり、他の3基の古墳(天福寺裏山2・3号墳・桂原1号墳)は通有の袖部の前(石

室入口側)に刳抜玄門を設置する。大野窟古墳は通常の横穴式石室における二重玄門と全く同じ体裁を取るものであり、単に奥側の「袖部」が1石くりぬきになっているに過ぎない。ここで強調したいのは、後者であり、これらは通有の袖部の外側から刳抜玄門をはめ込み、視覚的にも「くりぬき」であることを十分に訴える構成となっている。また石室構造上、後ろに控える袖部が十分に楣石を支えており、刳抜玄門をその前方にはめ込むことに構造上の必然性はない。このような二重玄門の存在は刳抜玄門が単なる切石を組み合わせた玄門の代用としてではなく、「くりぬき」であること自体が重要な意味をもつことを示している。つまり意識のうえで「くりぬき」玄門が必要とされたのであり、したがって、横穴式石室における刳抜玄門の出現には、それ以前における同様の施設、つまり、妻入横口式石棺における「刳抜玄門」からの影響を想定する必要がある。

妻入横口式石棺と刳抜玄門

このように横穴式石室の刳抜玄門においても妻入横口式石棺との関連がうかがえることが分かった。九州では現在妻入横口式石棺が15例が確認されているが、特に肥後中部(緑川中流域、現在の下益城郡松橋・城南町周辺)への集中が目立つ。妻入横口式石棺の中で、くりぬきにより入口部をつくりだすのは、確実に分かっているもので、石人山古墳、浦山古墳、西隈古墳、江田船山古墳、石之室古墳の計5基がある。横穴式石室の刳抜玄門と妻入横口式石棺のそれとのつながりを如実に示すものとして、玄門に施された閉塞石受けのくり込みがある。入口構造の判明している5古墳のうち、閉塞石受けのくり込みを有するものは石人山古墳、江田船山古墳の2古墳である。5古墳の石棺形態をみると、石人山古墳、江田船山古墳は九州家形石棺分類Ⅱ類に、浦山古墳、西隈古墳、石之室古墳はⅣ類にそれぞれ相当する[佐田1972]。Ⅱ類の石棺は菊池川流域で盛行し、屋根形棺蓋に両小口部に一つずつ縄掛突起を有する舟形石棺につながりを持ち(高木恭二氏による石棺分類で北肥後Ⅰ型に相当[高木1994])、Ⅳ類はいわゆる環状縄掛突起を有する石棺で、肥後南部に分布の中心をもつものである[高木1979・80]。このように閉塞石受けのくり込みは肥後北部(菊池川流域)およびその地域的な特徴を同じくする石棺に限られ、肥後中・南部ではくり込みが施されないことが分かる。

次に横穴式石室における刳抜玄門の方をみると、閉塞受けのくりこみは4古墳(八角目3号墳・江田穴観音古墳・天福寺2・3号墳)において認められる。これらの古墳も菊池川流域に2古墳(八角目3号墳・江田穴観音古墳)、白川下流域に2古墳(天福寺2・3号墳)と白河以北に限られ、緑川以南の肥後中・南部地域には認められない。特に多くの刳抜玄門を有する横穴式石室が存在する宇土半島基部地域において、くりこみを有する刳抜玄門が1例も存在しないのは注目すべきことである。このように刳抜玄門と妻入横口式石棺の入口部との関連はこのような閉塞受けの加工方法においても現れている。

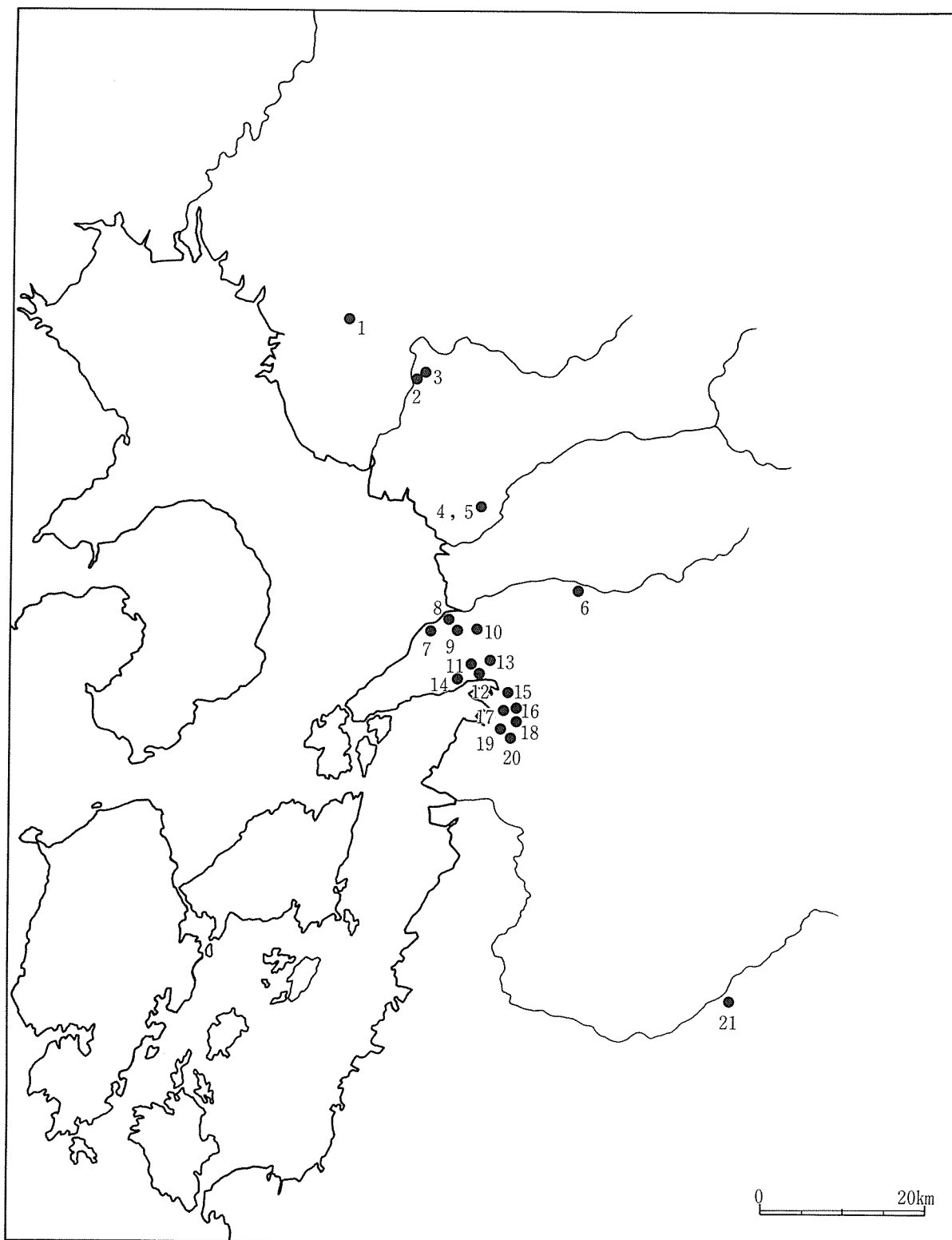
石室工人と石棺工人

肥後地域における舟形石棺は地域毎に形態的な特徴を有し、それは石棺工人集団のまとまりをある程度反映しているものであろう。その形態的な違いは一部家形石棺にも受け継がれているのは前述した通りであり、刳抜玄門における閉塞受けのくりこみの有無もこのような工人集団の違いを表しているものと捉えることができよう。また閉塞受けのくりこみという横穴式石室における刳抜玄門にみられた加工のありかたは、妻入横口式石棺にもそのまま認められ、横穴式石室における刳抜玄門の製作には、石棺製作に携わった工人の関与が想定できる。

肥後地域では舟形石棺の製作が盛んであり、その素材である阿蘇溶結凝灰岩の加工に習熟した工人が多数存在したことは容易に想像できる。肥後中・南部では6世紀初頭から前葉に、国越古墳（宇土郡不知火町）や物見櫓古墳（八代郡竜北町）にみられるような切石凝灰岩を多用する横穴式石室が築造され、以後、前方後円墳など多くの古墳の主体部として盛んに造られるようになるが、このような石室が構築される背景にはこれら凝灰岩の扱いに長けた石棺工人の関与が十分考えられる。肥後地域において、舟形石棺は5世紀代でその製作がほぼ終了し、家形石棺も6世紀になると、その多くが平入横口式石棺（石屋形）に変化する。石棺自体の製作は下火になって行くのであり、それに変わるものとして凝灰岩切石による横穴式石室の築造があるのであろう。石棺工人の横穴式石室築造に対する積極的関与、横穴式石室における刳抜玄門の採用は、如実にこのことを示している。

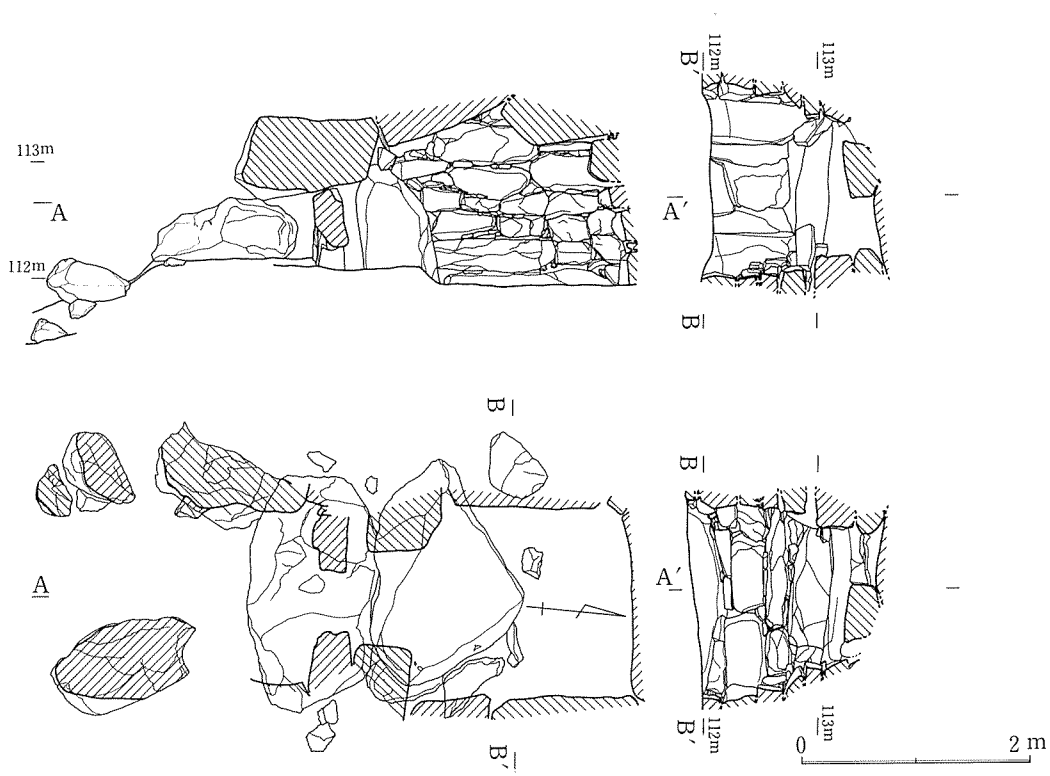
参考文献

- 角田 徳幸 「石棺式石室の系譜」『島根考古学会誌』第10集、1993年
- 佐田 茂・高倉 洋彰 「九州の家形石棺」『筑後古城山古墳』古城山古墳調査団、1972年
- 高木 恭二 「環状縄掛突起を有する石棺について(1)(2)」『熊本史学』第53・54号、1979・80年
- 「九州の刳抜式石棺について」『古代文化』第46巻 第5号、1994年
- 「石棺式石室と肥後—宇土半島基部における源流的要素—」『横穴式石室にみる山陰と九州—石棺式石室をめぐって—』古代の出雲を考える8、1995年
- 田辺 昭三 『陶邑古窯址群 I』研究論集第10号 平安学園考古学クラブ、1966年
- 西住欣一郎 「九州における横穴式石室の様相—刳抜玄門を中心として—」『肥後考古学会第204回例会資料』、1993年
- 長谷部善一 「第IV章 遺構と遺物」『竈門寺原遺跡』熊本県文化財調査報告書 第149集 熊本県教育委員会、1995年
- 村井 真輝 「第4章 B地区(岩立C古墳)」『五ツ穴横穴群』熊本県文化財調査報告 第34集 熊本県教育委員会、1979年
- 山本 清 「古墳の地域的特色とその交渉—山陰の石棺式石室を中心として—」『山陰文化研究紀要』5号、1964年

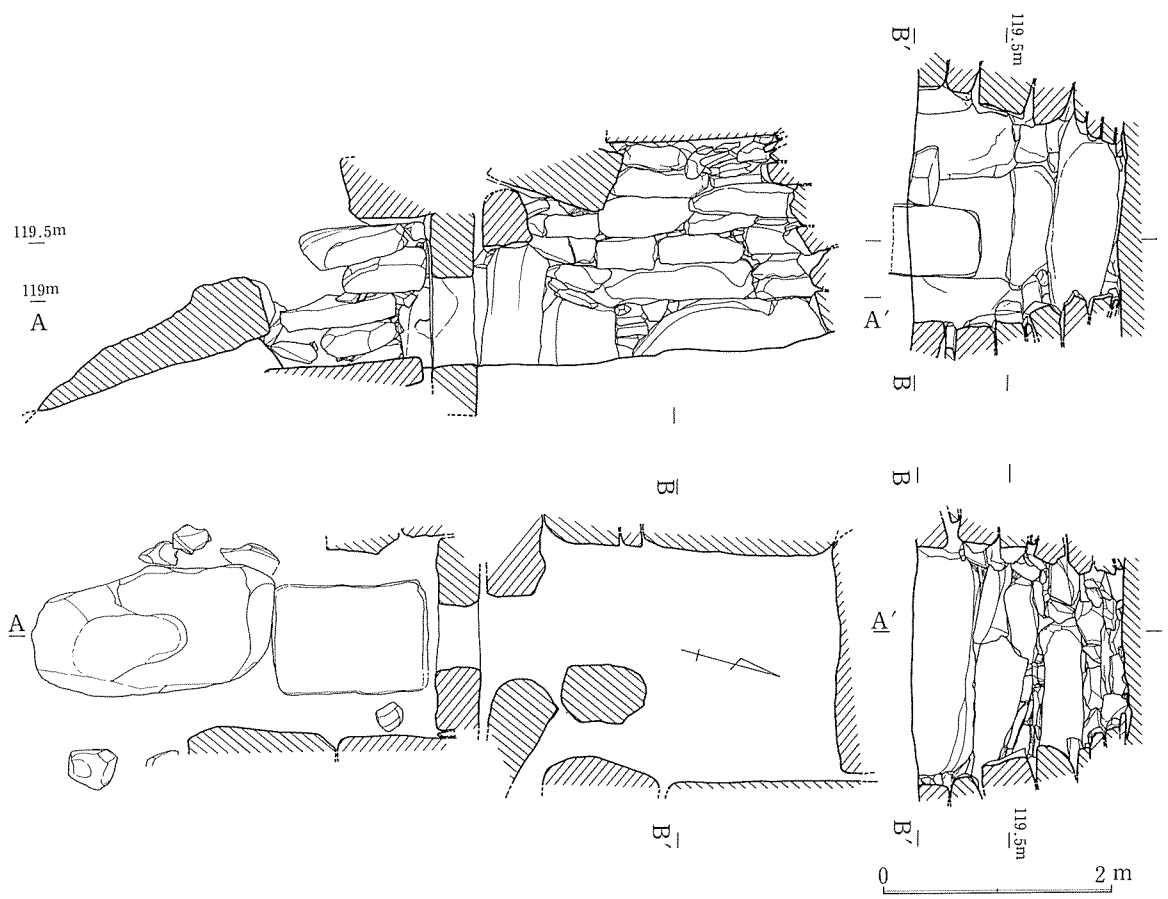


- 1 : 八角目 3 号墳 2 : 江田船山古墳 3 : 江田穴観音古墳
 4・5 : 天福寺裏山 2・3 号墳 6 : 石之室古墳 7 : 御殿山古墳
 8 : 梅崎古墳 9 : 城塚古墳 10 : 椿原古墳 11 : 不知火塚原 2 号墳
 12 : 神の元 2 号墳 13 : 御領東原古墳 14 : 桂原 1 号墳 15 : 年の神 1 号墳
 16 : 大野窟古墳 17 : 六反田古墳 18 : 岩立 C 古墳 19 : 上平原古墳
 20 : 一ト口坂古墳 21 : 鬼ノ釜古墳

第46図 剝抜玄門を有する古墳分布図



天福寺裏山 2号墳



天福寺裏山 3号墳

第47図 天福寺裏山古墳群石室実測図

4 椿原古墳の線刻壁画について

西山由美子

濱田 智美

椿原古墳の羨道右側壁にみられる装飾は、釘状の金属製工具で線刻を施した、いわゆる自由画風線刻画⁽¹⁾と呼ばれているものである。自由画風線刻画の文様としては、船・格子目文・人物・木の葉・鳥などがあるが、当古墳では、帆状の文様と格子目文が認められる。椿原古墳周辺には、例えば桂原1号墳や仮又古墳⁽²⁾など、船の文様をもつものが多く、海上交通の要所である宇土半島基部という地理的位置も考慮して、椿原古墳に施されたこの帆状の文様は船の一部、つまり船に関連する文様として、ここでは把えておきたい。

以下、九州における船の文様と格子目文をもつ古墳（横穴墓を含む）を集成し、その分布傾向をみていく。

船の文様

船の文様をもつ古墳の分布には、3カ所の集中地域が確認できる。①椿原古墳を含む宇土半島基部地域、②佐賀県の六角川・塩田川に挟まれた杵島山系の丘陵地帯、③長崎県の壱岐地方である。①の地域は有明海・不知火海に面しており、縄文時代には貝塚が多く形成されていることから、海は以前から生活に深くかかわっていたと考えられる。②の地域は①と同じく有明海に面しているだけでなく、六角川・塩田川の流域でもあり、③の地域は海に囲まれた島であることから、①②③いずれの地域も海や川にかかわり、船が重要な役割を果たしていた地域といえる。

格子目文

格子目文をもつ古墳の分布には、2カ所の集中地域が確認できる。前述した船の文様をもつ古墳の集中する②の地域と、佐賀県の晴気川・多久川の流域である。宇土半島基部では船の文様にみられるように自由画風線刻画を有する古墳が数多く存在しているが、格子目文は不知火塚原1号墳につづき、椿原古墳が2例目である。不知火塚原1号墳⁽³⁾の格子目文（第48図）は旗竿にかかげた旗旌と把えられているが、当古墳の格子目文には旗竿と認められるものや、格子目文を囲むような線がみられず、その意味は不明である。

不知火塚原1号古墳と椿原古墳の文様は、帆、格子目状の表現ともに類似しており（第48図）、これらの古墳の密接な関係が想定できる。また、この二つの古墳以外に船と格子目双方の文様をもつ古墳には、佐賀県の勇猛寺2号石室、妻山4号墳⁽⁴⁾、湯崎2号墳、穴大師古墳がある。これらはいずれも六角川・塩田川に挟まれた杵島山系の丘陵地帯に集中しており、これら地域と椿原古墳の存在する宇土半島基部との海上交通を主とした盛んな交流を偲ばせる。

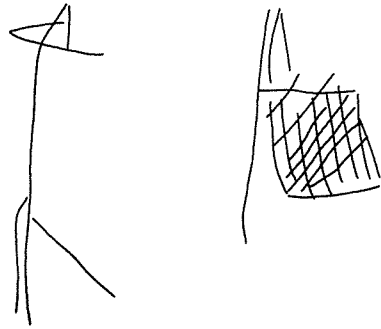
註

(1) 森貞次郎『装飾古墳』教育歴史新書41 教育社、1985年。

(2) 平山修一『仮又古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第6集 宇土市教育委員会、1982年。

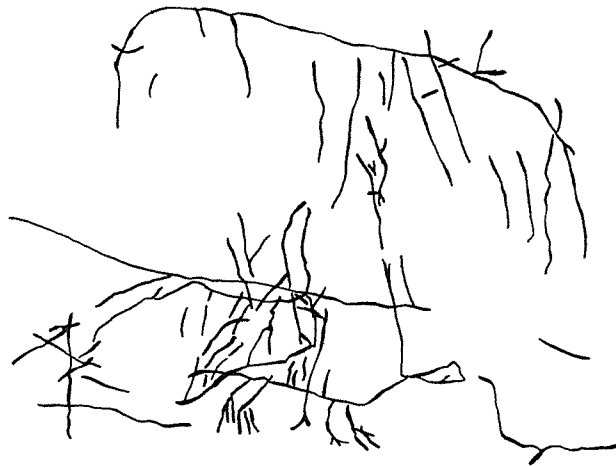
(3) 三島格「不知火塚原1号古墳」高木正文編『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告書第68集 熊本県教育委員会、1984年。

(4) 渡部俊哉「妻山古墳群4号墳」白石町文化財調査報告書第7集、白石町教育委員会、1994年。



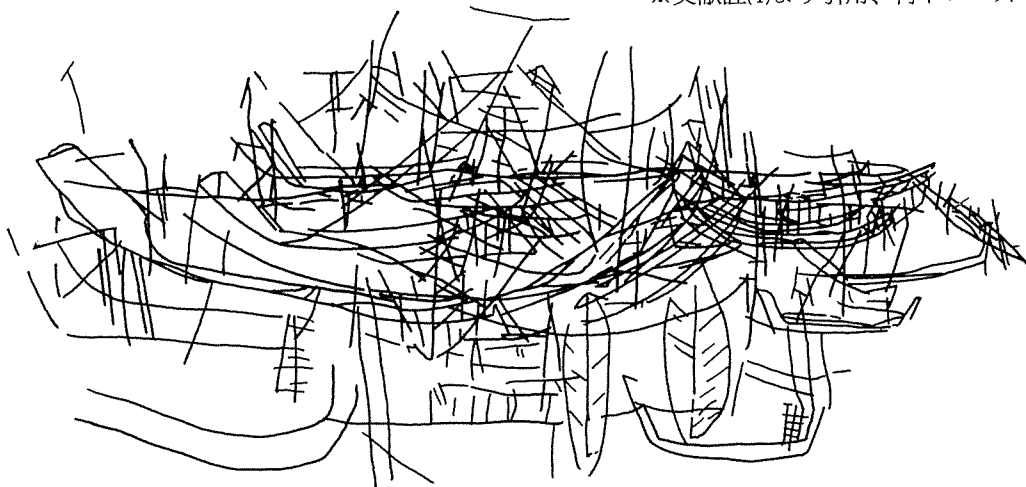
不知火塚原1号古墳裝飾実測図 (S=1/3)

※文献註(3)より引用、再トレース



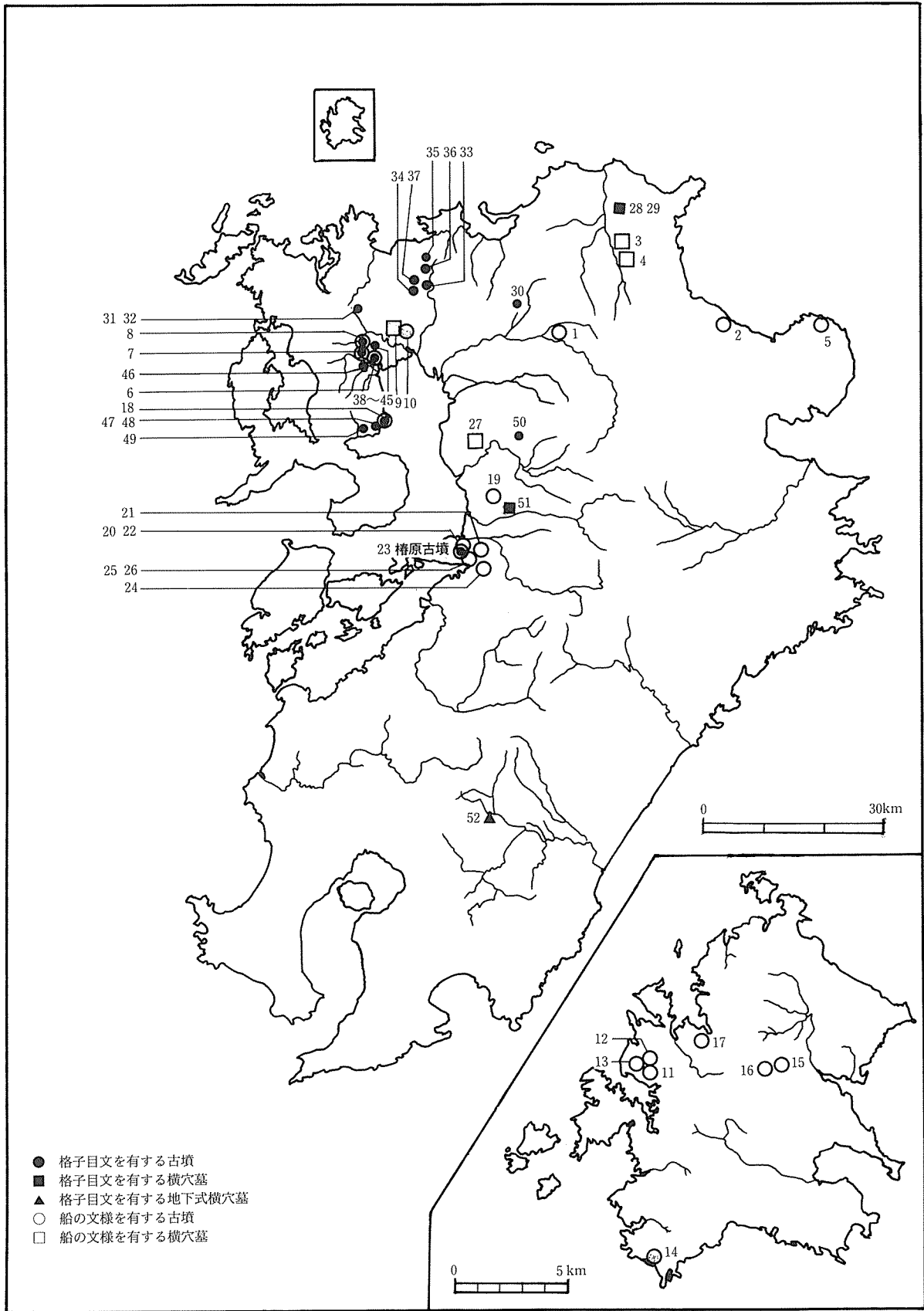
妻山4号墳裝飾実測図 (S=1/6)

※文献註(4)より引用、再トレース



坂又古墳裝飾実測図 (S=1/12) ※文献註(2)より引用、再トレース

第48図 線刻壁画実測図



第49図 線刻壁画古墳分布図

VI 結 語

椿原古墳は今回農業公園として再開発される運びとなり、公園の一角に古墳を復元整備すべく、宇土市教育委員会の依頼を受けて、熊本大学文学部考古学研究室が発掘調査を行った。今回の発掘では、3次にわたる延べ一カ月程の調査であったが、熊本県における古墳時代のいわゆる終末期を考えるうえで、重要な多くの知見、そして問題点を得ることができた。以下にそれらを列記し、まとめにかえたい。

(1) 墳丘について

今回、古墳の全面的な発掘調査を行った結果、墳丘が長辺（石室主軸側）19m、短辺18mの略方形を呈し、山側には幅1.2～2.3m、深さ1m程の周溝がコの字形に巡ることが判明した（第13図）。墳丘は各辺がやや膨らみをもち、また隅部が丸みを帯びることから、当古墳をいわゆる方墳と捉えるか否かについてはまだ若干の問題を残しているが、墳丘端部の列石が直線的に施されている状態を考えると少なくとも円墳もしくは墳丘自体が円形を指向したものではないことは明らかであり、本報告では椿原古墳を方墳と捉えておきたい。当古墳と近接した時期に相当すると考えられる八代郡宮原町岩立C古墳の周溝は6～8の多角形状を呈しており⁽¹⁾、このような不定形の墳丘形態こそ、当該期の特徴であるともいえる。熊本県下において方墳は現在、鹿本町茶臼塚古墳⁽²⁾を挙げることができるが、これは古墳時代前期に相当するものであり、古墳時代終末期としてはこの椿原古墳が初めての例となる。当該期の古墳で墳丘全体の構造が明らかになったものは少なく、今後の調査の進展を期待したい。

(2) 列石について

古墳時代終末期に相当する古墳で、列石の存在が確認されているものは宇土市恵塚町に所在する仮又古墳⁽³⁾のみである。仮又古墳は椿原古墳に後出する7世紀中葉に位置付けられ、無袖の横穴式石室を内部主体とする。封土の大部分が流失しているが、トレンチ調査の結果、3段の列石が巡らされていることが判明した。列石は古墳北側・東側の盛土の多い低地部分にのみ存在し、明らかに封土流失を防ぐ目的で施されていることが分かる。この土留めを主目的とする列石の在り方は椿原古墳における列石のそれと同様であるといえる。しかし椿原古墳における石室前面の列石は直線的にしかも比較的高さを有した石積みが行われており（第14図）、ここでは土留めの他に、古墳の正面観を意識した列石である可能性も考えておきたい。いずれにしても当該期の列石はこの2例のみであり、類例の増加を期待したい。それによって、後期古墳における同様の施設⁽⁴⁾との関連についても考察する必要があるだろう。

(3) 主体部（横穴式石室）について

椿原古墳の主体部は単室構造の横穴式石室であり、刳抜玄門という特異な玄門部を有している（第16図）。椿原古墳の石室自体には安山岩を用いているが、この刳抜玄門には阿蘇熔結凝灰岩（阿蘇ピンク石）を使用しており、この阿蘇ピンク石は高木恭二氏によって、その産地や古墳時代における使用状況などが詳細に論じられている⁽⁵⁾。この刳抜玄門は江田船山古墳（玉名郡菊水町）などの妻入横口式石棺の横口部にその初現を求めることができ、石棺・石室そのいずれにおいても形態上（閉塞石受けのくりこみの有無）の地域的特徴は変わらない。つまり椿原

古墳の石室築造には妻入横口式石棺を製作していた石棺工人が関与しているものと考えられる。また宇土半島基部地域では石室石材として凝灰岩切石を多用する古墳が前方後円墳に限られることが判明しており（V考察2参照）、凝灰岩切石を使用する石室（国越古墳）と安山岩・砂岩（塚原平1号墳など）を使用する石室と階層的に使い分けがなされていた可能性も考えられる。このことには凝灰岩切石石室の築造に密接に関与していたと考えられる石棺工人の在り方も反映しているものといえよう（V考察3参照）。

(4) 装飾について

椿原古墳では羨道右側壁には線刻壁画が、左側壁には浮彫による「円文」がそれぞれ施されている（第18図）。線刻壁画はそのモチーフを明らかにしがたいものばかりであるが、矢印状のものや格子目状のものが存在する。前者は「舟」の文様とのつながりも考えられ、両者とも環有明海地域を中心とした線刻壁画との共通性を強く有するものである。また文様自体も宇土郡不知火町の塚原1号墳⁽⁶⁾との共通点を有しており、椿原古墳の線刻も九州における線刻壁画の脈絡の中で把握することができる（V考察4参照）。

「円文」はその周囲がくぼみ、円形に浮き出ているもので、装飾として捉えることができるかは若干の疑問が残る。九州では周囲を敲きくぼめ、同心円状の文様を浮かび上がらせるという技法が存在していることが知られ⁽⁷⁾、現在5例が確認されている。椿原古墳の近在では宇土郡不知火町の桂原1号墳の奥壁に描かれた同心円文を挙げることができる。椿原古墳の「円文」はこれらの装飾とのつながりも想定することができよう。ただし、これら同心円文にみられるような明確な敲打痕は、椿原古墳の「円文」には認められない。

(5) 出土須恵器について

椿原古墳では周溝内より、多くの土器が出土した。大半は須恵器であり、特に有蓋高杯の多さが顕著である。このような器種構成の特異性に、この地域独特の古墳祭祀の在り方をみることもできる。有蓋高杯は大きく2時期に分けることができ、熊本での須恵器編年が十分に確立したとはいえない現状から、あえて陶邑編年を当てはめれば、前者（有蓋高杯分類Ⅰ類）がTK209型式、後者（Ⅱ・Ⅲ類）がTK217型式に相当しよう。出土している蓋杯もTK217型式に相当し、椿原古墳の出土須恵器はTK209～TK217型式の範疇で押さえられることが分かる。周辺で表面採集されたと考えられる須恵器もこの型式幅と矛盾するものではない。したがって椿原古墳の実年代としては7世紀前半ということになる。

これら須恵器の大半が朱斗叶松窯跡など宇土郡内の窯跡に産地を想定できることが、三辻利一氏らの分析・考察によって明らかにされた（V考察1参照）。しかし、ごく少数ではあるが他地域から搬入されたと考えられる須恵器も存在する。例えば、杯Gタイプと呼ばれる蓋側にかえりを有する蓋杯は、胎土の分析結果によると、椿原古墳出土須恵器の大部分が示す領域（宇城領域）から大きく外れていることが分かる。つまり、これら製品は宇土郡内の窯跡以外から持ち込まれたものと考えられ、このように古墳出土須恵器の産地毎、器種毎の動態を考えることは、古墳時代社会を考えるうえでの重要な手掛かりとなりえよう。

(6) 椿原古墳と周辺古墳との関連

椿原古墳には近接して存在する古墳がなく、丘陵の反対側斜面に数基が存在するのみである（第2図）。このような後・終末期古墳の散在傾向は宇土半島基部のみならず、熊本県全体にお

いても指摘できることである。それでも宇土半島基部全体を見渡せば、多くの後・終末期古墳を見いだすことができる。その分布は大きく4つの地域に分けることができ、その各地域毎に前方後円墳の有無や古墳の多寡などの特色を有している（V考察2参照）。またこれら4地域は律令制下の宇土郡四郷（大宅郷・林原郷・諫染郷・桜井郷）に比定でき、ここにも古墳時代における古墳の在り方を「郡」や「郷里」単位でみることの有意性を指摘することができよう⁽⁸⁾。

このように今回の椿原古墳の調査によって、熊本県下における古墳時代終末期についての幾つかの知見を得ることができた。しかし、当該期の古墳では実態の明らかなものがあまりに数少ない。今後の古墳復元整備に向けて、さらなる検討が必要であろう。（甲元眞之・藏富士寛）

註

- (1) 村井真輝「第4章B地区（岩立C古墳）」『五ツ穴横穴群』熊本県文化財調査報告第34集 1979年
- (2) 中村幸史郎「1. 茶臼塚古墳発掘調査報告書」『頂塚古墳発掘調査報告書』鹿本町文化財調査研究報告第1集 1986年
- (3) 平山修一『仮又古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第6集 1982年
- (4) 熊本市小松山1号墳、植木町横山古墳などの後期古墳では墳丘裾部に列石が存在することが確認されている。このような後期古墳にみられる列石が椿原古墳・仮又古墳における終末期古墳の列石とどのようなつながりをもつのか、考慮する必要があるだろう。
- (5) 高木恭二「石棺式石室と肥後—宇土半島における源流的要素—」『横穴式石室にみる山陰と九州』古代の出雲を考える8 出雲考古学研究会 1995年
- (6) 三島格「不知火塚原1号古墳」高木正文編『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 1984年
- (7) 久山高史「黒谷2号墳の同心円文様について」『黒谷・水呑古墳群』鳥栖北部丘陵新都市関係文化財調査報告書（1）佐賀県教育委員会 1993年
尚、5例は以下のとおりである。
楯古墳（福岡県浮羽郡浮羽町）、倉永古墳（福岡県大牟田市倉永）、黒谷2号墳（佐賀県三養基郡基山町）、穴観音古墳（大分県日田市内河町）、桂原1号墳（熊本県宇土郡不知火町）
- (8) 甲元眞之「古墳時代首長系譜の類型化—九州での事例的考察—」『西谷真治先生古稀記念論文集』勉誠社 1995年

本報告を執筆するにあたり、須恵器の分析・考察にあたっては植木町教育委員会中原幹彦氏、熊本市教育委員会網田龍生氏、また内容全体にわたって、宇土市教育委員会高木恭二氏、熊本県教育委員会松本健郎氏、高木正文氏、九州大学西健一郎氏をはじめとする古墳研究会の皆様にご指導・御教授を戴きました。末筆ながら、記して感謝します。

図版



椿原古墳遠景
(東側より)



椿原古墳近景
(北東より)



西側トレンチ



S トレンチ西壁断面



4 区周溝断面



3 区墳丘トレンチ(1)断面



完掘後 全景



完掘後 石室正面



完掘後 石室側面



石室正面近景



石室侧面近景



3 区列石近景



3区周溝
(南東より)



3・4区周溝
(北西より)



4・1区周溝

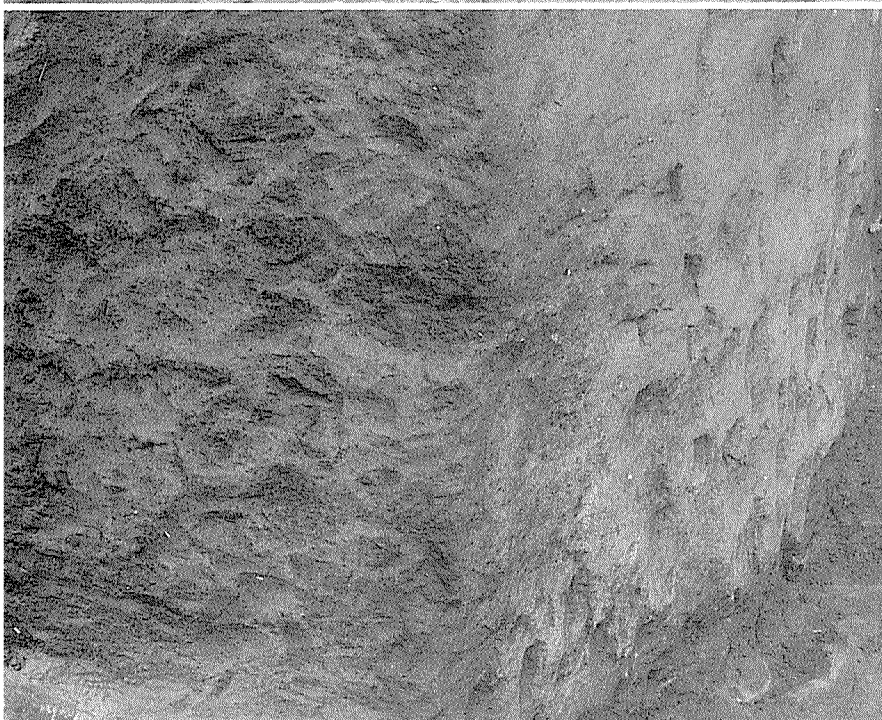


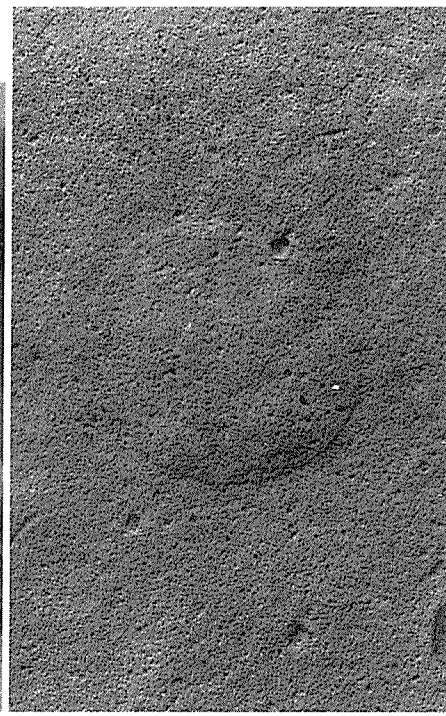
刳抜玄門(1)
(羨道側より)



刳抜玄門(2)
(玄室側より)

刳抜玄門加工痕





羨道左側壁円文



羨道右側壁
線刻壁画(上)



線刻壁画(下)



3区周溝内
遺物出土状況(1)



遺物出土状況(2)



遺物出土状況(3)

遺物出土状況(4)

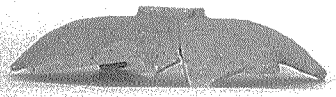


近世墓 1号

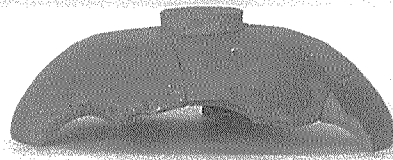


近世墓 2号

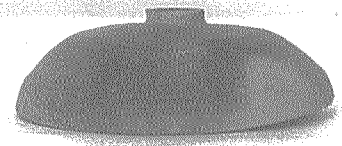




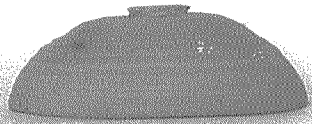
①



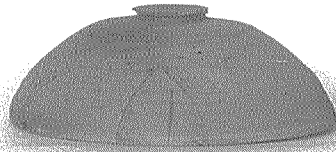
②



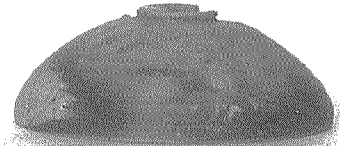
③



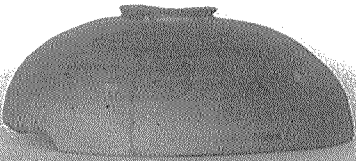
④



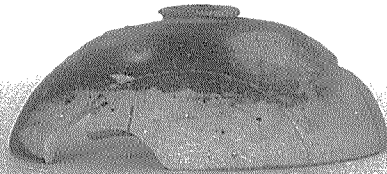
⑤



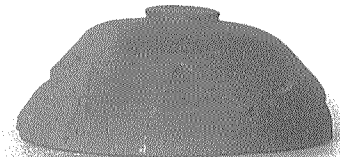
⑥



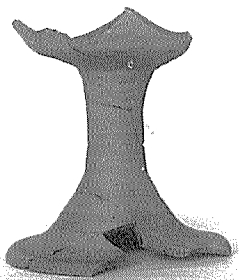
⑦



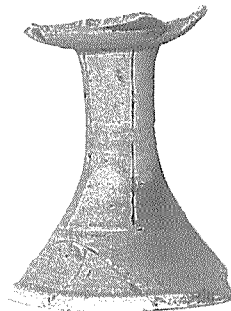
⑧



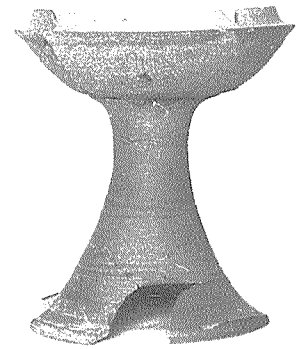
⑨



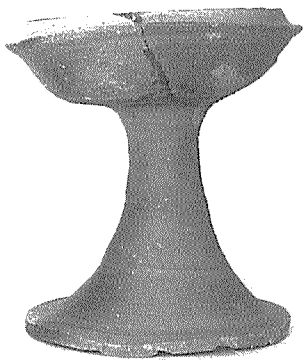
⑩



⑪



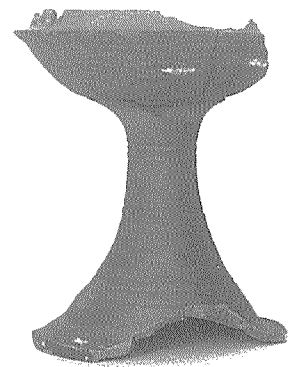
⑫



⑬



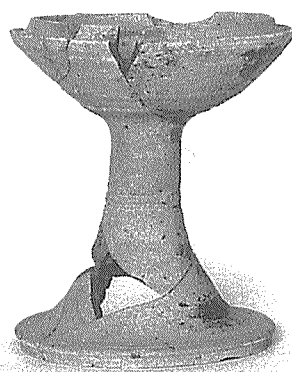
⑭



⑮



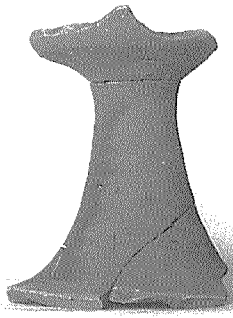
⑯



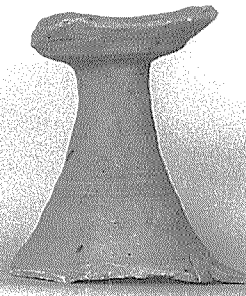
⑰



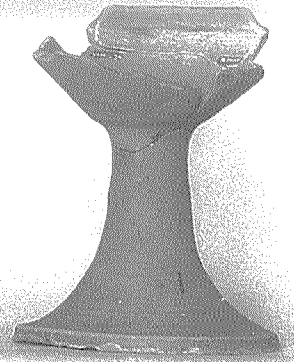
⑱



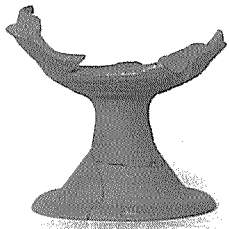
19



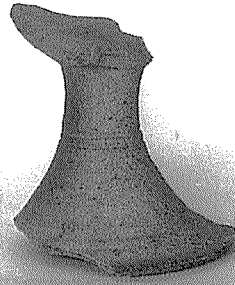
20



21



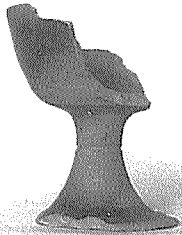
22



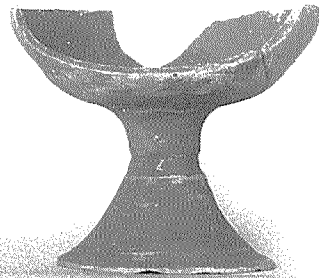
23



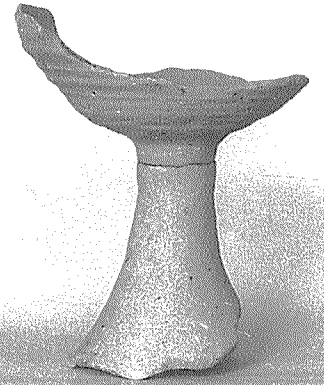
24



25



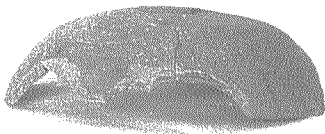
27



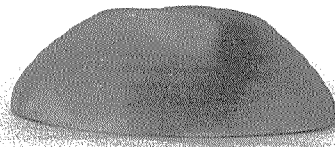
28



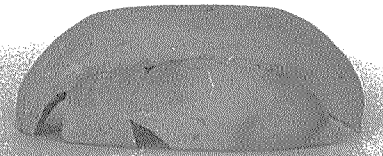
26



29



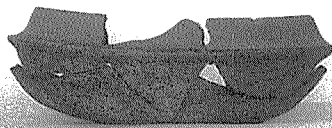
30



31



32



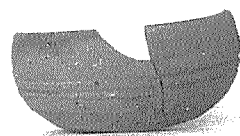
33



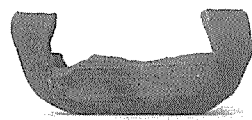
34



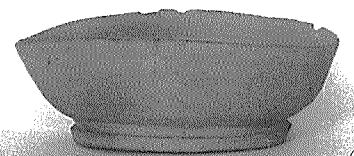
35



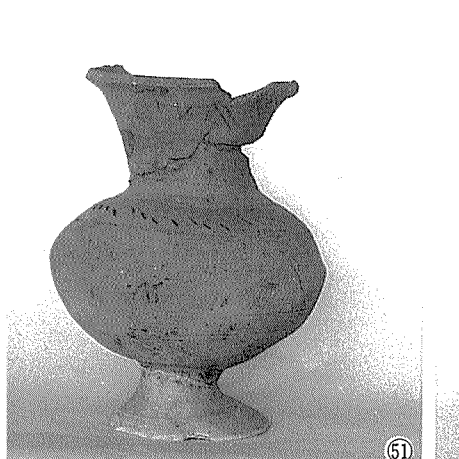
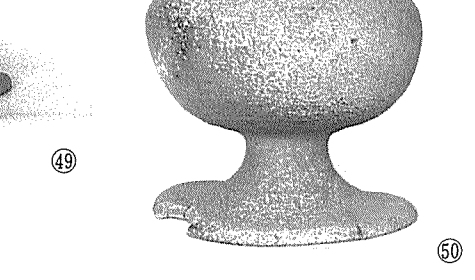
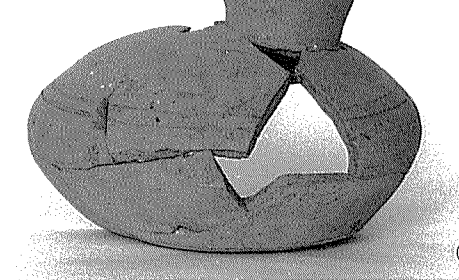
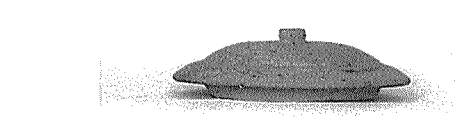
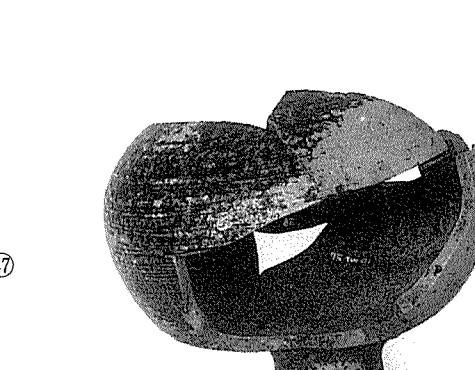
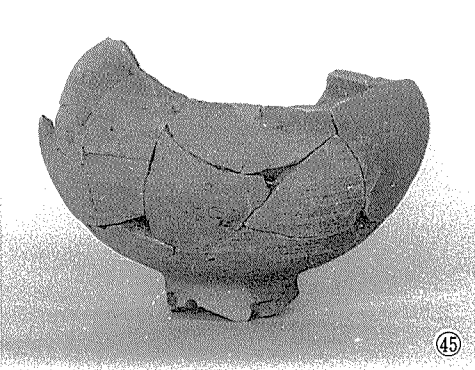
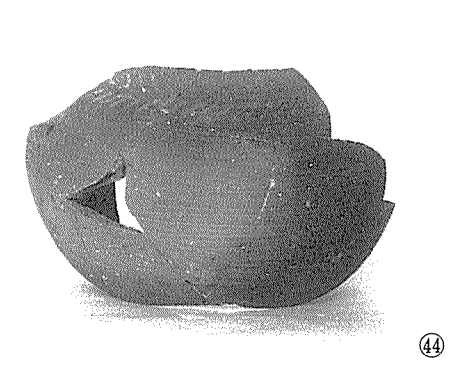
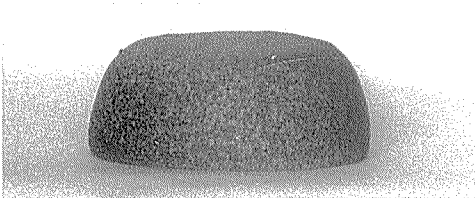
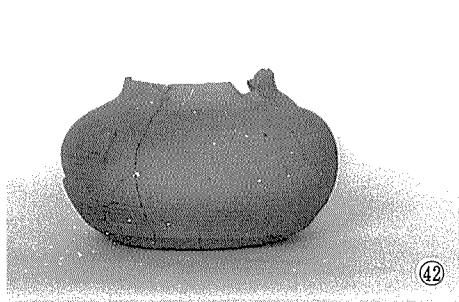
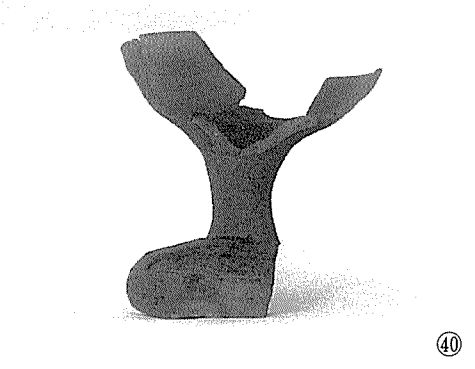
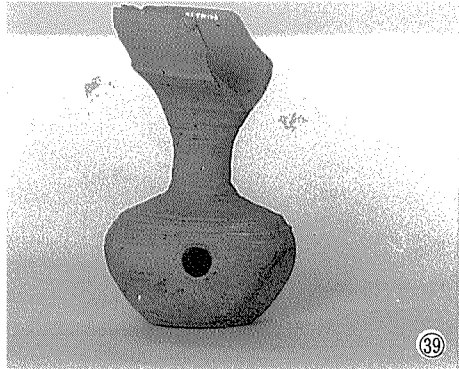
36



37

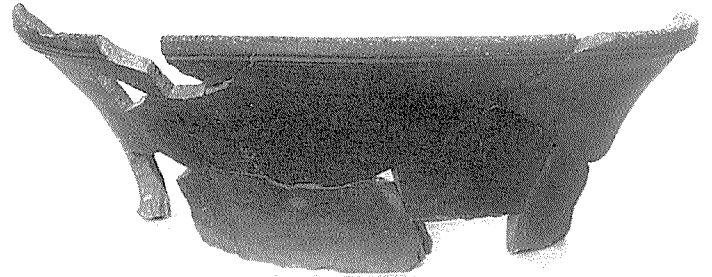


38

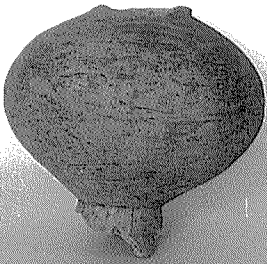




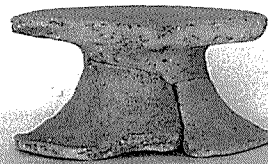
54



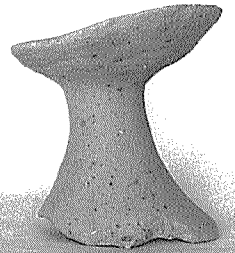
56



57



58



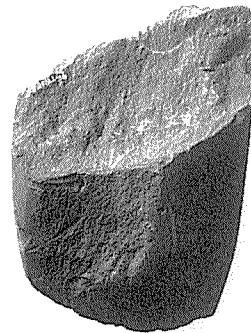
59



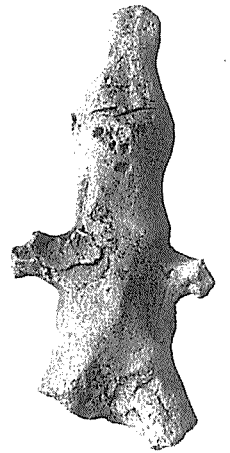
60



61



62



63

出土
遺物(4)

- ①～⑤⑥ 須恵器 (①～⑨：蓋 ⑩～⑲：有蓋高坏 ⑲～⑲：無蓋高坏 ⑲～⑳：坏蓋
 ㉑～㉒：坏身 ㉓：碗 ㉔～㉕：甗 ㉖～㉗：短頸壺 ㉘・㉙：平瓶
 ㉚～㉛：長頸壺 ㉜～㉝：甕) ㉞～㉟；S≒1/4 その他；S≒1/3
 ㉞～㉟ 土師器；S≒1/2
 ㉞ 鉄器；S≒1/2
 ㉞・㉟ 石器；S≒1/2
 ㉞ 土人形；S≒1/2

報告書抄録

ふりがな	つばはらこふん							
書名	椿原古墳							
シリーズ名	宇土市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ号	第20集							
編著者名	甲元眞之・高木恭二・木下洋介・蔵富士寛							
編集機関	熊本大学文学部考古学研究室・宇土市教育委員会							
所在地	〒860 熊本県熊本市黒髪2-40-1・〒869 熊本県宇土市浦田町51番地							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つばはらこふん 椿原古墳	宇土市椿原町 金嶽783 726-2 726-3	43211		32° 40′ 54″	130° 38′ 26″	19950801	1623m ²	学術調査
						19950811		
						19950901		
19950908								
19960820								
19960829								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
椿原古墳	古墳	7世紀	横穴式石室	須恵器 土師器	方墳			

椿原古墳

宇土市埋蔵文化財調査報告書 第20集

発行年月日 1997年3月31日

編集 熊本大学文学部考古学研究室

熊本市黒髪2丁目40番1号

発行 熊本県宇土市教育委員会

☎869-04

宇土市浦田町51番地

印刷 下田印刷

☎869-05

下益城郡松橋町古保山3511

